
反逆の名を冠するIS

田中太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

反逆の名を冠するIS

【Nコード】

N4068X

【作者名】

田中太郎

【あらすじ】

IS（Infinite Stratos）SS（仮）からタイトル変更しました

二人目？の男性IS操縦者は、イタリアの代表候補生！？
そんな彼が、ISの物語をどう引っかけ回すのかは、作者にもわからない…

現在第4章 タイトル更にちょびつと変えました。
あんまり変わってないので、大丈夫だと思いますが…

プロローグ（前書き）

ここまで来るということは寛大な心の持ち主さんですね？

ホントに駄文ですよ、（――）<
いいんですよ？

しつじいですがいいですね？

ブログ

三月中旬 今日高校入試の日で藍越学園の試験会場で受験生2人が迷っていた

「なんでこんなに分かりにくい造りしてるんだこの建物」

「ていうかいつになったら着くんだシアン？」

「安心しろ一夏 俺の長年の勘と最近の勘がもうすぐ何かやなことが起こると言っている」

「全然安心できない！？てか100パーセント勘じゃねーか！！」

「今日もいっつもみをありがとう一夏君でことでその扉を開けてみようこの辺りがあやしいと思われる」

「えーお前の勘当てにならないしな…」

「いいからあけろ一夏」

「はいはい」 ガチャ

ドアを開けるとそこには中世の鎧を思わせる機械があった

「ん？あれってISだよな？」

「ほうよくわかったな一夏のくせにあれは純日本産第二世代型IS打鉄だな」

「へーよくしってるなーって一夏のくせにつてなんだよー!」
「これ触っていいのか?」

「オイコラムシスンナ」

「さわってみよう」ペタ キイイン
高い金属音の後シアンはISを纏っていた

「……………」
「……………」あれ?」

バタバタガチャ ISの起動音を聞いて職員たちが駆けつけてきた
「あー君たちここは関係者以外立ち入りき……ん……し……?」

「あれ?君男だよね?」

「そうですよ」

「なんでIS乗ってるの?」

「さあ?わかりません?」

「うん とりあえずおりてそっちの君も触ってみて」

「……えっ!?ああはいはい」ペタ キイイン

「なんでだろう……なんで乗れるの君たちは?」

「……さあ?わかりません」

「じゃあ上に連絡取ってくるからここでまってね」タッタッタ

「.....」

「ええええええええええええええええ」

あれからすぐ偉い人たちが来ている話を聞いたかいつまんで言う

イタリア国籍を持つシアンはイタリアの代表候補生でISに乗れる男一夏はただのISに乗れる男の称号を手に入れたということそして彼らはIS学園に行くことになった

プロローグ（後書き）

ホントに駄文ですいません>m(_____)m<

感想とかもらうと感激で泣いちゃいます

次は設定を載せたいと思います

こんな駄文でよろしければ次回も宜しくお願いします

10月12日 改行しました

設定1（前書き）

とりあえず設定1まだ増えるかもです

主人公はそこそこ強い？

設定 1

藍川シアン 日本人とイタリア人のハーフイタリア国籍

藍色の髪でミディアムぐらいの長さ

身長… 180cmぐらい

体重… 65キロぐらい

容姿… 上の上でほとんど日本人違いは眼の色が青いくらいこれがコンプレックスなのでいつもはカラコンをしている また男女問わず十人が十人振り向く モデルはロスカラのライの髪を藍色にした感じ分からない人はいつか天魔の黒ウサギの鉄大兎の髪の色を藍色にした感じ

性格… 年上には敬意をはらい敬語を使う天然で鈍感

特技… 束に習って少しだけハッキングが出来るだが束と比べてなので一般的に見たらかなりできる趣味でハックすることもある

あと一夏や篝や鈴とは幼馴染あと弾

年上に好かれる

一夏の家とはお隣さん

両親はすでに他界しており唯一の肉親である兄は今現在行方不明

イメージCVは神谷浩史

あと言い忘れていましたが

更新はホントに不定期になると思います

でも行方不明になることはありません

やめる際にはやめますと言いますから）．．．（キリ

次は明日更新できると思います

設定1（後書き）

専用機が思いつかない

高機動型の機体にしようとは思っているのですが

武装が：名前もイタリア語にしくちゃいけないし

なにか良い案があったらこの駄目作者に教えてください>m
<m
(――)

10月11日後付け設定増やしました

第1話（前書き）

しばらくは一日一話で行けそうです

そして短いです

第1話

シアンと一夏は午後8時になってようやく解放された午前8時ごろから約12時間の質問攻めを受けた二人はクタクタだった
とりあえず家に帰った……………帰ったのだが……………

「あれ？なあシアン俺とお前の家の前にいるあの人たちすげえあやしいぞ！？」

シアン達の家の前には百人ぐらい居るんじゃない？ってぐらいの人がいた

「ん？あああれは……………あれは……………だれ？」

「いやしらねのーのかよ」

こんなやり取りをしていたら誰かが二人の存在に気がついた

「ん？…あれだ！おいついたぞあっちだ！！」

ダダダダダダダダ

二人の方に雪崩のように人が流れ込む

「うおおあああああああああああ」

ヒュン ドガン 当然何かが現れて人を吹き飛ばした

「……………ぶぎゃ……………」

「……………ふうやれやれ外が騒がしいから見に來ればお前達か」

誰かと思ったら……

男より男らしい漢の中の漢メンオブメンズ織斑千冬さんだった

「千冬さん（姉）！？」「

「あれ帰ってたんですか？」

「私の家だ帰ってきてもいいだろう」

「そうですよねああそうさつきはありがとうございます助けてくれて」と微笑する

こうかはばつぐんだ！

チフリーは10000のダメージを受けた

「~~~~~／／／べつ別に助けたわけではない騒がしかったから駆除しただけだ／／」

「そうなんですかでもまあ助けてもらった事には変わりはありませんにかお礼を…そうだ今度一緒に買い物でも？なにかおごりますよ」

「そっそうだなでは今度の休みにでも…」

「そんなときは一夏も行くよな？」

「……………」

「…どうした？固まって…」

「「はああ」」

「?????」

こうして夜は過ぎて行った

第1話（後書き）

ヒロインは千冬さんに決定しました（＾Ｏ＾）／

シアンが鈍感ってことにしました 後付けで済みません（＜――＞）
どうでもいいですが

タイトルは未定なのでよかったら考えてください＞m（――）m＜

専用機の名前と武装と武装の名前も募集してます

10月12日 改行

第2話（前書き）

主人公の専用機のアイディアまだ募集してます

あとなにかネタ等ありましたら教えてください> m (m <

実は火曜日からテストなのにバイトと小説しかやってないorz

第2話

シアンたちがISを動かした翌朝

またしても玄関に人だかりができていた

「（これじゃあ郵便受けに行けないな…しかたない）」

寝癖を直し着替えて外に出て行った

ガチャ ドアを開けた瞬間カメラが一斉にシアンへ向いた

「あーみなさんこれ以上うちのまわりをうろついたら警察呼びますよ？」

「……………（だまれ糞がき）」

「わかりました一社だけインタビューを受けましょう」

「……………ほんとですか!？」

「あ！でもさっき黙れ糞がきと思った方のインタビューは受けませんついでに警察呼びます」

「……………」

「おやあ？みなさん糞がきと思ったんですかあ」

これ以上ないくらいの黒い笑みを浮かべながらケータイを取り出し

110と押しかけた時

「「「「すいませんでしたっ！！！！」」」」

約百人のジャンピング土下座&すいませんでしたの大会唱

これに満足したかのように気を付けてくださいねえーと言い残しシアンは部屋に帰って行った

この場にいた約百人の気持ちは見事に一致した

藍川シアン…おそろしい子っ！

一方一夏は約百人の話を適当にあしらいながらも聞いていたようや
く終わりが見えてきたところに
シアンのところをあきらめた百人が来て一夏は死にそうな顔をして
いた

ちなみにシアンはそれを上から見ている
そして

「一夏ザマアwww」
と思ったのは秘密だ

第2話（後書き）

毎度毎度短いです

春休み編はこのぐらいの長さにしようと思います

ちなみに箒と鈴は友人ですあとついででも弾も

感想待ってます

設定2 機体設定（前書き）

アル様 e r u 様の意見を参考にしましたありがとうございます

設定2 機体設定

主人公機

イタリア製第三世代型IS「テンペストデリベリオン」

大型ウイングスラクター4機が付いており高機動戦闘を得意とする
スピードは現存するISの中でトップクラス
待機状態はリング

名前の由来

テンペストデリベリオン（以下リベリオン）はイタリアの主力機
テンペスト？型の派生形で

テンペスト？型は本来砲撃重視のパワータイプだったがリベリオン
はスピードに特化した機体で

従来のテンペスト？型とは全く逆のコンセプトで開発された事から
反逆の名を冠する

テンペストになった（テンペスト？型がパワータイプなのはオリ設定です）

武装

ジャッジメント

断罪者：グリップから銃身の手前まではリボルバー、銃身はオート
マチックという変わった銃の形状をした武装。DグレのクロスII
マリ안의武器、威力が非常に高く連射が可能

その弾丸は軌道を外されてもロックしたターゲットを追い続ける。
この時イメージインターフェイスを利用する第三世代兵器。Dグレ
を読み直していいなあと思ったので… あ！という構造な
のか？

や物理現象とかはもう無視してください。六発撃ったらリロード

が必要 一発ごとにS・Eを20くらい消費する 半分くらいwiki参照

アンタレス…アサルトライフル、リベリオンの銃器の威力は、高いが連射性に欠けるという
弱点を補うための武装。弾数が多いしかも、威力はなかなか高い。使いやすい武装。

アイザイアン・ボーン・ガン…サーマルガン…電磁誘導ではなく入力された電流のジュール熱にて弾体後方の導体をプラズマへ相変化させ、これに伴う急激な体積の増加を利用するもの。瞬間的なプラズマ化に伴う爆発を利用するため、比較的低いエネルギー量でも一定速度未満であれば高い初速が得易い代わりに、プラズマ膨張速度を超えた初速を得ることはできない wiki参照

同田貫^{どいつたぬき}…近接ブレード 子連れ狼の主人公の愛刀と同じ名前 漢字なのはブレードの開発者が「漢字ってかっこよくね？」という鶴の一声で決まった

バイルバンカー…漢のロマンとつき電磁誘導型、隠し武器

グングニル…簡単に言うと槍、どっちかというと西洋の。ランスとは違う。

後ろの方に付いたブースターを推進力にして、断罪者^{ジャッジメント}の能力をそのまま使った武器。ただし、ブースターは1回使うことに

整備が必要になる

つまり戦闘中は1回しか追尾機能を使えないと言う事。

唯一仕様の特殊才能：「ソノファビリティー」コントロールロ・コンスーモ

自身のこれを発動すると、5分間だけSEの消費を1/2に抑える
ことが出来る。

最後に機体カラーは紫で関節部分は赤です

設定2 機体設定（後書き）

今日中にもう一回更新できるかもしれません

タイトルは仮なので良いのがあったら教えてください
ネタ等も待っています

感想まっています

10月11日改稿^{ほぼバクリ}

10月12日さらに改稿

エタニティーボールは使いづらいたので削除しました

多分まだ変わります

第3話（前書き）

今回は3話と4話の二部構成です

ほんとgdgdなので読まなくてもいいです
いやむしろ読まない方がいいかも…

第3話

ある日シアンにイタリアから電話がかかってきた
なんとも専用機を作りたいからイタリアに来てほしいそうだが
しかも旅費は向こう持ちだから無償
ただでイタリアに行けるとシアンははしゃいでいた

「やあー夏!」

「おうシアンどうした今日はテンションが高いな」

「お?わかるか?今日イタリアから電話があつてな専用機を作りたいからイタリアに来てほしいんだとさしかも旅費は向こう持ちこんな
なにいいことはない」

「へえいいなーお土産頼むぜ」

「おうわかった」

「絶対だからな」

「わかつてるって」

そして当日

シアンは家の前で迎えを来るのを待っていた
3分後金持ちが乗るようなりムジンが来た

「……………まじか」

「マジです時間がありません早く乗ってください」

30分車で移動したのち飛行機で数時間かけて…

「やってきましたイタリアイエエイ」

「……………」

「……………（スルー？）」

「行きますよおいてきますよ」

「すみません（誰のせいだよ）」

そしてリムジンで小一時間やってきたのは…

「どこココ？」

「イタリア首相のお屋敷です」

「…まじでか」

「粗相のないように」

「では案内しますこちらになります」

無駄に長い廊下を進み

「ここで首相がお待ちになっておりますのでお入りくださいもう一度申し上げますが粗相のないように」

「はい…」

ギイドアを開けると

クル 椅子を回転させて初老の男が確認できた

「やあ君がシアン君だね？よくきたね疲れただろう？おいお茶をお出ししてくれ」「はいただいま」

ああシアン君そこにかけてくれたまえ」

「は、はあ失礼します」

「そんなにかしこまらないでくれたまえ」

「え！？いやしかし…」

「堅苦しいのはにがてなのでな」

「はいわかりましたですがすぐには…」

「うむまあすぐなれるだろう」

「さてと本題に入ろうか今回来てもらった理由は専用機を作るためだったね？

でも君の専用機もうほとんど完成してるんだよ」

「！？（ぼけたかこのおっさん？）」

「おどろいたかね？」

「ええまあ」

「ハハハまあ仕方ないだろう

今回君に来てもらったホントの理由は君にイタリアをよく知ってもらっためのだよ

よく知らない国のISに乗るのもいまいちだろう？

だからこのイタリアをよく知ってほしい

まあこんな理由じゃあ経費を下せないからね建前を用意したのだよ
まあ一応一度研究所の方にも顔を出しておいてくれながとすまん

今日はもう休んでくれそと車と私の部下とs pのものをまたせている
その者たちと一緒にホテルへ行ってくれああ明日もその者たちと一緒にイタリアをまわってくれ」

「わかりましたいろいろとよくしていただきありがとうございます」

「うむではな」

「はい失礼します」

ギイドアを開けまた長い廊下を進んで部下の人たちとs pの人と一緒にホテルへ行った

いろいろ疲れていたシアンはすぐにねた

イタリア旅行一日目 f i n e

第3話（後書き）

もつなにかしたいのかわからないうえgggggですねはい

イタリア旅行編は飛ばしてもいい気がします
一応感想待ってます

タイトル募集中です

第4話（前書き）

2部構成とか言いながら3部構成になりそうです

ちなみに専用機のお披露目は少しだけです

第4話

次の日シアンたちがリムジンで研究所へ行くと
某プリン伯爵のような人が出迎えた

「いらつしやう国立IS研究機関藍川シアン専用機開発部門へようこそ」

「ささじゃあとりあえずデータ取るからシュミレーターにでも乗って」

「は、はあ（よくわからない人だな）」

「ああそつだシュミレーターには君の専用機がロードされてるからね」

「え!？」

「じゃあ始めるよとりあえず初級編つと」

ポチ 地獄のシュミレーターが始まった…

ピピピ

「武装の確認はできる？」

「あ!はい」

「うんじゃあ敵を出すから適当に倒してみて」
ヒュン ラファールを纏った敵が出てきた

「じゃあまずは断罪者ジャッジメントを使ってみて」

「えーと…これか」

ジャッジメント

武器一覧から断罪者を選ぶとグリップから銃身の手前まではリボルバー、銃身はオートマチックという変わった銃が出てきた。

「??（すごい形状だな。）」

「とりあえず打ってみて」

言われた通りに打ってみる

ズガン バス 敵に命中するとかかなりSEが削られたようだった。

「うん音速で飛んでるからね威力はすごく高いよ」

こんな感じにシュミレーターを行っていった…時間も忘れて…
終わったのは夜の9時だった。

「うん良いデータとれた」

「また来るときは行ってね? シュミレーター準備しとくから。」

「じゃあ、次は最後にブリュンヒルデが出てくるような設定にしないでくださいね。」

「はいはいじゃあまたね」

「ほんとにわかったのか？」ではまた。」

疲れていたのかホテルにいたらすぐに寝てしまったシアンでした
イタリア旅行2日目 f i n e

第4話（後書き）

専用機少しだけお披露目

本格的なお披露目は原作突入後になると思います

今日はもう一回更新します

第5話（前書き）

これでイタリア旅行編は終わりです

もうすぐ原作突入します

第5話

地獄のシュミレーターを行った次の日

シアンは部下の人たちに勧められたボールでピザを頼んだ
チーズの香ばしい香りと共にピザが運ばれてきた

「（今緑色の髪をした魔女を思い出した気がする…）」
そんな事を考えながら8分割して一切れとり口に運んだときパァン
どうやら下っ端のマフィアが銃を誤射した

「じゅ銃声!？」

銃声のおかげでシアンはピザを落としてしまったピザを食い損ねた
シアンは

「オイピザオチチマツタジャーカアアアア!!!」

下っ端のマフィアをフルボッコにしていた

そしたら騒ぎを聞きつけたマフィアの上の方の人たちが出てきた

「てめえ家の者になにしとんじゃあ（イタリア語でしゃべってます）」

「

「氏ねやゴラア（イタリア語でry）」

数十人が一斉にシアンへ襲いかかったしかしドゴーン
立っていたのはシアンだけだった

そのときのシアンの一言

「食べ物への恨み思い知ったか三下ども」

今回のこの一件でシアンは一気にイタリアの裏社会で有名になった
次にトレヴィーの泉に向かったシアン一向

背を向けてコインを投げておいた

ちなみに2回投げると恋がかなうや3回投げるとその恋が終わるおまじない？があるそうです

その後コロッセオで写真を撮ったりサン・ピエトロ大聖堂でブロンズの天蓋を見たりして

イタリア旅行3日目は終わった4日目5日目（最終日）とイタリアを巡って旅をして最終日の夜

（展開が急に早くなったのは気のせいです）

ホテルにて

「（明日には日本に帰るのか…楽しかったなイタリアもうちょっと居たかったな

あ！でも次は夏に来てくれって言われてるか…一人だけならだれか連れてきてもいいって言ってたな…一夏でも連れてくか）」

こんなことを考えていたらシアンはいつのまにか寝ていた

次の日の朝早くの便で日本へ帰った成 空港に着くと行きと同じようにリムジンで帰った

家に着いてシアンは思い出した

「…あ！お土産買うのわすれた…」 イタリア旅行編…fine

第5話（後書き）

ようやく終わりました

次で春休み編は終わらせて原作突入したいと思います

感想待ってます

第6話（前書き）

3連休が終わってしまふ

しかも明日からテストどうしましょ

とりあえず更新しましょう

第6話

シアンがイタリアから帰ってきた次の日
IS学園入学が翌日と迫ってきていた

「明日からIS学園かあ…はあ…鬱だ」

「何言ってるんだよシアンすぐなれるって」

「一夏そのセリフ覚えとけよ」

「ああいいぜ」

「いったなよしじゃあなれなかったらなんかおごれよ」

「おうじゃあ慣れたらなにかおごってもらうぜ」

「おう」

「あ！そうえば今日千冬姉帰って来るってよ」

「へえじゃあ今日で春休み最後だし3人で飯でもいくか？」

「おうそうするか（うーんでも千冬姉にとって俺邪魔じゃないのか？まあいいか）」

夕方17時頃…

「ただいま一夏いるか？」

「おかえり千冬姉」

「あ！おかえりなさい千冬さん」

「なっなんでシアンがいるんだ？（まさか私を待っていたのか？いやそれはないか）」

「千冬さんを待ってたんですよ」

「（は？今こいつは何て言った？）すまんもう一度言ってくれ」

「千冬さんを待っていたんですさあ行きますよ」

「ど、どこにいくんだ？」

「ああ春休み最後だし夕食に行こうって話に一夏となっただんですよあ？」「ああ」

「そ、そうか」

「じゃあ行きますか」

そして3人はあるいて10分ほどで着くイタリア料理店に来た前菜が出てきたところで一夏が

「あ！そっいえばシアンイタリアのお土産はどうした？」

「……………（；———）」

「まさかとは思うが忘れてたとかそういうのじゃないかな？」

「も、もちろんあるぞ（汗）」

「じゃあ早く出せ」

「おうわかったじゃあ今からイタリア旅行の土産（これ重要）話でもするかな（・・・）キリ」

「そんな事だろうと思ったわ！」

「んんっ盛り上がってるところ悪いがイタリア旅行とはどういうことだシアン？私は聞いた覚えがないが…」
千冬さんの後ろには運慶もびっくり阿修羅像があつた

「あ、あれ？い、い、いつていませんでしたっけ？（滝汗）」

「ああ聞いていないなそんなこと微塵も」後ろの阿修羅がさらに増える

「す、すいませんでしたっ！」

「お、お詫びに次イタリア行く時一緒に行きますか？（これでどうだ？）」

「あ、ああそうしよう次はいつ行くんだ？」と阿修羅が消えていく

「（よかったそんなにイタリア行きたかったんだな…うん）えゝ次は夏休みです」

「あ！でも予算の都合上ー夏は来れないんですがいいですか？」

「なっじゃあお前と二人きりになるんだな？」

「ええいやですか？」

「い、いやかまわない（二人きりか…／＼）」

そして3人はイタリアンを食べて家に帰った

「じゃあ一夏明日からIS学園だな？」

「そうだなじゃあまた明日ノシ」

「おう明日ノシ」

そして明日驚愕の事実を知ることになる

春休み編：fine

第6話（後書き）

春休み編はこれで終了です

休みの日は必ず更新します

明日からとてつもなく忙しいので更新遅いかも

お知らせ（前書き）

お知らせです

お知らせ

読みやすくするための意見や機体設定に無理があるなどの意見をいただいたので

これからはそれらに気を付けてやりますのでこれからもこの小説を
よろしく願います

具体的には

一話ごとの文字数を増やす

読みやすくするために行間を空ける

漢字変換

情景描写

登場人物の心情描写などを次の更新から気をつけます

機体設定変えました

アドバース等待っています

これからは更新が週1になるかもしれませんが
慣れたらまた毎日更新します

とりあえず次の更新は明日以降です

お知らせ（後書き）

機体設定かえました

第7話（前書き）

テストが終わったので書きました。

指摘された点を意識して書いたつもりですが、まだ読みにくいと思います。

相変わらずの駄文です。

第7話

4月上旬 朝 IS学園校門前にて2人の男子生徒がいた。

「…（無駄にでかいな。校門。それにしても回りの人が一夏以外全員女子って…」

噂とか一瞬で流れるんだよな多分…（こわ）」

「…（シアンのやつ緊張してるのか？…まあ良いや。そういえば今日って何曜日だっけ？」

各人思い思いのことを思っていた。

そして門をくぐって受付をすまし、講堂へ移動し入学式

必ず同じこと3回は言うので有名な学園長のありがたーいお話をうたたねしながら

聞き流していたら、いつのまにか入学式は終わっていた。

今度は、教室に移動しSHRの時間…

「みなさんいますねー？いない人は手を上げてください……………」

では、SHRを始めます。」

「（ん？今のギャグか？いや、素でやってるんだろうな。）」

「あ！その前に私の自己紹介します。

私は、このクラスの副担任の山田 真耶です。

1年間宜しく願います。」

そしてにこりとほほ笑むが、クラスの反応はない。教室に微妙な空気が流れる

「（どうすんだよ、この空気先生もう涙目だよ）」
シアンは、一夏に助けてあげてという視線を送るが、無理だと返された

「グス…じゃじゃあとりあえず自己紹介お願いします。1番から。」

「（1番って俺か…よし）」

「えーと（うつ…視線が）あ、藍川シアンです。
趣味は、ハッキング？と読書です。気軽に話しかけてください。
1年間よろしく願います。」と微笑むするとクラスの人ほぼ全員がほほを赤くした。

「？？（みんな顔が赤いぞどうしたんだ？）」
安心のシアंकオリティーがあった

「（まあ、いつか。お！次は一夏だな。）」

「織斑君…？織斑君、……織斑君、織斑君……、織斑君」
山田先生が、何度も呼びかけているのに一夏の反応はない。
先生またもや涙目になっていた。

「（やるな、一夏）」
感心しているシアンがいた

「おりグスむらくん…グスおりむグスらくん」
もはや涙目ではなく先生は半泣きだ

「…ん？は、はい！」

一夏はようやく呼ばれていることに気付いた。

「あつごめんね？自己紹介なんだけど、次織斑君の番何だよね
自己紹介してくれるかな？駄目かな？」

ホントにこの人は年上なのだろうか？とクラス全員がそう思った。

「先生、そんなに謝らなくてもちゃんと自己紹介ぐらいしますから」

「ホントですか？絶対ですよ。約束ですよ。」

そして、一夏は立って後ろに振り向く

「（うつ、この視線はきついな…）」

「えー…えつと…織斑一夏です。よろしくお願いします。」と一礼

「（…なんだこの『え？もうおわり？』的な空気。それとシアン、
そんな憐れむような目で見るな！）」

「……………」

一夏のせいで、教室の空気は最低だ

「（まずい、このままでは暗い奴のレッテルを貼られてしまう…）」
そして、深呼吸をして『お、来るか』的な空気になってから

「以上です（…）キリ」

ガタタタ、思わずクラスの一部分がずっこけた。シアンは笑いをこら
えるのに必死だ。

「…つぶく（やべ、腹筋崩壊しそう…）」

一夏は

「えー！あれ？駄目でした？あとシアン笑うな。」
パアアン

「いつー！？」

おそろおそろ振り向くとそこには、
黒のスーツにタイトスカートすらりとした長身、よく鍛えているが
けて過肉厚ではないボディライン、組んだ腕、鋭い釣り目そし
て手には *syussekibo* という名の兵器があつた。

「（まちがいない）げえ、平和島静雄！？」
パアアン

「誰が池袋最強だ。馬鹿者が。」
ずっと笑いを堪えていたシアンも気付いた。

「あ！千冬さんなんでこんなところに？」
ポスとかわいい音がする

「ここでは、織斑先生と呼べシア…藍川。私はここの教師だからな。」

「そうだったんですか。」

「ちょっとまで、千冬姉俺の時と *syussekibo* の威力がち
がー」ズバアアン！今日一番の良い音が鳴った。あまりの音の大き
さにクラスの人半分くらいは引いていた。

「ここでは、織斑先生と呼べ絶対だ！ああそれと威力については、

気のせいだ。」

「え！？いやでも明らかに……」ズバアン

「気のせいだ！」

「……はい（ちくしょう、こうして善良な市民は暴力に屈していくんだ。）」

「あ、あの織斑先生会議はも終わられたんですか？」
空気になっていた山田先生が口を開いた

「ああ、山田君クラスへのあいさつを押しつけてしまっただけです。すみなかつた。」

「い、いえ副担任ですのでこれくらいいしないと……」

山田先生は若干熱っぽい目で千冬さんを見る

そして千冬さんがあいさつする

「諸君、私が織斑千冬だ。」

君たち新人を一年で使い物になるようにするのが私の仕事だ。

私の言うことはよく聞きよく理解しろ、出来ないものには出来るようになるまで指導してやる。

私に逆らってもらってもいいが、言うことは聞け！いいな？」

「……な、なんて暴力的発言。教師とは思えない……」

二人の思考は見事にシンクロした。

この後黄色い歓声が上がりをさかった。SHRは終わった。

「「あー……………」」

一時間目が終わり（展開が急なのは気のせい）休憩時間シアンと夏は、話していた。

「なあ、一夏？これ覚えてるか？」

どこからボイスレコーダーを取り出して再生ボタンを押した。

~~~~~

「明日からIS学園かあ…はあ…鬱だ」

「何言ってるんだよシアンすぐなれるって」

「一夏そのセリフ覚えとけよ」

「ああいいぜ」

「いったなよしじゃあなれなかったらなんかおこれよ」

「おっじゃあ慣れたらなにかおごってもらっぜ」

「おっ」

（第3話参照）



~~~~~

「……………」一夏の眼からはハイライトが消えていた。

「…一夏？」シアンは笑みを浮かべ、一夏に詰め寄る。これは結構怖い

「わ、わかったよ、何かおごればいんだろう?」
半分自棄になつて言う。

「それでいいんだぞ一夏。じゃあ、ハーゲンダツ 1ダースな」
とorz状態の一夏の肩をぽんぽんと叩く。

「相変わらずだな」と不意に二人の後ろで声がした。

「「え!?!」」まさか話しかけられるとは思わなかった二人は、驚いて声が裏返ってしまった。

そして、声の方を見るとそこには、小学生の時に引越した篠ノ之簞がいた。

「「簞^{さん}」」

「ああ、久しぶりだな。シアン、一夏。ここだと話しづらい、屋上へ行かないか?」

そうだなと言って一夏はシアンを連れていこうとする。

「い、いや俺はいいわ。やることあるし…二人きりでどうぞ。」

「ん？そうかわかった。じゃあ、行くか？ 篝。」
と教室を出て行った。

教室で一人になったシアンは一人で視線攻撃を受けていた。

「（早く、慣れたい…）」と切実に思っていた。

休憩時間終了1分前次の授業は千冬さんが見ている授業なのに、二人はまだ帰ってこない。

キンコーンカーンコーン　チャイムは無慈悲だ。

「（あちゃ、間に合わなかったな。乙。）」

結局授業開始5分後に現れた二人は、千冬さんの出席簿エクスカリバーアタックの餌食になっていた。

第7話：fine

第7話（後書き）

過去最長記録更新

これからは、このくらいの長さにします。途中で挫折するかも知れませんが…

とても、進みが遅いのはなかなか8巻が出ないので進みは駄目かな
と思つてので…

これからもよろしく願います。

番外編 1 (前書き)

メモリみたら、なんかこのデータがあったので載せます。

いつ書いたんだっけ…こわっ

番外編 1

「はああ…どうしてこうなったのだろうか…」

西池袋公園のベンチにて、リストラされたサラリーマンの様な雰囲気醸し出している千冬さんがいた。

少し時をさかのぼってみる。

今日は土曜日、学園の仕事はない。だからいつもの様に学園の私の部屋でビールを飲んで過ごしていた。
だんだんと眠くなってきたので、寝た。

そう寝たのだ。そして起きたらいつの間にか公園のベンチにいた。

何故？酔っぱらったのか？いや、酔っぱらって池袋まで来るのはおかしい。距離がありすぎる。

じゃあ何故？連れ去られた？いや、それなら気付くはずだ。それに、IS学園にいたのだ。セキュリティは万全。

となると何故だ？じゃあ異世界に来てしまった？一番非現実的だが、束ならやりかねない…

ということでは異世界だと結論づけた千冬さんは、やはり酔い

が回っているのだろう。

とりあえず、散策してみるかと言って公園を出た。

公園を出るとそこは、カオスだった。

飛び交う標識、ゴミ箱、自動販売機、大量の人の着信音が同時なったり、目が赤く自我を失い刃物を振り回す人々、高笑いしながらケ―タイを踏みつぶす人や

自動販売機を人に向かって投げる人 それはもうおそろしかった。

「……どこだここは？地獄かhellなのか？」そう考えてしまう千冬さんは、おかしくないだろう。

そんなことを考えていたら、黒いバイクが大量の白バイに追われていた。

もうほんとにカオスだった。

千冬さんは言った。

よしこの地獄を楽しもう。フッフ、ブリュンヒルデをなめるなよ！
！！！！！！

「
という夢を見たんだが、どう思うシアン？」

「
いや、しりませんよ。」

番外編 1（後書き）

よくわかりませんね。

次は本編です

第8話（前書き）

進まない。話が進まない。

第8話

二時間目 1年1組の教室にてある男子は青ざめていた。

目の前には分厚い教科書が何冊もある。

一番上の教科書を取って見るが、専門用語のオンパレードで一夏はグロッキーだった。

一方シアンは、イタリアでプリン伯爵に多少ISの事について聞いていたのではつきりいって余裕だった。

「（うう…シアンのやつあんなすました顔してるってことはわかってるんだよね？この専門用語）」

「（…さつきから何なんだ？一夏は？そわそわして…まさか分からないとか？」

いや、さすがの一夏でもこのくらいはね…」

一夏はずっとそわそわしていたので、先生も気になり声をかけた。

「織斑君、何かわからないところでもあるんですか？」

「あ、ああえーと（どこだっけ？つとと全部だった）」

「わからないところがあつたら聞いてくださいね。私は、先生ですから。」

「（おおいつもは頼りない先生が何故か頼もしいぞ…よし）先生！」

「はい、織斑君！」

「ほとんど全部わかりません（・・・）キリ」

「（一夏あ…よく言い切った。お前男だよ（笑）」
シアンは笑いをこらえるのに必死だ

「え、全部ですか？」
さすがの先生も困っている

「えーと…織斑君以外に今のところ全部わからない人はいますか？」
先生は拳手を促すが誰も手を上げない

「…織斑、入学前の参考書は読んだか？」
今度は千冬さんが聞く

「（…参考書…あ！あのタウンージか！）…え！？そんなものも
もらってませんよ」

と必死に嘘をつくが

「嘘をつくな、馬鹿者が」スパーン
エクスカリバー
出席簿の餌食になった。

「どうせ古い電話帳と間違えて捨てたのだろう？再発行してやるから、1週間ですべて覚えろ。」

「あの分厚いのを1週間では無理じゃ…」

「やれと言っている。」ギロリ

「はい…」

そして千冬さんはシアンの方を向いて

「藍川は、理解できているか？」

「はい、概ね」

「そうかじゃあ織斑に教えてやってくれないか？」

「いいですよ。」

「すまないな。」

「…（やっぱ千冬姉はシアンには優しいんだよな…不平等だ！」スパーン
エクスカリバー
何故か出席簿が一夏の頭に振り下ろされた。

「今、不平等だと思っただろう。」

「申し訳ありません。（なんでわかるんだよ）」

「わかればいい。では、山田先生授業の続きを」

「は、はいでは教科書の…」

2時間目の授業後の放課シアンが一夏にISについて簡単なことを教えていたら…

「ちょっと、よろしくて。」

「……………（無視だ無視、聞こえない聞こえない）」

「
」
二人は無視を決め込む

「聞いていますの？お返事は？」

「
.....」

「（何なんですの？この人たちは！？）無視しないでくださいまし。
」

「
.....」

シアンたちは尚も無視を続ける

「無視しないでくださいまし。」

だんだん涙目になってきた。ついに無視できなくなった一夏が返事をしてしまった。

「わるいな、聞いてなかった。何か用か？えーとセルティさん？（確かこんな名前だった）」

「セシリアですわ、わたくしは首なしライダーじゃありませんわ。」

「すまないな、セットンさん。」

「だから、首なしライダーじゃありませんわ。」

「おおすまんすまん。デュラハンだったな。」

「いい加減にしないで！全く日本の男性とはこれほど無礼でバカそうな方なのかしら。」

最後の方の言葉を聞いたシアンが

「おい、日本の男の栄誉のために言っておくが、バカなのは一夏だけぞ。」

「ひどいな！お前。」

「いや、事実だろ。」

「はあ？お前も似たようなものだろう？」

「お前と一緒にするな。俺は参考書をタウンペー　と間違えて捨てたりはしないぞ。」

「うつ」

と口論？が始まったセシリアを空気にして…「空気じゃありませんわ」

「わたくしを無視しないでくださいましー！」

キーンこーんカーンコーン。チャイムが鳴った

「くっ…後でまた来ますわ。」

「（あ！まだいたんだ）」

3時間目の授業は千冬さんの授業だった。

「では、授業を始める。っとその前にクラス対抗戦の代表を決めな
いとな。クラス代表戦の代表は…まあそのまんまの意味だ」

「（クラス代表？面倒だ絶対やらないぞ。あらこれフラグかしら？まあこういうのは、一夏に押し付けて…）」

「自薦他薦は問わない。ただし推薦された者には拒否権はないからな。」

「はい 藍川君を推薦します」

「わたしもあ、藍川君に」

「じゃあ私も」

「（このままではまずいぞ）じゃ、じゃあ俺は織斑一夏君を推薦します。彼は、すごく強いですよ。そりゃあもうISを生身で倒すくらいに。」

「なっ！俺を巻き込むな。シアン。」

「何を言っているんだね？一夏君？私は単純に君がクラス代表に適任だから推薦したただだよ。」

「嘘つけ！じゃあなんで生身でIS倒せるなんて嘘つくんだ？」

「…（：「——」）」

「はあ…もういいや…おれg…」俺がやると言いかけた時 バアンと机をたたく音がした

「納得できませんわ。男がクラス代表なんて良い恥さらしですわ。」

（中略） 大体文化としても後進的な国で暮らすこと自体耐えがたい苦痛で…」

「イギリスだって日本と大して変わらないだろ？」と一夏は切れたよく見たら、千冬さんも若干イラついている

「（千冬さんもイラついてるし…終わったなセットン）ご愁傷様セットンさん。」

「セシリアですわ！もうあなたたちそんなにわたくしを怒らしたいのですか？」

「怒っても指して怖くなさそうだな一夏^{ひそひそ}」

「そうだなww^{ひそひそ}」

「聞こえてますわよ…あなた達ねえ…決闘ですわ！」

「おういいぜ楽しそうだ。」

「がんばれよ一夏。」

「あなたもですわよ！」

「え！俺も（なぜ？why？）I don't know what you mean.（直訳）私はあなたが言っている意味がわかりません。かいつまんで言うと、は？何言ってるの？意味わからんしー」

ぶちセシリアの中の何かが切れたが何故か冷静だった

「…もういいですわ…今日はもう疲れました。とにかくあなたも決闘ですわよ。」

「よし話は決まったな。じゃあ来週の月曜日第三アリーナにて、決闘を行う。では授業を始めよう」

三時間目が始まった

第8話（後書き）

切り悪いけどここまでで切ります。

もう打つの疲れました。

更新は、土日1～2回長めのを

平日中に2～3回短めのを更新したいと思います。

第9話（前書き）

今回も駄文ですが宜しくお願いします。

第9話

3時間目が終わり、放課後教室にて一夏とシアンがいた。

「うう、全然わからん…」

一夏は、グロッキーになっていた。

「これくらい、すぐわかるって（わからなかったら…どうしようかな？）」

と心の中で黒い笑みを浮かべる。

こんなやり取りをしていたら、

「ああ、藍川君に織斑君まだ教室にいたんですね。よかったです。」
と山田先生がやってきた。

「どうしたんですか？先生」とシアン

「えっとですね、お二人の寮の部屋が決まりました。」
そう言って部屋番号の書かれた紙と、キーを渡した。

「決まるのは、もっと先だと聞いていましたが？」とシアン
すると山田先生は、政府のの特命ですと回りに居る生徒に聞こえないように耳打ちする。

「そういうことですか。分かりました。」

「で、どっちが俺のですか？」今度は一夏が

「1025室が、織斑君です。」

「分かりました。」

といって一夏はシアンからキーを受け取る。

「ところで、俺たちが相部屋じゃないということは、個室なんですか？」

IS学園って気前いいですね？」とシアンは、自分の推測を口にする。

「あ！いえ、違いますよ。でも安心してください。1カ月で部屋の調整をつけますから。」

「じゃあ、それまで女子と相部屋なんですか？」

「そういうことになりますね。」

「（いや、それっていいのか？）」とシアンは思ったが、口には出さない。なぜなら

本能的に言ったらめんどくさいことになると感じたからだ。

「ああ、でも一度帰らないと荷物が…」一夏が、思い出したように言うが違う声に遮られる。

「それなら問題ない。二人の分私が用意してやった。まあ、生活必需品だけだな。着替えと携帯の充電器があれば十分だろう。」

「あ、ありがとうございます。」

「（大雑把すぎる…まあ千冬姉らしいけど、人の生活には潤いも必要だと思いますよ）」と一夏は思ったが、言ったら

どうせ織斑千冬専用打撃武器：syussekiiboの餌食になるのは目に見えている。

「（まあ、何時もパソコン持ち歩いてるし、パソコンあれば問題ないかな？あ！でもここちゃんと回線繋がってるのか？）」

「では、時間を見て部屋に行ってくださいね。各部屋にシャワーがあります、大浴場も学年ごとに時間が違いますがあります。でもお二人はいま使えません。」

「え？なんでですか？」

「バカかお前は、同年代と女子と一緒に風呂に入りたいのか？」と千冬さんが聞く

「あー…（そうだった。）」

そんなことを言ったら山田先生が暴走してしまう。

「え！織斑君女の子と一緒に風呂に入りたいんですか？だめですよ。」

「い、いや入りたくないです。」

「え！女の子に興味ないんですか？それもそれで問題のような…」
案の定暴走した。そして、聞き耳を立てていた女子に聞こえてしまった。

「織斑君男の子にしか興味ないのかしら？」

「シアン×一夏…じゅる…」

「ハアハア…」

と腐女子が騒ぎ出した。

「（あーあ一夏のせいで…）」

「じゃ、じゃあ私たちは会議があるので…寄り道しないで帰るんですよ。」

「ああ、その事なんだが藍川は私と一緒に来てくれ。」と千冬さんがシアンの呼び出し。

「「「???」」「三人は頭に???を浮かべる。」

「イタリアから藍川の専用機が届いている。フォーマット初期化と最適化処理フイッティングを行う。」

「あ！そうでしたね。忘れてました。じゃあ織斑君だけ帰ってください。」

いや、そんな大事なことを忘れるなよというつつこみは置いて…

場所は変わって第3アリーナ西側ピット…

紫のカラーリングに関節部分は赤の機体に乗ったシアンがいた。

そして、『初期化と最適化処理が終了しました』とISからメッセージがあつた。

「よし、終わったな。では、これから模擬戦を行つてもらつ。」

「（は？実機に乗つたの今日でまだ2回目だぞ？いきなり実践？）な、なにを言つてるのですか？千冬さん？」

ポン相変わらず優しい音を立てて

「織斑先生だ。」と優しい声で言う。

「まあ、聞くより慣れた。行け、シアン。危なくなったら助けてやるから。」

「（それじゃあ、俺の対戦相手が危ないのでは？…まあいつかはいい、じゃあ行つてきます。」

「ああ、気をつけるんだぞ。」

そうして、ピットを飛び出した。

そして、その先で待っていたのは、

「やあ、待っていたよ。藍川 シアン君」
「たISを装備している人だった。」

水色の髪をして水を纏

第9話（後書き）

はいカット。

次は戦闘回ですよ初ですようまく書けますかね？
まあ、がんばります。

最後に、トチ狂った作者がコードギアスの小説を始めました。
そっちも宜しく願います。

機体設定 part 2 (前書き)

Wikiまんまww

機体設定 part 2

ミステリアス・レイディ（霧纏の淑女） 楯無の第3世代型IS。
ロシアが設計したIS「モスクワの深い霧」
の機体データを元に楯無が1人で組み上げたフルスクラッチタイプの機体。

他のISに比べ装甲が少なく、それをカバーするように左右一対で浮いている「アクア・クリスタル」というパーツからナノマシンで構成された水のヴェールが展開されており、ドレスやマントのように装着者を包む。

武装は下記以外に高圧水流を発することができる蛇腹剣「ラストイー・ネイル」を搭載している。

ほとんどのパーツにナノマシンで構成した水を使用しているため、水を自在に操ることができる。

機体カラーは水色。

クリア・パッション
清き熱情 ナノマシンで構成された水を霧状にして攻撃対象物へ散布し、ナノマシンを発熱させることで水を瞬時に気化させ、その衝撃や熱で相手を破壊する戦闘能力。拡散範囲は限られているが、非常に有用性が高い。

そつりゅうせん
蒼流旋 特殊ナノマシンによって超高周波振動する水を螺旋状に纏ったランス。四門のガトリングガンも装備されている。

ミストルティンの槍 通常時は防御用に装甲表面を覆っているアクア・ナノマシンを一点に集中、攻性成形することで強力な攻撃力とする一撃必殺の大技でもあり、自らも大怪我を負いかねない諸刃の剣。そのエネルギー総量は小型気化爆弾四個分に相当する。

機体設定 part 2 (後書き)

一応、次の話に出てくるので載せておきます。

あんま意味ないかも…

第10話（前書き）

初の戦闘描写。

うまく書けませんでした。

第10話

第3アリーナにて、

二つのISがあつた。

「…………ど、どちらさまでしょうか？」シアンは、素直に疑問を口にする。

「ん？私？おねーさんは、この学園の生徒会長。更識楯無よ、楯無って呼んでね」とウインクする。すると、千冬さんが、閻魔大王も涙目のドスを聞かせた声で、

「更識い…さつさと模擬戦を始める。（私のシアンにウインクなどシオッテ…）」
アリーナでは、

「ありや、怒らせたかな？」

「なんでですかね？（怒ることなんてあるのか。）」

「あ、分かってないんだ。（そういうことね）」

「??？」

そうすると、また管制室から威圧感があつた。

「織斑先生が、怖いからそろそろ始めましょう？」楯無さんは冷や汗だらだら流しながら、ランスを呼びだす。

「そうですか？まあいいですよ。（近接武器…ならこっちも）」立ち話も何ですしねと付け足し近接ブレード
どうためき
同田貫を呼びだす。

そして、シアンは一気に距離を詰め、連撃を与える。

「っ！（速い…）へえ、随分と速いんだね？」だが、楯無さんは、余裕に捌く。

「それが、取り柄ですから。（くそっ簡単に捌かれる…だったら）」そして、断罪者^{ジャッジメント}を呼びだし、距離を取りズガガガンと適当に4連射する。

「？そんな甘い照準じゃ…」簡単によけられる。しかし、グイン、「！？」バスバスバスバス追尾し全弾命中する。

「グウウ」一気にSEを400削られる。

「な！一気に400も…」さすがの楯無さんも焦りが見える。

「なかなかの威力ね…」

「どうも、じゃあもう2発如何ですか？」と2発撃つ。

「まだ、答えてないんだけどなあ」そして、避けるが当然命中する。

「（？何かおかしい）」

そして、当たった楯無さんが水になった。

「なあ！？（み、水になったあー！？）」

そしていつの間にか蛇腹剣を構え後ろにいた。

「（後ろ！？まず…）っ！…」大型ウイングスラクターを全開にして何とか回避した。

「へえ…おねーさん避けられるとは、思わなかったなあ」

「ぜえ…ぜえ（おいおい、余裕じゃないか…）」

「（だいぶ疲れているわね。）そういえば、ここら辺何だか熱くない？」

「（？）ああ、そう言われればなんとなく…」

「フフツ 清き熱情」
クリア・パッション

その瞬間ドカーンシアンの回りが爆発した。

「（！！！？なにがあったんだ？）ぬぁ！」

「びつくりした？清き熱情はね、ナノマシンで構成された水を霧状にして攻撃対象物散布して、

ナノマシンを発熱させることで水を瞬時に気化させて、その衝撃や熱で相手を破壊する技なんだよ。」

「ご、ご丁寧にどうも…（SEが残り300を切った。早めに決着をつけなくては…）」

すぐに、アイザイアン・ボーン・ガンを呼びだし、ジュール熱を最大で入力する。

「勝負をつけるかい？（まあ、こつちも追尾弾のおかげで結構危ないんだけど…）」

「ええ、そうしましょう。」

「じゃあ、こつちも本気で行こうかな？（危ないけど、まあ本気じゃないと負けちゃうからね…）」

そして、アクア・ナノマシンを一点に集中し、攻性成形する。

「（多技かな？）シャレになってませんね？」 「（成功するといけど…）そうね。」

「「行くわよ（ます）」」

「ミストルテインの槍！！」

「アイザイアン・ボーン・ガン！！」

両者の渾身の攻撃がぶつかり、ズガァーンと大爆発が起きた。

第10話（後書き）

初の戦闘描写。

そして、決着は次に持ち越しという…

どうだったでしょうか？

アドバイス等待っております。

第11話（前書き）

最近、うまく話がまとめられません。もしや、これがスランプってやつか…

とりあえず、見てっして下さい。

第11話

第3アリーナの爆発が晴れたのち、

ISが強制解除され、気絶しているシアンがいた。

ピー

「試合終了。 藍川シアンのシールドエネルギーエンプティーを確

認 勝者：更識楯無」

「（あ、危なかった。）」楯無さんのSEも残りあと僅かだった。

「（なかなか、強い子ね。…まあ、その前に全力で逃亡しなきゃ！）

「楯無さんは、ISでの戦闘後で疲れているからだに鞭を打ち、全力で走りだす。」

何故かというと、後ろから千冬^{あしゆひ}さんが追いかけてきたからである。

「更識iiiiiiiiiiii！よくも、シアンを！！！！！！」

子供の遊びとかじゃない、千冬さんと楯無さんのガチのリアル鬼ごっこが始まった。

気絶している、シアンを放っておいて…

ここからは、作者初の一人称です。

み、皆さんこんばんわ。更識楯無よ。

おねーさんは、今本気ってかいてまじって読むリアル鬼ごっこをしてるわ。

もちろん命がけのね。いや、そこまでじゃないだろ？って思ってるでしょうけど。

鬼は、あの織斑先生よ。きつと地獄の果てまで追いかけてくるわ。

とりあえず今は、生徒会室に隠れてるけど何時見つかるか全然見当がつかないわ。

「いつの間にか後ろに居たりして…いや、さすがにそれは…」ある…へ？」それはないかと言うところで遮られた。

「お、おおお織斑先生…」ひ、冷や汗がとまらないわ…これが、ブリュンヒルデ…恐ろしいわ…

そしたら、天使のような悪魔の笑みを浮かべた織斑先生が、

「なに、私だって人間だ。人間の限度をわきまえている。」

さ、さすがね。織斑先生は、心が寛大だわ。でもなぜかしら？冷汗は止まらないんだけど…

「だから、その限界まで痛めつ…指導してやる…精々あの世で後悔するんだな…フッフ、フハハハハ…ゲホゲホ」あ！咽た。

「では、特別指導室まで連行じゃなかった行くぞ。」さつきから、言葉の端節から恨みを感じ取れるんですが…大丈夫なんでしょうか？ああ、神様私は、明日朝日を拝めるのでしょうか？

そして、連れてこられたのは織斑先生の部屋だった。

「入れ。」おそろしく命令口調がぁいますねー。

そして部屋に入るとそこは、魔窟だったわ。おびただしいほどのビール缶の山。これを片付けるのが今回の指導らしい…

2時間後…魔窟は、普通の部屋に戻った。しかし、私のHPはもう0よ。

しかし最後に、織斑先生は私にとどめをさした。

「よし、きれいになったな。じゃあ、指導の続きはまた明日だ。では、今日のところは釈放…じゃなかった帰っていいぞ。」

ええーまだあるんですかぁー　そして私は、この時気付いた。この世界に神なんていない。

ちなみに、シアンは…夜第3アリーナで

「ん？（ああ、そうだ、試合してたんだ。気絶してたってことは、負けたのか…）はああ、これじゃあ最高の機体をくれたプリンさんに申し訳が立たないよ…」

そして、初めてのIS戦闘で疲れたため、部屋に行って寝ることにした。

とりあえず、1001室に行った。途中、

「…燃えたよ…燃え尽きたよ…真っ白な灰にな…」と某ボクシングマンガの明言をガチで言ってる楯無さんがいた。

「（！？…さ、触らぬ神に祟りなしって奴だな…）」とそーと横を通り過ぎ1001号室に着いた。

「（確か相部屋の人って女子なんだよなー）」　こんこん　一応ノックする。

すると、ガチャリ。

中からは、千冬さんが出てきた。

第11話（後書き）

とりあえず、ここまでです。

感想、アドバイス、批判等待着っております。

第12話（前書き）

よく、分からない物になりましたが、

読んでくださっている方々、よろしくお願いします。

第12話

ガチャリ ドアが開くとそこには、千冬さんがいた。

「（…え？何故に千冬さん？）」

千冬さんの登場に驚愕するシアン。

「（むう…シアンの奴め…そんなに私と相部屋がいやなのか…？）」
千冬さんはすこし、ほんのすこしホントーにすこし涙目だ。

「「……………」」

二人の間に微妙な空気が流れる。

「あ、あの…どうして千冬さんが俺の部屋に？（まさか、部屋間違えたとか？）」

「あ、ああお前は、私と相部屋なのだ。他の女子では嫌だろうからな。」

（ホントは、シアンに変な虫がつかないようにするためのが…）

「ああ、そうだったんですか！確かに気まずいですね…ありがとうございます。」

と、にこりと笑う。

「／／／／ま、まあな（ああ、この笑顔を毎日見れるのか…やばいな）」

「とりあえず、部屋に入れ。」部屋に促す。

「はい。（待てよ、確か千冬さんは家事が壊滅的に出来ない…まさか部屋の中は、
ビール缶の山が3つぐらいあるのでは？）」「何かの覚悟を決め、部屋に入った。」

「（あ、あれ？…おかしいぞ。ビール缶の山はおろかほとんどにもないぞ？）」「

シアンは、あれ？あれ？ときよろきよろしている。

「（…シアンは何をしているんだ？…まさか…）シアン、お前今ビール缶の山はおろかほとんどにもないぞ？
とか、思っただろ？」

シアンはギクツという擬音がとても合っているような動きをした。

「えーお、思ってたませんよ。そんなこと、微塵も…（何故、バレタ！？）」「

「ほう、そうか。嘘をつくか？この私に。」だんだん、阿修羅が千冬さんの後ろに形成されていく。

「す、すいませんでした…」チロリ（涙×上目遣いのコンボ）チフーユは5万のダメージを受けた。

「（グボアア）…ま、まあいいだろう。（な、なんて威力だ…これは、私だけで独占しなければ…）」
独占欲？の強い千冬さん居た。

「（？許してくれたかな？）」「千冬さんの心理状況を全く理解して

いないシアンだった。

「そうだ、シアン。ISについて私が直々に教えてやるのか？イタリヤで聞いたからと言って

まだ、分からないこともあるだろう？（その間は、二人きり…／／／）」

普通だったら下心に気付くが、気付かないのがシアンクオリティー。

「ホントですか！？千冬さんに教えて貰えるなんて嬉しいです」
本当にうれしそうな顔をする。

「つゝゝゝ／／／／／（ああ、癒される…）じゃあ明日からだな。」

「はい！」

「それでは、荷解きをするか。」

「分かりました。」

そして、荷解きを15分ほどで終え、寝た。

第12話（後書き）

無理やり感半端ないですね？

感想等待着っております。

第13話（前書き）

今回は、結構短めです。

第13話

第3アリーナ…一夏側ピット

シアンたちは、一夏のISの到着を待っていた。

「………（遅くね？）」「シアン、一夏、箒は同じことを思っていた。」

「なあ、シアン？俺のISいつ来るんだ？」

「知らん。もうチヨイじゃね？（笑）」最近気付いた。シアンって多重人格じゃね？

「なんだよ（笑）って…」

「お前たちは、何をしとるのだ。緊張感がないぞ！」最近、空気だった箒さんが言った。

「いや、負ける気がしないし…」二人とも同じことを言った。

「その気は、どこからわいてくるのだ？」

こんな会話をしていたら…

「織斑君、織斑君、織斑くゲホゲホ…」

織斑君と連呼し咽た、山田先生がやってきた。

「山田先生、どうしたんですか？」一夏が聞く。

「あ！きました。織斑君の専用IS。」

「「「やっとかー！」」」

そして、扉が開くとそこには、白がいた。

「これが、俺の…」そして、ISに近づく。

「はい、それが織斑君の専用IS…白式です。」

「白式…」

「織斑、時間がない。フォーマット 初期化と最適化処理は実戦でやれ。フィッティング
やれなければ、負けるだけだ。」

「はい。」

そして、ISを纏いアリーナの方へ向って行った。

一夏の戦闘は省略。この小説の主人公は、あくまでシアンなので…

「次、シア…藍川…オルコットの準備が出来た。行け。」

「はい、千冬さん。じゃあ、行ってきます。」

「行くぞ、リベリオン。」

シアンは紫を纏った。そして、アリーナへ飛び出した。

第13話（後書き）

次は、二回目の戦闘描写です。

うまくいくか、不安でしょうがないです。

感想などまっております。

第14話（前書き）

戦闘描写は苦手です…

読みづらいたと思いますが、おおめに見てください。

第14話

アリーナに出ると、セシリアがブルーティアーズを纏って待っていた。

「お待たせしました。」シアンが話しかける。しかし

「……っ……っ……っ」何やらブツブツ言っている。

「あの？オルコットさん？」

「……」尚もブツブツ言っている。

シアンは、ハイパーセンサーの感度を上げてブツブツ言っているのを聞いた。

「一夏、織斑一夏……」

「一夏がどうかしたの？」そしたらようやく気付いた。

「な、なあぁ！？い、何時からいましたの？」かなり動揺している。

「いや、さつきから。」

「ま、まあいいですね。では、試合を始めますわよ。」そして、スターライトmk?を構え、シアンをロックする。

『敵ISにロックされています』シアンのISに警告が送られてくる。

「（銃か…じゃあ、こっち…）」近接ブレード同田貫^{どうたぬき}を呼び出す。

「遠距離狙撃型のわたくしに近接武器で挑むとは、笑止ですわ!」
シアンをスターライトで狙うが、

「ほいほいっと…」シアンは、大型ウイングスラクターを吹かし、
結構余裕で躲す。

「なっ!?!うまく避けますのね!でも、これで!」とBT兵器を展開する。

そして、BT兵器はシアンを狙う。しかし、またもや余裕で避ける。

「なあ!?!くっ…なんでそんなにうまく避けられますの?」セシリアには、ほとんど余裕がない。

「ん?ああ、千冬さんに弾丸の避け方のコツを教えてもらったんだ。
そしたら、すごいな全然当たらないな…」

「い、インチキですわ!」セシリアは、暴走気味だ。

「まあまあ、代表候補生なんだろ?このくらいで怒るなっ。
それとも、イギリスの淑女^{レディ}は気が短いのかい?」

あからさまな、挑発だが今のセシリアには絶大な効果を発揮する。

「な、なんですって!もう手加減しませんわ!!」

踊りなさい、わたくしセシリア!!オルコットとブルーティアーズの
奏^{ソルツ}でる。円舞曲^{ワルツ}で!!!」

そして、スラーライトをシアンに向ける。

「悪いね、^{ワルッ}円舞曲は苦手なんで…」セシリアが、スラーライトを打とうとしたら、

シアンは、いつの間にかセシリアの真後ろに居た。

「う、後ろに！？（何時の間に！？まさか、^{イグニッションブースト}瞬時加速）」すぐに対応しようとしたが、

「遅い！（くうっこれは結構Gが掛かるな）」

ズバドガン セシリアのスターライトは、シアンによって破壊された。

「くっ…」セシリアは、距離を取り再びBT兵器を展開する。

「（うーん、じゃあ…）」^{ジャッジメント}「断罪者！」シアンは、^{ジャッジメント}断罪者を呼び出しBT兵器に適当に4発放つ。

「（？そんな、甘い照準じゃ…）」

BT兵器を動かし、簡単に躲す。だが、ゲイン ドガガガン 「！？」

「な！？追尾機能！？そんな、技術が…」 「あるんだな、それが…」

シアンは、ズガガンとさらに2発撃つ。

「っ!!」セシリアは避けるが、追尾し被弾する。ドガガン

「ああ…! (エネルギーが、一気に200も!? ばかげた威力ですわ)」

「(はいはい、次々)」次にシアンは、アイザイアン・ボーン・ガン(サーマルガン)のジュール熱を2/3に入力し、撃つ。

バーン ドガン 弾丸が、セシリアに飛んでゆき、ブルーティアイズの装甲が、砕けたところに着弾し、
絶対防御が発動する。

「ぐう… (不味いですわ、後はミサイル型とインターセプターしかありませんのに、
それにしても、強いですわね。ホントにISの起動が2回目とは思えませんわ。)」

「(そろそろ、終わらせないと…断罪者と瞬時加速を使ったからな…
SEが心もとない…) これで決める!」

再び同田貫^{どうたぬき}を呼び出し瞬時加速で距離を詰める。

「はああああ」同田貫^{どうたぬき}を振りかぶる。

そして、ズバ セシリアを斬る。

そこで、セシリアのSEが無くなった。

ピーとブザーが鳴った。

『試合終了。セシリア＝オルコットのシールドエネルギーエンブレ
イーを確認。』

勝者…藍川シアン
『

第14話（後書き）

読みづらかったですね。

感想などまっています。

あ、そうだ。

これから、作者に余裕がある際には、他の作者様がやっておられるような事を
このあとがきでやりたいと思いますのでよろしくお願いします。

最後に…紅だったひと様の活動報告で二つ名メーカーというものがあつたので自分もやってみたくなりました。

藍川シアン カオスゲート
人形

作者の感想

は？意味不明何ですが…

藍川 シアンだと ノイローゼラビリンズ
眼球斬鬼

作者の感想

英語の意味わかってるのですか？

ノイローゼの迷宮ですよ。 しかも、漢字怖いですよ。

織斑 千冬 ディバインミラージュ
幻想封神

作者の感想

呆れてきました。

織斑千冬 アストラルラビリンス
月光の眼

作者の感想

漢字の方はいいと思います。

それにしてもラビリンスがお好きなんですね。

私は、あなたの脳内がラビリンスだと思います。

千冬さん イウィルクラスト
黒の亡命者

作者の感想

亡命しちゃだめだと思いますし、千冬さん白騎士ですよ。

皆さんも、ひまでしたらやってみてください。

第15話（前書き）

とても、短いですが読んでいたださうたらうれしいです。

第15話

セシリアとの試合後

シアンは、ピットに帰ってきた。

「おつかれ、シアン。しかしお前よく勝てたな。俺とほとんどISの起動時間変わらないだろう？」一夏が聞いた。

「ん？まあ、イタリアで鬼畜シュミレーターをやらされてたし…何より、千冬さんが教えてくれたからな！ありがとございます。」
ニコリ

「あ、ああ…／／／／／（や、やばい。愛があふれそうだ。）」

「（千冬さん、なんで鼻押えてるんだろっ？）」

「（シアンってよくよく考えたらおそろしいな。）（）」

そして、夜

1001号室にて、

「なあ、シアン？」

「なんですか？千冬さん？」

「今日は、勝ててよかったな。そして何だが…これからも私に教えてほしいか？」

「はい！是非。」

「そ、そうか。じゃあ明日からもISについて教えるとするか。（よし、これで…／＼／＼）」

「はい。（なんか、お礼しなくな～そういえば明日は土曜日…）そうだ！」

「な、なんだ？」

「明日、千冬さん何か予定ありますか？」

「い、いや特にはないが…」

「じゃあ、明日食事でも行きませんか？ISについて教えてもらってるんでお礼もしたいし…」

「（そういうことか…まあ、その時は、二人きりだしな／＼）ああ、行こう！」

「よかった。じゃあ、明日の朝10時に校門前でいいですか？」

「ああ、じゃあ明日だな。（フフ、楽しみだ）」

「はい、じゃあおやすみなさい。」

「おやすみ。シアン。（まあ、しばらくは寝れんがな…）」

その後、やけに上機嫌の千冬さんが目撃された。

第15話（後書き）

次は、千冬さんとデート回ですよ。

うまく書けるか心配ですが、がんばって書きたいと思います。

作者「今回のゲストは、千冬さんです。」

千冬「ふふん（明日は、デートか…／＼）」

作者「うまく書けるかわからんがな…」

がっ千冬さんのアイアンクロ―

作者は5万のダメージを受けた。

千冬「うまく書けるかじゃなくて、書くんだ！！いいな（ギロ）」

作者「……………はい」

千冬「ああ、そうだ。感想、批判等は作者の暴走をとめる一番よい薬になる

からな、どんどん送ってくれ。」

作者「これからもこの小説を宜しくお願いします。」

千冬「ああ、次回もよろしくたのむ。」

第16話（前書き）

この回は、すっごく時間かかりました。

読みにくいと思いますが、宜しく願います。

第16話

土曜日、朝9時55分ISS学園校門前…

シアンは、千冬さんを待っていた。

「（ちょっと早かったか…一夏も誘えばよかったかな…？）」

5分後、千冬さんは来た。

「すまない、待ったか？」

「いえ、今来たところですよ。」

「（むう、敬語か…）シアン、これからは学園の外だ。敬語じゃなくていいぞ。後学園の外では、千冬でいいからな。」

「え、でも…（なんで、急に…？）」

「いいから。」

「わ、分かったよ…ち、千冬……さん（これで、いいのか？）」「と
涙目×上目遣い

「ああ、そ、それでいい…／／／（こ、これは…いいな…／／／
／／）」

とまあ、朝からこんなやり取りをしてとりあえず目的地へ向かった。

モノレールに乗って、着いたのは大型ショッピングセンター『レゾナンス』

ちなみに、二人の服装はシアンが、黒いカーゴパンツにグレーのロングカーディアンというカジュアルな格好。

千冬さんは、ニットジャケットにスカートレギンスにブーツという千冬さんだっただけの感じの服装。

「（それにしても、今日のシアンの服は結構かっこいい物だな…／＼）良い服だなシアン。」

「そ、そうか？千冬…さんもいつもと印象が違って良いよ。」
初デートにありがちな会話をしながら、服を見たりした。

「そろそろ、昼時だな…」千冬さんが言う

「そうだな、あ！あの店は？」とイタリアンを指さす。

「（特に行きたいところもないし、いいか。）ああ、そこでいい。」

そして、二人はイタリアンに入って行った。

シアンは、モッツェルラチーズとベーコンのピザを頼みまた、緑髪の魔女を思い出しそれが千冬さんになれば、殴られた。

ちなみに、千冬さんはカルボナーラだ。

『カルボナーラとモッツェルラチーズとベーコンのピザでございます。』

「あ、はい。」と千冬さんがカルボナーラを受け取る。
シアンは、ピザを受け取る。

『ご注文は以上でよろしかったでしょうか？』「はい。」『カップルですか？』

「「ブフウ」」店員のクラスター爆弾が投下された。

『あ！違いましたか？失礼します。』店員は、キッチンに帰っていく。

「「……………（気まずい）」「」

「（それにしても、私とシアンは一緒に居るとカップルに見えるのか…／／／／／）」

「（な、なんでだろう。千冬さんとカップルって…あんまり嫌じゃないな…）」

言葉が一切なく、昼食が終わった。

『有難うございましたーまたお越しくださいませー。』

「ふう、なかなかおいしかったな。シアン」

「そうだね。」

「……………」

先ほどの店員のクラスター爆弾のおかげで、空気が重い…

「とりあえず、カフェでも行くか？」千冬さんが催促する。

「うん。」

そして、カフェでコーヒーを飲みながら話をしていたらディナーの予約の時間が迫っていた。

「あ、じゃあそろそろ予約の時間だ。行く。」

「そうだな。で？どこの予約を取ったのだ？」

「フフ、お楽しみー。」シアンは微笑む。

「そ、そうか…／＼（あ、やばい、愛が抑えられん。）」
千冬さんは、結構危ないところだ。

そうして、レゾナンスを出て5分ほど歩いたところにある。

高級料理店に来た。

「なあ、ここって…高級で有名だった気がするのだが…」

「はい、イタリアからこのペアチケットが届いてたから折角だし…」

「そうか。」

そして、中に入るとそこは別世界のようだった。

「すごいな…（こんなところにシアンと二人きりで来れるとはな…／＼）」

「ええ、（え！何ココどこ？写真と全然違う…）」

イタリアのパンフレットとチケットは違うところのものだった。

「（ああ、もういい速く席に着こう！）じゃあ、千冬席の方へ。」

「ああ…／＼」千冬さんはかなり赤面している。

そして、コース料理を食べて帰った。

場所は変わって1001号室

ワインを飲んでいた、千冬さんは帰ってからすぐに寝てしまった。

「……………すう……………」

「千冬さんって、寝てるとなんか可愛いな…／＼つと何考えてんだろ…俺も寝よ。…すう」

この時の独り言を千冬さんは聞いていた。

「（か、か、か、かわいいだと………／／／／／／あ、あのシ
アンが私のことを…）」
と結構トリップしていた。

こうして、千冬さんは寝れないまま夜が更けていった。

第16話（後書き）

すいません。うまく書けませんでした。

次は、明日の17時までには更新したいと思います。

作者「今回のゲストは、主人公のシアンです。」

シ「なんなんだ？今回とてもgdgdじゃないか！」

ドガ、ボコ、ドス、ズバ、ドガンなどの暴行がシアンから作者に

作者「ちよっ、やめ、わかってるから。」

シ「じゃあ、とりあえず謝つとした方がいいんじゃないか？」

作者「はい、えーいらっしやるのかわかりませんが読者様よくわからない回を作ってしまったて、すいませんでした。」

シ「よろしい。では次もよろしくお願いします。」

作者「よろしくです。」

第17話（前書き）

かなりすっ飛ばしました。

第17話

シアンと千冬さんがデートした次の日…

IS学園1-1の教室にて…

キンコンカーンコンチャイムが鳴った。

ガラ ドアが開けられると千冬さんと山田先生が入ってきた。

「では、SHRを始める。山田先生頼む。」

「は、はい。」

「では、まずクラス代表は、織斑一夏君に決定しました！」

「……「イエーイ」……」クラスのほとんどが歓声を上げた。

しかし、どの世界にも空気の読めないやつがいて…

「はい、先生！納得できません。なんで負けた俺がクラス代表なんですか？」キングオブKY一夏だ。

「あ、それは…」先生の言葉を遮って、セルティじゃなくてセシリアだ。

「それは、わたくしが辞退したからですわ。一夏さんには、経験を

積んでほしいですし…

そのよろしければ、わたくしがお教えしましょうか？」

ダン

「一夏の教官は私で足りている。直々に頼まれたからな。」と箒

「あーら、Cランクの篠ノ之さん。Aランクのわたくしに何の用ですか？」

とこんな感じのやり取りをして、SHRの時間は終わった。

休み時間、二組に転校生が来るって噂が流れていた。

その後鈴がどこから湧いてきて、一夏に宣戦布告し千冬さんの y u s s e k i b o の餌食になって帰って行った。

鈴イベントは、めんどいからカット。シアン出しづらいしね。

そして、いつの間にかクラス対抗戦の1日前…放課後教室で

「あーあ、1回戦から鈴とかよ…」一夏がぼやく。

「まあ、待つ手間が省けたんだからいいじゃん。」シアンが結構楽観的な事を言う。

「そうなんだけどなー」

「ま、今日も訓練だな」

「それしかないか」そして、第2アリーナへ移動する。

「とりあえず、模擬戦するか？」シアンが提案する。

「ああ、いいぜ。負けないからな。」一夏は、その提案に乗る。

「じゃあ、始めるか。（今日は、新パーツのテストをしなきゃな。）

」

「行くぜ（ぞ）」白と紫がぶつかった。

「（まずは、距離をとって）」新武装：アサルトライフル アンタレスをコールし、連射する。ズガガガガ

「うわっ！」一夏は、避けるので精いっぱいだ。

「（ここで、！）」アンタレスの弾幕を張りつつ、ジャッジメントを呼び出し、一気に6連射。ズドドドド

「これって、追尾する奴だ！（やべ、SEが…）」そして、全弾命中し、一夏のSEがそこを付く。

「くそっ、なんも出来なかった。」と一夏は本当に悔しそうにする。

「まあ、一夏もイタリアの鬼畜シュミレーターと千冬さんの指導を受ければ強くなるさ…」と遠い目をする。

「ああ、大変そうだな…」

こうして、1日が過ぎて行った。

次の日、クラス対抗戦当日…事件が起こる。

第17話（後書き）

感想待ってます。

ストックがついにゼロに…

第18話（前書き）

やっぱり、戦闘描写は苦手です。

どうぞ。

第18話

当日、シアンは観客席から試合を見ようとしたが、千冬さんに何故か管制室に連行されていた。

そして、試合が始まった。

最初から、鈴のターンで衝撃砲を一夏に向けてぶっ放していた。

ようやく、一夏のターンかと思ったら、ズドーン

アリーナのシールドバリアーが破壊された。

その場にいた人たちは、一瞬固まった。

なぜなら、絶対安心だと思われていたIS学園に襲撃。これは、世界を敵にすると同義語だ。

遮断ブロックがあり、観客の無事はほとんど確保された。

本来なら、ここで制圧部隊を派遣するのだがシステムクラックに時間がかかり
いまだに突入できずにいた。

「織斑先生、俺ならこれくらいならすぐクラックできます。」

「なんだと？よし、では頼む。」

「はい。」そして、どんどんシステムにハッキングしていく。

「……すごい……」「シアンのハッキング技術を見ていた、二人は驚嘆の声を上げる。

そして、5分後クラックが終わった。

「終わりました。」

「あ、ああじゃあ、悪いが突入部隊のISに不具合が生じた……代わりに突入してくれないか？」

「え……？（初の実戦か……これで死ぬかもしれないんだ……でも行かないと鈴と一夏が危ない……よし）はい、行きます。」

「ああ、じゃあ行ってくれ。」

「はい、行ってきます。」シアンは、紫の機体を纏いアリーナに飛び出した。

「くっ（SEがぎりぎりだ……）」「一夏が二回目の零落白夜をしようとしたとき、ドカーンと隔壁を吹き飛ばした、シアンがいた。

「やあ、襲撃者君。ここからは、俺が相手だ！」

そして、断罪者ジャッジメントを呼び出し、2連射ズガガン

しかし、ビームに相殺される。

「な！（断罪者ジャッジメントが相殺された！？）なら……」アイザイアン・ボーン・

ガン呼び出し、
ジュール熱を最大に入力し、撃つ。

ドガン、ものすごい勢いで飛んでいく。しかし、またもやビームの前に撃ち落とされる。

「（サーマルガンまで……じゃあ、奥の手を使うか……）」そして、アントレスを呼び出し、フルオートで、連射し弾幕を張りながら襲撃者に近づく、そして距離がゼロになったところで、パイルバンカーを展開しズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ズガンと6発撃つと敵ISは、爆発した。

そして、爆発が晴れるとそこには、無人機がいた。

「！？無人機。」一夏は驚く。しかし、シアンは知っていたようだ。「（やっぱりそうか、さっき生体反応がなかったしな……）」どっちにしろこれで終わっただろう。」

しかし、『敵ISの再起動を確認。』 終わったと思っていたシアンは敵ISに完全に背を向けていた。

「なっ！？（再起動？まずい反応が遅れた。）」

そして、敵ISは、ビーム兵器の照準をシアンに合わせ撃つ。

「っー」すぐに、断罪者を呼び出し迎え撃つ、2発を敵ISに向けて撃ちゴーレムを鎮める、もう2発でビームを迎え撃つが、相殺しきれずビームを受けてしまった。

そして、それを見ていた千冬さんが「シアーーーーン」と叫んでいた。

第18話（後書き）

よくわからないものをまた書いてしまった…

IS×夏目友人帳のほうもよろしくお願いします。

第19話（前書き）

今回は、みじかめです

第19話

その後、シアンが回収された。ビームの直撃を受けたが、そこまでのケガはなかった。

場所は、変わって保健室、夕方18時頃

保健室と言ってもそこらへんの診療所とは、一線を画する設備の差がある。

その、保健室のベッドでシアンは寝ていた。また、横では、千冬さんが見守っていた。

「ん…？」シアンは、眼を覚ました。

「シアン！起きたか。」千冬さんは、シアンに抱きつく。

「うわああ、ち、千冬さん！？その…／＼（なんだなんだ！？なにが起きてるんだ？）」「シアンは、動揺している。

「あ、す、すまない／＼」とシアンから離れる。

「い、いえ…／＼（なんでだろ？なんか離れられるときびしいな…）」

「んん、すまない。取り乱した。ケガだが、ISの絶対防御のおかげでほとんどない。

しばらくしたら、部屋に帰っていいそうさ。」

「そうですか。で、どうなりました？敵ISは？」シアの顔が鋭くなる。

「（ふむ、ホントは、駄目だが討伐した本人が知らないのもな…）IS学園の地下ブロックで管理されることになるそうさ。」

「なら、安心ですね。解析結果は、出ましたか？」

「いや、まだだ。」

「そうですよね。（それにしても、千冬さんと居るとなんかドキドキするんだけど…なぜ？」

まさか、俺は千冬さんが好きなのか？）」

「（む、そろそろ時間だ。くそう…）では、私はそろそろ戻らないといけない。部屋に戻っていてもいいからな。」

「はい、がんばって…（なんか変な気分だな…）」

そして、1時間ぐらいした後シアは保健室を出て、屋上に向かうことにした。

屋上

「ふう…」途中にあった自動販売機で缶コーヒーを買い、自分の気持ちを考える。

「（千冬さんか…あのデートの日から千冬さんのことばっか考えてるな…やっぱり好きなんだよなー、よし
今度の学年別トーナメントが終わったら、告白してみようかな。いや、振られたらどうする？）」「とまあ

振られたらどうするの無限ループをしていた。

2・3時間してとりあえず様子見というチキンな結論をつけ、部屋に戻った。

部屋に戻ると、千冬さんは、もう帰ってきていた。

「遅い！どこに行っていたのだ？」

「屋上でコーヒーを飲みながら、悩み事をしていました。」

「（悩み事？私の事か？それはないか…ハア）そうか。」

そして、今日の戦闘で疲れていたシアンは、その後すぐ寝た。

第19話（後書き）

感想等待着ております。

第20話（前書き）

自分で書いてて分からなくなった。

第20話

無人機を討伐した次の日SHRの時間教室で…

ガラドアが開かれるといつものように千冬さんと山田先生が入ってきた。

「では、SHRを始めます。」千冬さんってSHRあんまりしなくなっと思った。

「皆さん、今日は転校生がきますよ!」

「……え!」「……女子は、いきなりの事に結構驚いている。

「しかも二人です。」

「(なんで、1組に集中させるのかな?)」「シアンがそう考えているうちに

転校生の二人が入ってきていた。

「転校生のシャルル・デュノア君です。」と山田先生禁断のネタばらし

「シャルル・デュノアです。宜しくお願いします。」

「お、男?」誰かが、唐突につぶやいた。

「はい、僕と同じ境遇の人が二人いるって…」

「「「「「きつ…」「」「」」

「き？」

「「「「「きゃあああああ」「」「」「女子たちが、悲鳴かんせいを上げる。」

「男子、3人目の男子！」

「男の娘、男の娘、ハアハア…」

「シアン、一夏、シャルルの三角関係…ありね…。」

「み、みなさん。まだ、自己紹介が終わってませんよー」山田先生が静かにしようとさせるが、全く効果がない。

「静かにしろ！」そんな千冬さんの一言で静まり返る教室、千冬さんの影響力の高さを物語っている。

「挨拶をしろ、ラウラ。」千冬さんが、促す。

「はっ！教官！」ビシッと敬礼する。

「もう、私はお前の教官ではない。それとここでは、織斑先生だ。」

「了解しました。」

「ラウラ＝ボーデビツヒだ。」

「あの、終わりですか？」

「以上だ。」

そして、一夏の方の前に来る。

「っ！貴様が！」と言って、右手を振り下される。パン

痛、いきなり、何しやがんだ！」さすがの一夏も怒る。

「ふん。私は認めない、貴様があの人の弟だということを！」そして、次はシアンの方に来る。

「貴様には、これだ！」と拳骨を振り落とそうとするが、千冬さんから

それを下ろしたら貴様の心臓もぎ取って、犬の餌にするぞオーラが出てきたので、

振り下ろす直前で止まった。

「ふ、ふん。」ようやく、自分の席に戻っていく。

「よし、次の授業はISを使つての実習訓練だ、各自準備をしておけ。

では、SHRを終わる。」

そして、休み時間。

シアンと一夏とシャルルは、話していた。

「えーと、君たちが藍川君と織斑君？僕は…」丁寧に挨拶をしようとしたが、シアンの声に遮られる。

「あー、自己紹介は後だ。女子がここで着替え始めるからな。」

「ああ、そうだ。急ぐぞ！」と一夏はシャルルの手を引いて廊下へ出る。

「あ…／＼」何故か顔を赤くさせるシャルル。

タッタッタ

渡り廊下を駆ける3人

『むーいたぞー。こっちだ！』と誰かを呼ぶ声がする。

『ホントだ！捕まえるー！』

『きゃー見て！織斑君とデユノア君、手つないでる』

『…一夏×シャル…ありね！』

だんだん、腐女子が騒ぎ出す。

「ちっ！見つけた！！」と一夏が忌々しそうにする。

「まずい！包囲されている。」シアンが逃走ルートを確認するが、ふさがれている。

こんな中一人だけ状況が分かってない人間が一人だけいた。

「え！何？何なの？」シャルルだ。

「？そりゃあ学園に居る数少ない男子だからだろ？」と一夏が説明するがシャルルはいまいち理解できていない。

「……………？」理解できていないシャルルにシアンが補足をする。

「男子は、俺たち3人だけだから…」そして、シャルルはようやく気付く。

「あ、ああ。そうだね！」

「（…ホントに男子なのか？今日千冬さんに聞いてみるか…）」
とシアンが疑いを掛ける。

こういうやり取りをしていたら、どんどん包囲網を縮められる。

「しかたないな…ごめんな…一夏。（ホントにごめんな、2分は忘れないからな…）」

そして、一夏の写真（胸肌蹴けver）と寝顔verと着替え中verをばら撒く。

「（よし、自己紹介も済んだ。あんまり時間がない…早く着替えなきゃ）よっと」

と上着を脱ぐ。そしたら…

「うわああああ／＼／」とシャルルが声を上げた。

「…？どうしたの？」シアンが聞くが何でもないよと答える。

「ホントに何でもないからね、えーと、だからこっちをみないでほしいんだけど…」

「？まあ、人の着替えをじろじろ見る趣味はないけど…（あんまり、他人と着替えたことがないのか？

いや、だとしてもあの過剰な反応はおかしい…やっぱり女子なのかもな…）」

とまあ、あんな、こんなで二人が着替えを終え、アリーナに行くか？って時に一夏はようやく

更衣室に到着した。

「お？遅かったな、一夏。何かあったのか？」白々とシアンは言う。

ブチ、滅多に怒らない一夏が切れた。

「おめーのせいだろうがああ！シアアアン。」と殴りかかるが、ヒョイツと避けられる。

「はは！あと、3分で授業始まるからな。ファイトーWW」

「が、がんばってね。一夏?。」

「後で、覚えとけよー!!!!」

結局、一夏は授業開始5分後に到着し千冬さんの出席簿エクスカリパーの制裁を受けていた。

その後、一夏のラッキースケベスキルが発動し、セシリアや鈴の逆鱗に触れたり、

山田先生改がセシリアと鈴をフルボッコにしたり、いろいろあった。

そして、昼放課:

シアンは、一夏に昼一緒に屋上で食べないか?と聞かれたが、どこからか殺気のようなものを
感じたので、断った。

シャルルも誘われたが、シャルル一人を一人にすると女子たちハイエナの餌食になるので

一夏と一緒に行動することになった。

「じゃあ、また後でな。シアン。」

「ああ、(さてと、シャルルの事千冬さんに聞いてくるかな...)」

そして、千冬さんに連絡を取った。

ブーンブーンブーン

職員室で千冬さんの携帯が鳴る。

「（誰だ？）」「そして、ディスプレイを見るとシアンの文字があった。

「！？？（シアンだと！？）」「浮かれ半分で電話に出ると聞きたいことがあるらしい。

時間帯から、昼食でも食べながら聞くことになった。

場所は変わって、人通りがほとんどないところにあるベンチ…

「で？話とはなんだ？」千冬さんが尋ねる。

「ああ、そのことですね。単刀直入に聞きます、シャルル・デュノアは
ホントに男なんですか？」

その質問をした瞬間千冬さんの顔が曇った。

「…いや、正確なことは私にもわからない。ただ、デュノア家に息子がいた覚えがないのだが…」

「そうですか…（じゃあ、本当の事知るにはデュノア社にハッキングを掛けて調べるか、
直接聞くしかないのか…仮にシャルルが女だとしたら、目的は何だ

「?…」とシアンは思考の海に浸っている。

今のシアンに話かけても無駄だと気付いた千冬さんは、あまり危険なことはするなよ…と警告すると立ち去って行った。

それから授業や休み時間シアンは、ずっと無言で何かを考えているようだった。一夏の後日談。

夜…

シアンは、山田先生を脅は…ゲフンゲフン、お願いしてIS学園のスーパーコンピューターなどのある部屋を貸してもらった。

「ふう、やっぱりすごいスペックだな…」とスーパーコンピューターを見ながら、しみじみ言う。

「じゃ、腕試しでもしとくか。」そんなことを言っ、たくさんの企業にハッキングをしていく。

そして、いつの間にか夜の11時になっていた。

「おっと、そろそろデュノアにハックしなきゃ」とデュノア社のメインコンピューターへのハッキングを開始する。

10分ほどでハッキングを終え、ため息をつきながら…

「ハアア…シャルルはシャルロットだったのか…それにしても、デユノアも悪いことしてんだな…」

インサイダーは当たり前で他にもいろいろな違法行為していた事が分かった。

「よし、じゃあ後は痕跡を消してつと…これで、よし。」

そして、電源を切って自室に戻った。

自室…

シアンが自室に帰ると千冬さんは、まだ帰ってきていなかった。

「（遅いんだな、千冬さん。シャルロットのこと話そうと思ったんだけどな…」

まあ、先に寝とくか…久しぶりのハッキングだったから、疲れたし…」

ホントに疲れていたシアンは、すぐに寝た。

シアンが寝て1時間後、

千冬さんが帰ってきて、シアンの寝顔を隠し撮りしたのは秘密だ。

第20話（後書き）

うまく書けません。

感想、誤字脱字などよろしくお願いします。

第21話

シアンが、デュノア社にハッキングを仕掛けた日の夜、一夏が

一夏とシャルルの部屋で、またもやラッキースケベスキルを発動させシャルルが女だと気付いた。

そして、シャルルを説得してさらにフラグまで立てていた。

翌日、

朝、食堂にて…

一夏とシャルルが一緒に朝食を取っていた。
そこに、シアンがやってきた。

「あ！シアンだ、おい。」一夏がシアンを呼ぶ。

「ん？ああ、一夏とシャルルか。」シアンは一夏とシャルルに気付く。

「一緒に食わないか？」

「ああ、」

シアンは、自身の食べ物をもらうと二人が座っている席に行く。

「よう、」

「ああ、」

「おはよう、シアン君」

「（今日、話してみるか。）ねえ、シャルル。今日ちょっと話をしたいんだけど…」

「（？…まさか、気付かれた？）うん、いいよ。じゃあ、今日の放課後僕達の部屋で良い？」

「ああ、それでいい。（一夏には、部屋を出ていってもらおうかな。悪いけど）」

そして、一夏とシャルルは食べ終わり先に出て行った。

「じゃあ、先行ってるなー。」

「お先にー」

「ああ、後でな。」

「じゃあ、さっさと食いますか。」

10分で食事を済ませ、シアンは教室へ向かった。

教室…

S H R の時間

「今日は、学年別トーナメントの準備をする、故に午後の授業は力ツトだ、S H R を終わる。」

千冬さんは、そついうと教室を出ていく。

午後…

午後がヒマになったので、

シアンは、シャルルに話をしに行った。

一夏とシャルルの部屋…

「やあ、シャルルと一夏。」シアンは、手にお菓子を持って部屋へ行く。

「おう、よく来たな。」

「じゃあ、入って。」

「おじゃまします。」

と、シアンは部屋に入る。

「で？話って何？」シャルルはシアンに聞く。

「ああ、ちよつと一夏は席をはずしてくれないか？」

「？なんでだよ？」

「話しくいんだ……」

「……わかった。」

シアンのいつもと違う雰囲気気付き一夏は席をはずす。

「よし、じゃあ、シャルルに……いや、シャルロットに聞きたい。」

「……！（やつぱり、ばれたんだ……）ばれたんだね？」

「ああ、」

「このことは一夏も知ってるから、一夏も一緒にいい？」

「……じゃあ、いいよ。（一夏、どうやって知ったんだ？）」

そして、シャルルは一夏を呼ぶ。一夏も部屋に来たところで、

「じゃあ、まずなんで男装してたから話すね。」シャルルは、重い話の割に明るい顔で話す。

「いや、いい。理由は知ってるから。俺が話に来たのは解決策を提示しに来たんだ。」

「「!？」」突然の事に驚く二人。

「ど、どんなのがあるの？」シャルルは、とても興味深そうに聞く。

「ああ、昨日学園のスーパーコンピュータを借りてデュノア社にハッキングしたんだ。」

そしたら、シャルロットの事が分かった。

それと、デュノア社の違法行為とかいろいろでてきた。」

「よ、よくハッキングできたね、それにそんなに深いところまで……」シャルルは、シアンの意外な特技に驚く。

「まあな、（束さんに教えてもらったからな……）」

それでだな、これをカードにデュノアと交渉してシャルロットの身柄の解放してもらおうと思うんだけど……

これでいいか？」

シアンは、解決策を提示する。

「「……………」」二人が、どんなに頑張っても出なかった答えをシアンがあつさりと

見つけてしまったので微妙な表情の二人。

「あ、あれ？駄目だった？（何だよその微妙な表情。）」

「い、いやそれでいいんじゃない？」

「お、おうそれでいいと思うぜ。」

「んじゃ、夏休みにでもフランスに行ってみるか。」

「そうだね。」

夏休みの予定がまた一つ埋まったシアンたちだった。

その日の夜、シアンが惰眠を貪っていたらイタリアのプリン伯爵から電話があった。

「はいはい、久しぶりだね〜シアン君。」

相変わらずよくわからないテンションのプリン伯爵。

「（ホントよくわからんよな…）お久しぶりです。ロイドさん。なんか用事でも？」

「ああ、うん。今度、学年別トーナメントがあるんだよね？それに合わせて新武装を開発するから何か希望はある〜？」

こんな軽いノリで新武装を作ってしまうプリン伯爵は、やはりすごいのだろう。

「（新武装か…）うーん、特にはないですけど…強いて言うなら

もう少し強い近接武器が欲しいですかね？」

「うんうん、わかったよ。それならすぐ出来そうだよ。じゃあ、5日後までにおくるね。」

「（はや！）わかりました。では。」

「うん、じゃーね。」

ピツと電話を切る。

「（新武装…）楽しみだな…」

千冬さんは、準備に時間がかかり帰ってきたのはシアンが寝た後だった。

また、千冬さんがシアンの寝顔を見て悶えていたのは秘密だ…。

第21話（後書き）

最近gdgdな文章しか書けない…

感想等待ってます。

第22話（前書き）

今回は、短め。

第22話

次の日の放課後：

「「あ、」」セシリアと鈴がアリーナへ向かう途中の廊下ではち合
わせた。

そして、二人で模擬戦をすることになった。

そのころ、シアンとシャルル、一夏は一夏達の部屋でスマブで一
夏をフルボッコにするという
遊びをしていた。

「くそ、お前ら卑怯だぞ！二人して俺ばっか狙って！」

「フッフ、だって一夏ってちよろちよろ鬱陶しいんだもん。」シャ
ルルの放った一言で一夏は、orz状態になっている。

「まあ、そう落ち込むなつて。次は、手加減してピカチュで戦っ
てやるから（笑）」

「それ、お前の得意なキャラだろうが。」

そんな、コントをしていたらバーンいきなりドアが開けられ、入っ
てきたのは篝だった。

「た、大変だ！鈴とセシリアが模擬戦をしている！」ラウラと、が抜けると意味が違ってしまう。

「……？別にいいんじゃないか？」「……」なので、3人はこんな回答をする。

「お、お前達、そんな奴だったのか……鈴とセシリアがラウラ＝ボーデビツヒに一方的にやられていても

何も思わないのか……見損なったぞ！お前達イ……！」

と勝手に勘違いし走り去ろうとする。まぢうゝ　ゲフンゲフンちよつと嫌ですね。

「……ちよつとまで（まって）！」「……」と三人で箒を取り押さえる。

「あの、」とシャルル

「ラウラ＝ボーデビツヒと」と一夏

「模擬戦してるだと！」最後にシアン

「それを早く言えよ。」シアンはあきれる。

「す、すまん。焦っていたもので……」自分の非を認め謝る箒。

「ま、まあまあ、それよりどこで模擬戦してるんだ？箒？」一夏が聞く。

「あ、ああ第3アリーナだ。」

「わかった、ありがとな、知らせてくれて。じゃあ行こうシアン、シャルル。」

「「ああ（うん）」」

第3アリーナでは、鈴とセシリアがラウラに圧倒されていた。

ラウラが鈴を殴ろうとした時、

「その手を離せエエエ！！！！！」一夏がアリーナのシールドを零落白夜で切り裂き、ラウラへ斬りかかる。

が、ラウラのシュヴァルツエア・レーゲンの慣性停止結界
アクティブ・イナード・シャル・キャンセラ
A I C

につかまり、動けなくなる。

「っ
（なんだ？体が動かない！？）」

ラウラは、口元をにやりと上げ

「やはり、敵ではないな。この私とシュヴァルツエア・レーゲンの前では、有象無象の一つでしかない。

消える。」と言い、レールカノンを放とうとするが、『断^{ジャ}

ッジメント
罪者』

ズガン、ドガン。シアンが撃った断罪者^{ジャッジメント}によって妨げられる。

「くっ
貴様あ！」とラウラは、シアンをにらむ。

「まあ、一夏も俺の友達だ。さすがに友達がやられてるところ見て黙って見てられないんでね、邪魔させてもらった。」

と若干、怒気を込めてシアンは言う。

「邪魔するのなら、この場で一緒に葬ってやる……！」そして、プラズマソードを展開し、シアンに斬りかかる。しかし、ガキン

「やれやれ、これだからガキの世話は疲れる。」IS用の装備を身で扱う千冬さんが受け止める。

「なっ！？教官……！」ラウラは驚いた顔になる。

「シアンも、あまり危険なことはするなよ、それよりこれの決着は学年別トーナメントでつけてもらう。」

千冬さんは、この場を丸めこもうとする。

「教官がそうおっしゃるのなら。」そして、ISを解除する。

「シアンもそれでいいか？」

「いいですよ。」

「よし、それではこれ以降学年別トーナメントまでの間の私闘をいっさい禁ずる。解散。」

パァン、千冬さんの手をたたく音が響いた。

第22話（後書き）

次回は、明日更新します。

作者の中では、この作品のエンドの構想が出来上がりました。

あと、25話くらいで完結できると思います。

感想等まっています。

第23話（前書き）

やっぱり、戦闘描写は苦手です。

第23話

鈴とセシリアが、ラウラにフルボッコにされた後二人は、保健室に運ばれていった。

目立った外傷はなく、入院する必要はないようだ。

シアンたちは、鈴とセシリアのお見舞いに行くことにした。

保健室にて…

「なんで、助けたのよ!」「そうですね、あのまま戦っていれば勝っていましたわ!」

見栄を張る二人。

「何言ってるんだよ、ボロボロだったじゃないか。」「一夏は、あきれる。」

「好きな人の前でかつこ悪い姿を見せたのが、恥ずかしかったんだよ。」

シャルルが、紅茶と烏龍茶を持ちながら言う。

「な、何の事かしら?これだから西洋人は…。」

「そうですね、気分を害しますわ。」

ふと思った…

鈴+セシリア=金髪ツンテール じゃん。

「まあまあ、お茶飲んで落ち着いて…ね?」シャルルは、二人にお茶を渡しなだめる。

二人は、お茶を一気に飲み干す。

「それにしても、ケガも見た目よりましみたいだし…よかったな。」
シアンは、思っていた事をそのまま口にする。

「この程度けがの内はいらな　イテテ。」

「こんなところに居ること自体、意味不明ですわ　　っう」

こんなやり取りをしていると、ドドドド外から地鳴り？が聞こえてくる。

すると、ドーン、スライド式のドアが吹っ飛んだ。

そして、

「藍川君。」

「織斑君。」

「デュノア君。」

「……これ！」「……」
と紙を差し出す。

「えーと…今月開催される学年別トーナメントはより実践的な模擬戦を行うため、2人組みでの参加を必須とする。…」

「はい、ストープ。そこまでいいよ。」

「……………そういうことだから…私と組んで?」「……………」

保健室いっぱいの子女生徒が一斉に申し込む。

「（むう、俺はメンドイから一夏と組むか…あ、でもシャルルは性別ばれたら大変か…）」

シアンが、思考を働かせてると一夏が「あ！俺シャルルと組むから」と言ったため、

女学生徒は、一斉にシアンの方へ向く。

「……………じゃあ、シアン君は私たちと組むしかないわね……………」

女学生徒（１００人くらい）が一斉に詰めかけてくる。
しかし、

「はあ、やはりこうなったか…おい、少しどけ。」千冬さんの登場で女学生徒は真ん中ではつとばらせる。

「藍川だが…一年にばかり男子がいてずるい！、学年別トーナメントではこっちに來い

という要望があつてな…特例だが藍川を２年生の学年別トーナメントに出場することになった。」

千冬さんから、衝撃の事実が告げられる。

「え？聞いてないですよ、千冬さん。」ポス、シアンの時だけ優しい
syussekiibo

「織斑先生だ、それについては、すまない。だが、２年からお前の

リクエストが一番多かったのだ…」

「（理不尽？）わ、わかりました。ではペアはどうしたら？（2年に知り合いなんて…いるか。）」

「それなら、心配ない。更識が藍川シアン争奪サバイバルゲームで優勝し、お前のペアになることが決定している。」

「（もういいや、サバイバルとかもうしらない…）わかりました。では、」

何故か、若干頭痛のするシアンはすぐに部屋へ戻った。

1001号室にシアンが一切寄り道せず帰ると

何故かドアが開いていた。

「？（ドロボー？）」「シアンは一応警戒して部屋に入る。すると

「あ、おかえりー。シアン君。」楯無さんがいた。

「なんでいるんですか？」シアンは、半分呆れながら聞く。

「ん？そりゃあ、友達のおうちに遊びにきたんだよ？」と疑問形で返す。

「なんで、疑問形なんですか？それに俺に家をピッキングする様な友達はいません

（…つかれるな、なんか）」

「（あちゃ、今日はなんかお疲れのようだね…出直しますか。）うーん今日は、ちよつとあいさつ

しとこうと思ったただだから…ごめんね、じゃあまた明日生徒会室に来てね。じゃあね。」

そして、楯無さんは立ち去って行く。

「（ふう、これで大分落ち着ける…すこし寝ようかね…）」

すると、朝まで寝てしまった。

3日後の放課後…シアンは、楯無さんに新武装のテストをするために模擬戦を申し込んだ、もちろんすぐにOKが出た。

第4アリーナ北側ビット…

「よし、^{インストール}量子変換終了」かなり上機嫌だ。

「じゃあ、さつそく使ってみますか。」

そして、ISを起動しアリーナへ飛び出す。

アリーナでは、すでに楯無さんが待っていた。

「遅かったわね。何してたのかしら？」

「失礼、少々準備に時間がかかってしまっただけ…それにしてもなんで、こんなにギャラリーが居るんでしょうね？」　そう、今第4アリーナの客席は、2 / 3 くらい埋まっていた。

「気のせいじゃない？それより早く始めましょう。」

そして、楯無さんはランス　そうりゅうせん　蒼流旋を呼び出す。

「そうですね。」

シアンは新武装である槍　グングニルを呼び出し、大型ウイングスラクター4門を全開にして、突撃を掛ける。

ズガ　グングニルが楯無さんの水のヴェールをえぐり、本体に直撃、絶対防御が発動する。

「グッ（すごい突破力ね…）」　シアンは、その勢いのまま楯無さんから離れると今度は、グングニルを投擲した。

「！？（武器を投げるなんて　）」　楯無さんは余裕で避けるが、グイン、グングニルが後ろの方に付いていたブースターが起動し、ジャッジメント　断罪者の様に追尾し楯無さんに命中、シアンのもとに戻って行く。

「グウッ！??（銃弾だけじゃなくて、槍まで追尾型なの!??）」　さすがの楯無さんも対処しきれない。

「…………（4門同時の瞬時加速はSE的にきついな。200も使っちゃまった。）」　イグニッションブースト

「ハアハア（まだ、攻撃すら出来てないのにすでにSEが2/3を切った。強くなったわね…

それにしても…あんなスピード出したら、Gでだめになると思うんだけど…まあ、そのことは

またあとね…）」

次に楯無さんは、ラスティ・ネイル蛇腹剣を呼び出し、シアンへ斬りかかる。

「くっ！」シアンは、グングニルでなんとか受け止める。しかし、手数の多い楯無さんに押され始める。

「っ！（グングニルじゃ駄目だ、こいつだと、押し切られる…一度距離をとって…）」

シアンは、距離を取るためにイグニッションブースト瞬時加速をつかう。

しかし、その先にはすでに楯無さんがランスを呼び出した状態で待ち構えていた。

「な！？（読まれてた！）」

「いらつしゃーい」ランスに内蔵されたガトリングを全弾撃ちだす。ズガガガガガ シアンに直撃する。

「グワア（これは、痛いな。SEは…心もとないな…決めるか…）」
シアンは、ジャッジメントすぐに立て直し断罪者を呼び出し、ズガガガガンと6発連射する。

「くっ（これは、厄介ね…）」ギリギリで避け、弾が地面にめり込む。

「（さすがに、地面にめり込んだのは追ってこないわよね？）」楯無さんはたかをくくる。

「フフ、断罪者は、貴女を喰らうまで消えませんよ。」そして、地面から

ジャッジメント

断罪者の弾が楯無さんに全弾命中する。

「グッ（そんなー!!）」断罪者の全弾命中で楯無さんのSEが0になる。

ジャッジメント

ワアアアアアア

番狂わせに会場が沸く。

「っ（負けちゃった…生徒会長の座も譲らないとね…）」楯無さんは、少し落ち込む。

「ふう、（やっぱり強いな、流石は国家代表だな…）」

「シアン君、あとで生徒会室に来てね。」そういつと、楯無さんはアリーナを去っていく。

「（？まあ、いつか。）」

そして、シアンは着替えて生徒会室へ向かう。

模擬戦後、生徒会室にて…

シアンが入ると楯無さんはもうそこに居た。

「こんばんわ。」シアンがあいさつすると

「やあ、それにしてもすごいね。生徒会長である私に勝ったということは、

この学園で最強という事なんだよ、だから次の会長には君ね。」

「え！？いやですよ。」しらつとシアンが応える。

「え！？なんで？生徒会長権限ってすごく便利よ。」使い方が、もろ私欲だけどね。

「そもそも、さっきの模擬戦、非公式ですよ。」シアンが、一番大事なことを言う。

「あ、」すっかり忘れてた、楯無さん。

「だから、俺が会長になる義理ありませんね。」

「そうね…最後にもいい？」

「はい、なんですか？」

「今日、大型ウィングスラクター4門で瞬間加速使ったけどあれって、相当Gが掛かると思うんだけど大丈夫なの？」模擬戦の

時から思っていたところを聞く。

「ああ、そういえば大丈夫ですね…最初はつらかったんですけどね、最近はなれたのかな？」

「そ、そう（Gって慣れる物なのかしら…？）」

「じゃあ、今日は疲れたんで帰ります。また明日。」

「ええ、じゃあね。シアン君。」

帰ったら、たまたま早く帰ってきていた千冬さんが居た。

「あ、千冬さん。ただいま。」

「む、シアンか、おかえり。今日は、大変だったな。更識と模擬戦したんだろう？」

「あ、はい（そんなに有名になってるのか？）」

「で、どうだった？（さすがに勝てはしないだろう）」何故か結果は知らない千冬さん。

「勝ちましたよ、ギリギリで。新武装がなかったら負けてましたね…」

「なんだと！？更識に勝ったのか？あいつは、国家代表なんだぞ。」
ガチでびっくりしている。

「そ、そんなにおかしいですか…（シュン）」すこし、すねるシアン。

「うつ（こ、心が痛いな…）いや、流石はシアンだな。」

「そうですか、よかったです。」復活が速いシアン。そして、にっこりとする。

「ふう、（この笑顔を見るためなら、なんでも出来る気がするな…」
／／（）」

その後、他愛もない話をした後シアンはすぐに寝た。

第23話（後書き）

戦闘描写についてアドバイス、批判等まっています。

それよりも、まずいです。

楯無さんにフラグが立ちそうです。

はやく、へし折らねば…

では、また。

第24話（前書き）

最初に謝つときます。すいません。

第24話

シアンが楯無さんと模擬戦をした、2日後学年別トーナメント当日。
シアンと楯無さんは、試合を見ていた。

「いやー、流石2年生ですね。」シアンがじじいみたいな事を言う。

「まあ、1年生より弱かったら問題あるわね。」
そんな会話をしていると、アナウンスが入る。

『あと、10分ほどで1年生の第1試合が開始されます。』

「んー？見に行く？」楯無さんは聞く。

「暇ですし、行きますか。」

「そうね。」そして、2人は試合を見に行く。

10分後、とても混んでる道を生徒会長命令でどけて比較的スムーズにアリーナに入り、
ギリギリ、間に合わせる。

「ふう、何とか間に合いましたね。（裏技使ってたけど…）」

「ええ、でも便利でしょ？生徒会長権限って。」

「ですねー（ジト目）」

「な、なに？そのジト目は？」

「いえ、かなしいなと思って。」

「……………」

こんなやり取りをしていると、試合が始まる。

「お、始まりましたよ！」シアンは、遠い目をしている楯無さんを呼びもどす。

「あ、そうね。」

丁度、一夏&シャルVSラウラ&箒の試合だった。

「注目のカードだったんですね。だから混んでたのか…。」

「なるほどね、まあ、生徒会長には関係ないんだけどね。権限あるし…」

「（やっぱり、生徒会長って便利だな…この人が辞めたら俺がやるう。）」

そして、試合が始まって15分ほど経ったとき、

試合が動き出した、箒がやられ、ラウラと一夏&シャルの1対2の戦いになった。

「さすがのボーデビツヒも2対1はきついかな？」

「……………（まずいわね、もしかしたらVTシステムが…）」
楯無さんは難しい顔をしている。

「？（なんか難しい顔をしてるな、楯無さん。）」

さらに、10分後

ついに、シャルルがラウラを追い詰め、パイルバンカー 灰色の
グレースケール
燐殻通称、盾殺し（シールドピアース）
を放つ。そしたら、楯無さんが急に立ち上がり管制室に走り出す。

「え！？何を？」シアンは楯無さんを追いかける。

5分後、管制室に着くとラウラの機体が溶けて全身装甲のナニカになっ
ているところだった。

「！！（何だ？あれ？）」シアンは、驚愕する。

「なんだ？お前達？」千冬さんは、急に入ってきた楯無さんとシアンを怪訝そうに見る。

「え、ああ、楯無さんが急に走り出して…」シアンがそついうと楯無さんが

「VTシステムですね？」

「VTシステム？」シアンは聞きなれない単語に疑問を浮かべる。

その疑問に気付いた千冬さんが説明する。

「ヴァルキリー・トレース・システムの略称だ。意味はそのまんまの意味で、本来禁止されているのだが…」

更識の方で何か聞いていないか？」千冬さんは、楯無さんに聞く。

「ええ、聞いています。ラウラーボーデビツヒの機体に搭載されているかもしれないと。」

「そうか…討伐は、織斑に頼むつもりだが…いいか？」

「かまいません。失敗した場合は、私が行きますね。」

「いいだろう。」

話が終わったところに丁度一夏が零落白夜を発動させ、ラウラを救出したところだった。

「終わったな。」千冬さんは、どこか安心した声をしていた。

「そうですね。」

「事後処理が大変ですね、がんばってください。お二人とも。」
シアンが現実を突きつける。

「……………（そ、そうだった…）」
すっかり忘れていた二人。

「（山田先生に押し付けるか…）」千冬さんは、すでに解決策を見つけていた。

「（こういうのは、虚にまかせましょ）」楯無さんも見つけていた。

その頃、山田先生と虚さんは、ザワ、

「「！？」（やな予感がする…）」となっていた。

そして、結局今回の一件で一年生は試合は、1回戦のみを消化し中止、

二、三年生は、時間短縮のため全試合中止となった。

保健室…

太陽が、大分低くなってきたころ、ラウラ＝ボーデビツヒが目覚めました。

「気がついたか？」千冬さんは、ラウラに話しかける。

「教官！」ラウラはすこし、驚く。

「疲労しているからな、今日1日は安静にしておけよ。」

「はい。」

「ラウラ＝ボーデビツヒ！」千冬さんが、急にラウラを呼ぶ。

「は、はい！」

「お前は誰だ？」いきなり訳のわからないことを言う。

「は？私は…」

「決まっていけないのなら、これからラウラ＝ボーデビツヒだ、時間にはたっぷりある
しつかり悩めよ、小娘。」そう言い残すと千冬さんは保健室を出ていく。

「はい！」

「話は、終わったな？」不意に男の声をする。

「っ！？誰だ？（気配が感じれなかったぞ）」

「そう、怒るな。俺は勧誘しに来たんだ。ラウラ＝ボーデビツヒ」
現れたのは、20歳前後の青年だった。

「俺は、…まあ、」とでも名乗るところか…俺の勧誘を受けてくれたら、本当の名を教えてやるよ。

じゃあ、本題に入ろう。…俺たちは、今世界を変えようとしている。そのための、兵が必要だ。そこで君の力が必要なんだ。遺伝子強化試験体。」

」と名乗る男は、ラウラの秘密を暴露する。

「！何故その事を！？」ラウラは警戒を強くする。

「調べたからさ、それだけの情報収集能力があるってことの裏付けにもなるな。」

それで？どうする？こちら側に来るか？」

「……（まずいな……私が全く気配に気付けなかった相手だ。勝ち目はない……」

かと言ってテロリストになるつもりもない。」

ラウラは、葛藤する。

「（んーもうひと押しかな？）まあ、ちょっと早いけど俺のこと教えるわ、

俺は、」

「……！！……」ラウラは、ひどく動揺する。

「じゃあ、お前も……」

「そつだよ。俺も遺伝子強化試験体だ。俺が、この組織に属する理由はたしかに

世界を変えたいとも思っている、だが一番大きいのは、俺をこんな化物にした。研究者への復讐^{クズ}だがな。」

お前も思った事ないか？自分は、なんでこうなっている。」

「………ないと言えばうそになる。」

「だろう。だったら一緒に戦おうぜ！兄妹。」は、ラウラを妹と呼んだ。

「フッ、いいだろう。愚兄！」ラウラは」を兄と呼んだ。ただし、『愚』がつくが…

「おいおい、愚兄はないだろう？親しみをこめてジェノスお兄ちゃんって呼んでくれ。」

「む、じゃあ、ジェノスお兄ちゃん…こ、これでいいか？」

「おおっ…いいよ、すごくいいよ！」どうやら」 ジェノス「ボ―デビツヒは変態の様だ。」

そして、ラウラは軍人から犯罪者になった。

第24話（後書き）

すいません。特にラウラ党の人。

そろそろ、敵組織を出さないとオリジナルに入れないので…
ごめんなさい。

それでは、また次回もよろしくおねがいします。

感想、批判等どんどん送ってください。

番外編2 ハロウィンでレッツパアリイイ（前書き）

読まんでもいいです。

番外編2 ハロウィンでレッツパアリイイ

10月31日：言わずと知れた？ハロウィンの日。

IS学園では、イベントが開かれていた。

名付けて『秋だ！ISだ！ハロウィンだ！藍川シアン、織斑一夏争奪戦ハロウィンパーティー！』

ネーミングは、気にしない方向で…

ルールは簡単

IS学園に存在する、主要部活動はお菓子を作り、シアンと一夏に試食してもらい

一番おいしいと言わせた、部活にシアンと一夏が入部するというルール、

もちろんシアンと一夏は、どれがどのお菓子かは知らない。

当日、多目的ホールにて…

『さあ、はじまりました！藍川シアン、織斑一夏争奪戦ハロウィンパーティー！！』

準備はいいか？野郎ども～～～！！！！』

「「「「「うおおおおお!!!!」」」」」

おそろしい、雄たけびを上げる女子たち。

『元気があってよろしい。では、さっそく行ってみようか!』
司会の人がそういうと、シアンと一夏の前にクッキーが出される。

「「いただきます。」」サクッ

二人は、少しかじる。

そして、二人に衝撃が走る。

「!!(な、なんだ?これは?鼻に来る。)」

「!!(こ、これはまさか…)」

「「わさび塗り込んだな〜!!!!」」

『おお、いきなり、衝撃の作品です。この、お菓子を作ったのは…
リアクション研究部です。』

「「「「「いえーい、良いデータが取れました。」」」」」
どうやら、この部が欲しいのはシアンと一夏ではなく、二人のリアクションだったようだ。

『では、気になる結果をどうぞ…』ごくろ、会場が息をのむ。

「0点にきまつとるわ!!」二人は、かなり怒りを込めて言う。

「くそー」

『では、あんなゲテモノを出した、リアクション研究部に憐れみの拍手を!』

バチバチバチ、約二名からは若干殺氣立っている。

『それでは、次の作品です。』

次に運ばれてきたのは、チョコレートだった。

「おお!」二人は、その出来栄に感嘆する。

『では、どうぞ。』

パク、二人はゆっくりと咀嚼する。

「!」

二人に再び衝撃が走る。

「これは、非の打ちどころがない……完璧だ！」

「（うまい、甘すぎず、くどくないし苦くもない、すべてが丁度いい。完璧だ！）」

「お？これは、期待できそうか？では、結果をどうぞ！」

Perfect!!

何故か、二人から英語が出てくる。

『おお、最高得点をたたき出した。この部は…なんと！ラグビー部です！』

「ええええええええええ！！！！？？？？」

「嘘です！本当は、生徒会です。」

なんだよ、ビックリさせんなよ、などと不満の声が聞こえるが、このMCは全く気にしない。

「それでは、次行ってみよう！」

こんな感じにどんどん消化されていった。

ときたま、え？これお菓子？どうみてもちゃんこ鍋。他には、あの紫の煙が上がってるんですが……

結局、Perfectを出したのは、生徒会だけだったのでシアンと一夏を獲得したのは、生徒会でした。

シアンと一夏は、次の日学校を休んだ…理由は簡単だ、紫の煙の上
 げている物を
 食べたからである。

後日、シアンの記事にこんな記述があった。

[illegible]

数日間、シアンは紫恐怖症になり自身の専用機のカラーリングを変

え
た
そ
う
だ。

番外編 2 ハロウィンでレッツパアリイイ (後書き)

ggggですぬ...

作者もビックリです。

第25話（前書き）

一人称も三人称もあんまり得意じゃないですが、

一人称の方が苦手でした…

第25話

ラウラだ！今回は、どうやら私視点で送るらしい

私が、VTシステムを起動させた次の日。

私とお兄ちゃんとは組織の日本アジト本部に来ているその中でもVIPルームの前だ。

さっきお兄ちゃんが、今度ここにいるボスを呼びに行ったので私は今一人でいる。

ガチャリ、ドアが開くとジェノスが出てくる。

「はいつてだつて。」

「わかった。」

そして、中に入ると

25歳前後の男が居た。

「やあ、ラウラ＝ボーデビツヒ君。我々は、君を歓迎する。」

「ありがとうございます。失礼ながら、貴方のお名前を教えてくださいませんか？」

名前くらい教えてほしいな。

「ああ、すまない。私は、藍川シエンだ。」

藍川！まさか…

考えを読まれたのか、シエンは…

「お察しの通り、私は藍川シアンのだ。」

「どうだ？シアンはしっかりやっていたか？」

そんな…この事を藍川が聞いたらどう思うんだろう。

「ええ、皆と打ち解けていたようでした。」

「そうか…（今の世界を楽しんでいるのだろうか…シアンは…）」

心配なのか？兄はそういうものなのか？じゃあ、ジェノスお兄ちゃんも…

「そうだ、君にはすまないがこのままIS学園に在籍して潜入していてくれないか？」

「全く問題ありません。」

「すまないな。」

「いえ。」

「ん？話は終わった？ラウラは、どうする？帰る？」

「ドイツに行っていることになっているから…3日は帰れない…この見学をしたらいけないか？」

「全然OKだよ、俺が案内しよう。」

「ありがとう。お兄ちゃん！」

「おおー！いいよ、お兄ちゃん何でもしてあげる。」
「ん？若干鼻息が荒いが…何故だ？まあ、いいや。」

ラウラ視点終了。

その後、ラウラとジェノスはアジトを回ってラウラは、アジトに用意された自室に帰った。

ラウラがアジトに行っていた日：1001号室

千冬さんは、事後処理を終えたが難しい顔をしていた。

「（ラウラ…あいつ、ドイツに帰ると言っておきながら帰っていない…）」

何故分かるかと言うと、ドイツに問い合わせたところ帰ってくる予定はないと答えたからだ。

「（つまり、私たちに言えないような外出をしているという事…何があるのかは、全く見当がつかない…」
結局、見守ることしかできないのか…）」

千冬さんは、ハアアと海より深いため息をつく。

そしたら、シアンが帰ってくる。

「ただいま。」

「あ、おかえり、シアン。」夫婦みたいな二人。

「今日は、早いですね。」

「ああ、それよりラウラの事だが…」
そう言うとシアンの顔が険しくなる。

「（まだ、気に入っていないようだな…まあいい）今、ラウラはドイツに行っていると本人から報告を受けた。
だが、ドイツに問い合わせたのだが…帰ってくる予定はないようだ。」

「！え？なんで？そんな嘘についてまで言えない用事があるんですかね？」

「そうなんだろうが…（そんな物があるのか？あのラウラに…）」

「とりあえず、ボーデビツヒに聞いてみたらどうですか？」

「（そうするしかないか。）わかった。そうしてみよう。」
そして、ラウラの話を切り上げる。

「そうだ、もうすぐ臨海学校だ。しっかり準備をしておけよ。」

「はい。」

「では、寝るか。」

シアンは、寝る。

その日、シアンは夢を見た。

親がまだ生きていて、兄もまだ一緒だったころ…
温かい夢を見ていた。

「…ん…（懐かしい夢だな…兄貴…どうしてるんだろ？たまに、家に手紙が届いてるから生きてるんだろうけど…
何で、どこかに行ったんだ？でも、なんで今頃こんな夢を…？ま、いいや。）」

波乱の臨海学校まで…あと5日。

第25話（後書き）

今回やる意味あるのか？って考えている作者です。

早く、夏休み編書きたいなあ

感想等待っています。

第26話（前書き）

すいません、朝学校行く前にササッと投稿しておこうと思ったんですが…

回線が込んでいてログイン出来なかったの…

みなさんは、どうでした？

第26話

臨海学校までの5日間特に何もなく過ぎ去り、臨海学校当日。

『海、見えた！』誰かが、そう叫ぶと車内が騒ぎ出す。
しかし、シアンは…

「……………すう…………」爆睡だった。また、その寝顔を見てハアハア
言っている人もいた。

目的地に着くとまずは、お世話になる旅館へあいさつしに行く。

「……………こんにちは。」「……………」全員であいさつする。

「こんにちは、皆さん元気があっていいですね。」
と女将さんが男子2人の方へ来る。

「あなた達が…？」

「あ、はい。藍川シアンです。よろしく願いします。」
シアンが丁寧にあいさつする。

「こちらこそ、清州景子きよすけいこです。」

すると、千冬さんが、一夏にも挨拶するように促す。

「ほら、お前もあいさつしろ。」

「お、織斑一夏です。」

「はい。」

そして、清州さんは全生徒の前に行き、

「海に行かれる方は、荷物を置いた後更衣室へ。」

「「「「はい。「「「「」

女子の大移動が始まる。

「あ、そうだ！千冬さん俺たちの部屋ってどこですか？」

「ああ、シアンは私と同じ部屋で、織斑はその隣の部屋だ。」

「わかりました。」シアンと一夏も部屋へ移動する。

部屋に着くと…

「よし、じゃあ俺たちも海に行くか！」一夏がそう言うと、

「じゃあ、日焼け止め塗って、テーブル持って、パラソル持って、ベットもいるな…あと、ビーさんとグラサンは必需品だな…。」
とシアンが用意を始める。それも、かなり用意周到だ。

その後、着替えて荷物を持って海に行った。

二人が浜に来ると、すでに来ていた女子が騒ぎ出す。

『あ！藍川君と織斑君だ！』

『え、どこどこ。私、水着変じゃない？』

『二人ともしっかり鍛えてるんだね。…じゅる』

「…ビクッ（今、何か寒気が…）」

「んじゃ、一夏は泳いでくるか？」シアンは、泳ぐ気がないようだ。

「シアンは、海嫌いだったな。」

「？忘れてたのか？」

「いや、何か言わないといけない気がする…」

まあ、そんな一夏は置いといて…

シアンは、パラソルを立てベットの置き、グラスを掛けて、テールを置きそこにジューズをセットする

完璧にバカンス気分だ。さらに、この間の時間わずか30秒。

「ふああ、眠…ぐう」シアンは、寝てしまう。

しばらくして、一夏がお前、どこのギャルゲーだよって展開になったり、千冬さんが

際どい水着で海に出てきたが、全く起きる様子のなかったシアンだった。

ちなみに、千冬さんはシアンの写真を結構隠し撮りしていた。

「……おい……起きろ！」一夏は、全然起きないシアンを起こす。

「……う？……おお、一夏か……。」シアンは、ようやく起きる。

「ほら、メシ食いに行くぞ。」

「すぐ、行こう！」空腹だった、シアンはメシと聞くとすぐに起きる。

「お、おおつ。」

ちなみに、何故かシアンは教員と一緒に席だった。

どうやら、千冬さんが裏から手をまわしたようだ。

夕食後、男子が浴場を使える時間に風呂へ入り、部屋に帰った。シアンは、千冬さんが居ない事を良い事に

冷蔵庫から秘密にチューハイを取り出し飲もうとする。

「残念だったな。もう帰ってきた。」

「あちゃ、こ、これはカルピスソーダですよ。」そして、後ろに隠す。

「まあ、今日くらい見逃すさ。」寛大な心を持つ千冬さん。

「あ、ありがとうございます。」

「次は、ないぞ。」シアンに対してだからあんまり怖くない。

「は、はい。」

「フツじゃあ、今日は呑むぞ！」

千冬さんも、冷蔵庫からビール（プレミアム・モルツ）を取り出し
ふたを開けて、一気に飲み干す。

結局、部屋の冷蔵庫のお酒をすべて飲み干したあげく、山田先生の
部屋に上がり込み

お酒を全部かつさらって行ったりして、楽しかった。

その後、シアンの2・3倍の量飲んだ千冬さんはついに酔いつぶれ、
シアンが介抱していた。

「（やれやれ、だからあんなに一気飲みしない方がいいって行つた
のに……）」

なんと、千冬さんは最後には、アルコール度数50%の酒を瓶で飲
んでいたのだ。

「……うつ……」千冬さんは、顔を真っ赤にして横になる。

「（うつ、酒臭い……酒気に充てられる……でも、やっぱりきれいだよ
な……／＼／＼）」

こんなやり取りをしている中、ラウラは、外、誰もいない場所でジエノスたちと通信していた。

「では、明日、銀の福音が暴走するんだな？」
シルベリオ・ゴスベル

『そう、それに便乗して家の無人機を少し送ることになってるからね。』

「わかった、では明日。」

『明日ね。』ピッラウラは小型ディスプレイを切り、旅館へ帰る。

「…（明日か…）」

ちなみにシアンは、千冬さんを介抱したのち、自分も寝てしまった。

その日、また、家族の夢を見た。

第26話（後書き）

シアンの家族の設定があつたことに気付かなかつたと思いますが

実は、最初の方の設定に書いてあるんですよ。ちょびっただけ…

どんどんひどくなっていく文章ですが、よろしくお願いします。

次は、ジェノスとシエンについての設定を載せよう

と思います。多分今日中に…

第27話（前書き）

すいません。ジェノスとシエンの設定はあとがきにちよつとずつ載せることにしました。

シアンの画像がみてみんな：<http://4179.mit.edu/~innet/i34098/>

第27話

臨海学校2日目：

この日は、専用機持ちは各機のデータ採りを一般生徒は、訓練機での研修となっている。

砂浜で、シアンはなかなか届かないパッケージにイライラしていた。

「（おいおい、プリンさん。パッケージいつ届くんだ？）」「
そう考えていると、

「ごめんねー遅くなってー」なんとプリンさんが現れた。

「あれ？今日来る予定でしたっけ？」

「許可とつたんだよ態々。ごめんだけど、ちょっと体見せてもら
つていい？」

はたから聞いたら、変態この上ない発言だがプリンさんにそういつ
た趣味はない。

「？はい。」疑問を持ちつつも上着を脱ぐ。すると、周りの女子が
顔を赤くしたり、鼻血を出している人もいた。
ちなみに、千冬さんは何とか耐えていた。

「うんうん。やっぱり…」プリンさんは、シアンの体を見ながらう
なづく。

「何がやっぱりなんですか？」

「んー？ああ、最近送られてくるデータで君、Gに対する耐性が出てきているみたいだから、
見に来ただく、そしたら、案の定だったねえーうん、やっぱりリベリオンに乗ってたからかな？
リベリオンって実は、普通に8Gぐらいかかってるんだよ、スラクター全開にすると、10Gぐらいかな？」

と、とんでもない事を言う。

「あーやっぱり、そうなんですネ。」

「心当たりがあるみたいだね、それはいいとして、それなら、このパッケージを使っても大丈夫だね、
じゃあ、量子変換インストールを始めるから、リベリオン出して。」

「はい。なるべく早くお願いします。（早く、テストしたいし…）」
シアンは、リベリオンを差し出す。

「はいはい」そして、プリンさんは始める。

5分後、驚異的な早さで量子変換インストールが終わった。

「よし、終わり。じゃあ、この超高機動型パッケージ『光の羽』ルーチエディビューマ
の説明をするね。」

「はい、おねがいします。」すると、プリンさんは空中投影機で説明パネルを出す。

「うん、光の羽は、ルーチエディビューマ僕の研究所の開発した

エネルギーウイングを搭載しているんだよ。エネルギーウイングはね、

背部のこの装置から翼状のエネルギーを放出するものでね
既存の全ISの中で最も速い速度が出す事が出来るんだ」

まあ、今のところシアン君ぐらいしか乗れないかな？

エネルギー消費がとっても激しいから、稼働時間は15分が限界かな。」

と長々と説明する。

「稼働時間がネックですね。」

「そうだね、これから改良して、標準装備出来るようにするつもりだからね。」

じゃあ、データ取るから起動させて飛んでみて。」

「はい。」

そして、シアンはISを受け取るとすぐに展開し上に飛ぶ。

それを視認出来た者は居なかった。それぐらい速いのだ。

「……………」周りに居た人は固まってしまった。

「（おいおい…消えたようにしか見えなかったぞ…）」
千冬さんですら、何も見えなかった。

「うんうん、データ通りの結果だよ」じゃあ、僕は帰るね」

そう言ってプリンさんは帰って行く。

すると、上からシアンが降りてきた。

「あれ？プリンさんは？」

そして、次は束さんが現れて紅椿をお披露目し、また周りを驚愕させていた。

「なあ、シアン……」一夏が、シアンを呼ぶ。

「何？」そっけなく返す。

「いや、紅椿とシアンの機体どっちが速いんだ？」

「……………やってみるか。」

そんな一夏の一言でシアンと箒のタイムレースが始まった。

結局、シアンが勝ったのだがそれが、束さんは不満だったようだ。

「（私の作った子が、他の奴が作ったのより遅いなんて…作ったやつは許せないな…」

まあ、シー君には悪いけど今日、壊させてもらっよ、あとその機体を作ったやつも殺さなきゃ…」

その後、山田先生が走ってきて、千冬さんに何かを伝えると千冬さんは専用機持ちを招集し一般生徒に部屋へ帰るよう指示し、部屋から出るなと言って旅館に帰る。

作戦本部：

昨日は、生徒が夕飯を食べた部屋には大量の機材が持ち込まれていた。

「では、お前達を呼んだ理由を説明する。」
千冬さんから説明がなされる。

「先ほど、アメリカとイスラエルが共同開発した銀の福音が
試験飛行中に暴走した。」
シルベリオ・ゴスベル

「え！でも何で俺たちを…」一夏は、疑問に思う。

「話は最後まで聞け、福音が2時間後にここから2キロ先の海上を通る事が判明した。それを専用機持ちで対処しろとの事だ。」

「でも、普通は教師部隊で対処するべきだと思いますが…」シアン

が尤もな事をいう。

「ああ、そうだ。だが、如何に教師部隊とは言え使う機体は第2世代機だ。

第3世代の最新機を相手をできるとは思えない…幸いなのか今年の1年は専用機持ちが大勢いる。

それに、最近データを取る機会がなくて困っているのだろうか？」

「……………」

正論を言われ押し黙る。

「そういうことだ。では、作戦についての質問は？」

するとセシリアが、スペックデータを要求しそれに基づいて作戦を立てる。

「この速さで動いてるなら、やっぱり一撃で落とさないとね…」シヤルルが思った事を言う。

「そうね、一撃で倒すなら…零落白夜…つまり、一夏あんだね。」鈴がシヤルルの言葉を受け継ぐ。

「問題は、どうやってそこまで運ぶか…攻撃にすべてのエネルギーを使いたいだろう。

（福音の暴走だけでなく、家の無人機も来る…大変だな…）「ラウラは、助言する。

「それなら、シアンさんのリベリオンか、わたくしの強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』」

のどっちかでしょうか？」セシリアが解決策を上げる。

「いや、俺の機体だと一夏がついてこれないから、セシリアのがいだろう。」

シアンが俺のは駄目だと告げると、一夏が、今さらな事を言う。

「ちょ、ちよつと待て、俺が行くのか？」

「『『『『^{ですわ}当然！』』』』全員の言葉が一致する。

「織斑、これは実戦だ。覚悟がないのならやめて、さっさと部屋に帰れ。」

千冬さんが一夏を試すように言う。

「！いえ、やります。俺がやります。」一夏は、覚悟が出来たようだ。

「よし、ではオルコット、パッケージの量子変換^{インストール}は終了しているか？」

「ちょーと待った。その作戦ちよつと待ったなんだな〜！」

作戦が決定したと思っていると上から束さんが現れ、紅椿の出番だと言って作戦を変えることになった。

「では、最終決定した作戦だ、

織斑は、篠ノ之に福音まで運んでもらい、零落白夜で福音を落とせ。

藍川は、作戦失敗の場合全力で二人を連れ帰ること。以上

作戦開始までに各自準備をしておけ。」

そして、作戦は決まった。

浜にて、

『作戦開始まであと10分だ』千冬さんがそう言つと、一夏と箒は作戦の最終点検をする

「ふう、結構緊張するな」一夏がそう言つと。

「何を弱気になっているんだ、私と紅椿が居るんだ。大船に乗ったつもりで居ろ。」

箒が調子に乗ったことを言う。

「あ、ああ（箒、浮ついてる？）」

一夏でも気付くぐらいの浮つき具合の箒。

『織斑、篠ノ之はどうも浮かれているな…気をつけていてくれ。』と千冬さんから通信が入る。

「わかつてるよ千冬姉。」

『織斑先生だ、頼むぞ。』

そして、次はシアンに通信が入る。

『シアン…藍川、篠ノ之は浮かれているおそらく何かしらのミスをする。』

織斑にも気を付けるように言ったが、限界がある…頼むぞ。』

「はい。そうだ、この戦いが終わったら話があるんですが…」

『？ああ、わかった。じゃあ、ちゃんと帰ってこいよ。』

「はい！」

『ん、そろそろだな。』

時計を確認すると、もうすぐ作戦の時間だった。

『では、作戦開始！』その一言で作戦が始まった。

その頃のラウラが所属する、テロ組織の作戦本部にシエンとその部下が居た。

「まもなく、織斑一夏と篠ノ之箒が銀の福音と交戦距離。」
部下の一人がそう報告する。

「そうか、では無人機の準備を…（頑張ってくれよシエン）」
シエンは、指示を出す。

「了解。」

場所は戻って、一夏と箒…

二人は、福音を攻撃するが避けられるを繰り返していた。

「くそ、当たらねえ！」

一夏は、悪態をつく。

「（ここは、私が！）」 箒は、一気に福音への距離を詰め斬りかかる。

福音が箒の相手で手間取る。

「今だ！一夏！私が抑えている間に！」

「おう！」一夏は福音に斬りかかろうとするが、そこに密漁船が通りかかる。

「な！？船？この海域は封鎖したんじゃ…、密漁船か！チッ！」

一夏は、チャンスをフイにして船を助けに行く。

「な！おい！一夏！そんな奴を助けるな！！！」

「箒、そんな事言つなよ、そんな悲しいこと言つなよ、力を持った瞬間、周りのやつが見えなくなるなんて、らしくない。」

その言葉を聞いた時、箒は、剣道の全国大会を思い出していた。いや、思い出してしまった。

自分の暴力で、相手を気づ付けてしまった時の事を…

「私は…違う、ただ、一夏と一緒に戦えるのがうれしくて…」
と完全に福音から注意をはずしてしまう。
すると、福音は銀の鐘シルバーベルを箒に向かって放つ。

「箒イー（間に合ってくれ!）」

一夏は、箒を庇う為に全速力で箒の前に行く。

そして、ズガガガ一夏は、銀の鐘シルバールを受ける。

「ハッ！一夏…？い、一夏ー！ー！！」箒は、我に帰ると叫ぶ。

「……藍川から作戦本部へ、作戦は失敗。織斑一夏は撃墜。オペの用意を頼む。それでは帰還する。」
シアンは、作戦本部に報告する。

『了解。』

千冬さんのその言葉を聞くと、エネルギーウィングを展開し

二人を連れて福音が追いかけられず、二人が耐えられる速さで作戦本部に帰還する。

旅館に帰ると一夏のオペがすぐに始まった。

第27話（後書き）

ジェノスの設定から

ジェノスⅡボーデビツヒ

身長190センチくらいの長身

体重は75キロくらい

容姿は、上の上、目の色は黒、目の色も黒
日本人のような顔をしているが、ドイツ人。

生い立ち：ラウラとおなじ遺伝子強化試験体ラウラとおなじ
遺伝子の配列パターンで、うまれた。
自分を作った研究者たちを憎んでおり、復讐をするために
テロリストとなった。

設定はこんな感じで：次回はシエンの設定を、

今回は、一夏撃墜でした。

微妙な所で切ってすいませんでした。

次回は、明日です。よろしくおねがいします。

今、ちょうど軌道に乗ってきてどんどん書けます。

ま、面白いかは別ですが…

それでは、この辺で…

次回もまた見てくださいね！

じゃん、けん、ぽん！　グー　フハハハハ

ゲホゲホ。

第28話（前書き）

始まりの部分がすこし、変ですがお気になさらず…

第28話

場所は変わってテロ組織の作戦本部：

「織斑一夏撃墜！、どうなさいますか？」シエンの部下の一人がそう尋ねる。

「じゃあ、無人機を出発させろ。」

「了解、無人機発進！」

すると、ガレージが開き無人機が3機飛び立つ。

その頃、ラウラとジェノスが通信していた。

『ん？…わかった。ラウラ、今そっちに向かって無人機が出発した。気を付けてね、ちゃんと逃げるんだよ。もし危なかったら呼ぶんだよ、お兄ちゃんって。』

ジェノスがシスコンを発動させる。

「わかってる、お兄ちゃん。そろそろ、切る。」

『何時でも、呼んでよ。お兄ちゃん心配だから。』

「はいはい。」そして、ラウラは通信を切る。

「（織斑一夏が撃墜か…奴には、VTシステムの借りがあるな、お兄ちゃんからもらった

治療用ナノマシンをやるう。これでチャラになるか？）」

ラウラは、一夏に治療用ナノマシンをひそかに打ち込んだ。

IS学園の作戦本部…

そこでは、レーダーにテロ組織の無人機が写っていた。

「？な！これは！？」山田先生がそれに気付き驚きの声を上げる。

「どうした？山田先生。」千冬さんが聞く。

「れ、レーダーにIS反応が3つ…これは、学園のISではないです！

しかも、こっちに向かっています。」

山田先生は、青ざめた顔で言う。

「なんだと！？（くそ、こんなときに敵襲だと！）」

千冬さんの額には、冷や汗が流れる。

「（専用機持ちの女子は、今一夏の撃墜で落ち込んでいる、ラウラ

はそこまでもないが

あいつは今、あやしい。シアンに3機相手させるのは…くっしかたない)シアン!」

千冬さんは、シアンのISにプライベートチャンネルを入れる。

「何ですか?」シアンはすぐに答える。

『今、この旅館に敵ISが3機迫ってきている。すまないが撃退してくれないか?』

「……一人ですか?」不安なのか、シアンは聞き直す。

『…不安なら、教師部隊から二人つけるが?』

千冬さんは、限界の譲歩をする。しかし、

「いえ、居ないならいいんです。エネルギーウィングに付いてこれるとは思えませんから…」

シアンは、邪魔だから付けるなという意味の事を言う。

『!それもそうだな…ここから、5キロ先の地点が防衛ラインだ。最悪2キロまでなら下げてもいい。しっかり頼むぞ。』

「了解!」

そう答えると、通信を切る。

そして、すぐに外へ出てリベリオンを展開、敵ISの方へ飛んで行った。

シアンが敵ISを倒しに行った時、箒は一夏の部屋の中で自分の事を責めていた。

「（私のせいで、一夏が…くそ、力を手にしたら使い方間違える…私は変わらないのか…）」

そんな事を考えていると、鈴がやってきて箒を諭し、彼女たちは、福音にリベンジマッチを挑みに行った。

宿から15キロ地点で…

シアンは、エネルギーウイングを展開せず、通常の状態で飛んでいた。

「（そろそろか…）」そう考えていると、超高感度ハイパーセンサーが敵IS3機をとらえた。

「見えた！」そして、シアンはエネルギーウイングとグングニルを展開し、1機に狙いを定めて

突撃する。ヒュン、ドガンハイパーセンサーでもとらえられないくらいのスピードで

突撃された敵ISは、一瞬で御陀仏になった。

「おいおい、半端ない威力だな…」使った本人も驚いているようだ。

テロ組織の作戦本部でも驚きの声が上がっていた。

「な！？無人機の反応が一つ消滅し、これは…藍川シアンのIS反応です！」

シエンの部下の一人が驚愕しながらも報告する。

「ほう、シアンが出てきたか。」だが、シエンは余裕だ。

「（シアンが来るなら、もっと良い物を送ればよかったかな？）」

場所は、戻って15キロ地点…

「（おかしいな、味方が突然やられたというのに、一切動揺がない…それほど、鍛えられた人間なのか？いや、だとしても動揺がないのはおかしい、まさか…無人機か…）だとしたら、絶対防御はいらないな…」

そして、シアンは絶対防御の発動を妨げるジャマーを発する機械を使い、絶対防御をなくす。

「（自分にも効果があるのが欠点だよな…）」そう、この機械にはそういう欠点が存在する。

半径1キロ以内のISに働きかけることが出来るが、敵味方関係なしに効果が表れるのだ。

「負ける気がしないからな！」

そして、シアンは、グングニルをしまい。

『断罪者の怒り（ジャッジメント・イスプジオン）』（断罪者の強化版：具体的には、弾の装填数と

弾速の向上）を呼び出し、全弾フルオートで打ち出す。

ズガガガン全12発の弾丸が耐久力の高そうな、いかつい無人機を挟む。

ジジジ、ドガン無人機が爆発する。

ここまでの時間約5分：驚異的な速さで2機の無人機を倒す。

そのことに両作戦本部は驚く。

テロ組織の方は、

「な！？防御型の無人機まで一瞬で…なんて攻撃力だ！！？」

自慢の無人機がやられて焦りの色がまじまじと見える。

「いいさ、どうせそんなに強い物ではない。」シエンは何時でも余裕だ。

「しかし、あれは我らの最高無人機。」

「所詮は、無人機。有人機には勝てないさ…（まあ、シアンが強いのもあるけど…）」

学園の方は、

「あ、藍川君すごいですね。もう2機倒しちゃいました…」

山田先生は、すこし安堵する。

「ああ、（さすがは、シアンだな。あの機体を乗りこなしている。）

」

と両陣営では、まったく違う驚きがあった。

再び15キロ地点。

「さて、お前が最後だ！」

そして、グングニルを呼び出し、投げつける。

しかし、スマートな形で機動型だと思われる機体は簡単に避ける。

「甘い！」グングニルの後ろのブースターが起動し追尾するがそれ
も避けられる。

「！？今の読んだのか？」シアンは、避けられるとは思って居なかつたので驚く。

「だけど！」帰ってきたグングニルを仕舞い。サーマルガン…アイ
ザイアン・ボーン・ガン・デュエ

（最大入力できるジュール熱が上がっているため、前の時より威力
が2倍近く上がっている）

を呼び出し、ジュール熱を最大で入力し、撃つ。

バーン、馬鹿げた威力の弾丸がスマートなタイプの無人機に向かつ

て行く。

しかし、無人機は持っていたビームガンで威力を緩和し、シールドも使いかなりダメージを抑えていた。

さらに、そこからビームガンをシアンに向けて連射する。

「っ！」シアンは、飛び回り回避する。

「（まずい…そろそろ15分経つ…エネルギーが…）」
そこをつきそうなエネルギーを気にしながら避け続ける。

「（こうなったら、最高の突破力で…）」

シアンは、どんどん濃くなる弾幕を突破するために、グングニルを呼び出し、エネルギーウイングのリミッターを解除

そして、最後のエネルギーを全部使い最初と同じ、突撃を仕掛ける。

無人機は、ビームの収束率を最大に上げ迎え撃つ。

シアンのグングニルとビームが激突する。

「うおおおおお！！！」

グサッ

シアンは、ビームを破り無人機の腹を突き刺した。

ドガ　ン

無人機は、盛大に爆発した。

「ふう、終わったか…なかなか強かったな…」

そして、シアンはISが完全にエネルギー切れを起こす前に作戦本部に帰った。

「ただいま、帰りました。」

「よくやった！で、早速で悪いのだが…あいつらが命令を無視して福音を倒しに行ったのだ、悪いが、加勢してきてくれないか？」

「いいですよ。（福音は、一応一夏の仇だし…）」

「では、頼む。（これで、なんとかかなりそうだな…それにしても、あの敵ISはこの組織だ？）」

その後、補給が済んだシアンは福音のもとへ飛んで行った。途中で「福音ーどこだー」と情けないことこの上ない一夏を見つけたので、

一緒に飛んで行った。

第28話（後書き）

今回は、シエンの設定

藍川シエン

身長…175センチぐらい

体重…67キロくらい

容姿…上の上、イメージは、デユラララの岸谷新羅

生い立ち…シアンとは10年くらい早く生まれている。

性格…冷静沈着でつかみどころがない

こんな感じで…

次は、明日です。

駄文ですが、これからよろしく願いします

第29話（前書き）

今回は、地雷が設置されおります。

お気を付け下さい。

第29話

二人が、福音の居る所に着くと

箒が一人で福音の相手をしていたが、銀の鐘シルバーベルの直撃を受けてしまっているところだった。

ドガン、箒は、そのまま飛ばされてどこかの岩場に激突してしまう。

それを遠くから見ていた一夏とシアンは、

「箒イ！」一夏が助けに行きたそうにする。

「…行きたいなら行け。」シアンが、送り出す。

「え！でも福音が…」

「俺が引きつけとくから…早く行け、そしてさっさと帰ってこい。」
シアンが、鬱陶しそうに言う。

「わかった。行ってくる。」

そして、一夏は箒の方へ向かう。

「（行っただか…）じゃあ、福音君。暫く相手をさせてもらっよう！」
シアンは、グングニルで相手を始める。

箒が飛ばされた、岩場…

「（…命令無視までして来たのに…倒せなかった…会いたい…一夏に会いたい、会いたい）」

「…箒」箒が一夏に会いたいと願っていると、一夏のやさしい声がある。

「…一夏？」

「ああ、大丈夫か？こんな時になんだけど、誕生日おめでとう。いつもの髪型のほうが似合ってるぞ」
そして、一夏は白いリボンを渡す。

「…え？（覚えていてくれたのか…？）」

「今日は、7月7日。箒の誕生日だろ。」一夏は、ニツと笑顔を作る。

「ああ、そ、そのありがとう。」恥ずかしそうに言う。

「おう、じゃあシアンが一人で戦ってるから…行ってくる。」
そう言つと、一夏は福音の居る地点へ戻って行く。

「（戦いたい、私も一夏と一緒に戦いたい…）」箒がそう思っていると、

紅椿が黄金に煌めきだす、

「！？これは…」すると、SEが回復する。

「エネルギーが回復！？…絢爛舞踏？これが、紅椿の唯一仕様の特殊才能！
オフアビリティ

でも、これで一夏達と一緒に戦える！！」

そして、箒も福音の居る地点に飛んでいく。

福音の居る地点では、

シアンが、グングニルとアンタレス・パウサ（アサルトライフル：アンタレスの強化版）

で福音を抑え、その隙に一夏の零落白夜や雪羅のクローモードで攻撃を繰り返していた。

「（やばい、エネルギーが！）」一夏のSEは残り10未満だ。しかし、そこに箒がやってきて白式のSEを絢爛舞踏で回復させる。

「な！？エネルギーが回復した？どうやって？」

「説明は後だ！さっさと倒すぞ！」

「お、おう！」

「おい、喋ってないで攻撃してくれよ！」
箒と一夏がしゃべっている間シアンは、一人で福音の相手をしていった。

「わかってるって！」

そして、一夏が回復したエネルギーで零落白夜を使う。
福音は、避けるがその先には箒が二刀を構えている。

「甘い！」

箒は、福音に斬りかかる。福音は、上昇し離脱しようとする。

だが、そこにはシアンがパイルバンカーを準備している。

「いらっしやーい！！」

ズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ズガン
六発の炸薬が福音に突き刺さる。

そして、重力に従って落下していく福音に

「一夏！駄目押しだ！行け！」

「おう！ウオオオオオオ！！！」そして、一夏は零落白夜で福音に
駄目押しする。

その勢いのまま、地面に叩きつける。

ギギギ、福音は最後の力を振り絞って一夏の首を絞めようとするが、
バタ、SEが0になり活動を停止する。

すると、上から箒とシアンが降りてくる。

「終わったな……」一夏がそう言うと、さらに上から、セシリア、鈴、
シャルロットにラウラも来る。

「や」と帰れる……

そして、皆で疲れた体に鞭を打ちながらISを強制解除された、福音のパイロットを連れて帰った。

帰ると、千冬さんの説教が待っていた。

「任務完了！と言いたところだが：お前らは、藍川以外重大な命令違反を起こした：

学園に帰ったら反省文と懲罰用の特別トレーニングが待っているからな……覚悟しておけよ！」

「お、織斑先生？そろそろ皆さんも疲れているとおもいますし……」

山田先生がそう言うと、千冬さんもそう思ったのか、説教をやめる。

「……まあ、よく全員無事に帰ってきたな。その、ごくろうだった。」と若干照れながら言う千冬さんは、シアンにとって、とても、ものすごく刺激的でシアンの理性はギリギリだった。

その日の夜、

一夏は、ラヴァーズに追いかけている時、

シアンと千冬さんは、海風の心地よい夜の砂浜に居た。

「夜風が、きもちいいな…」

それで？大事な話とはなんだ？シアン？」

千冬さんがそう聞くと、シアンは頬をほんのり紅潮させて言う。

「俺は…藍川シアンは、織斑千冬、あなたが好きです！」
t o b e c o n t i n u e d

第29話（後書き）

いや、ホントにごめんなさい。

作者には、うまく書けませんでした。

今回から、次回予告します。あと次回からサブタイトルを付けます。

次回予告…

ようやく自分の気持ちを吐露したシアン。

果たして、千冬さんの答えは如何に？

そして学園は、夏休みに突入！

まずは、デュノアに殴り込み！？

シアンの人生で一番濃い夏休みが今、始まる。

次回、反逆の名を冠するIS第30話〜回答〜

第30話〜回答〜（前書き）

今回からサブタイがつきます。

第30話〜回答〜

千冬だ！今回は、私視点で進めていくようだ。

「俺は…藍川シアンは、織斑千冬、あなたが好きです！」

……………は？

しあんがわたしのことが好き？スキ？好き？like？いや、love？

「はあああああ！！！！……」

シアンが、あの鈍感で天然で鈍感のあのシアンが…？

「…そんなにビックリすること？」涙目のシアン

「うっ！そういうわけでは…」

そんな目で見ないでくれ…………

「千冬さんは、俺の事…嫌い？」シアンは、目の縁に涙をためながら聞く。

「うう、そんな事ない！私もシアンが大好きだ！！……………／／／」
い、言ってしまったー！！

すると、シアンの顔がパーと晴れ、涙を流す。

「よかつたゝ嫌いだつたらどうしようと思って、ずっとこわかったんだ。でも、はやく言いたくて……」

そんなに……よし！

そして、千冬さんはシアンの唇に自分の唇を重ねる。

時間にしたら4、5秒なのだが、二人にしたら永遠に感じた。

その後、二人は手を繋いでいっしょに部屋に帰った。

帰ると、一夏はすごくやつれていた。

千冬さん視点終わり。

次の日、学園に帰る日帰りのバスの出発前。

シアンは一夏が、ラヴァーズの制裁を受けているのを横目で見ながら、チラッと外を見る

すると千冬さんとラヴァーズの怒りの原因である金髪の女性がしゃべっていた。

「私は、許さない。強制的な第2形態^{セカンド・シフト}をさせて、あの子から翼を奪った犯人を！」

そう言うと、金髪の女性は去っていく。

「許さない…か…」千冬さんは、そうつぶやくとバスに戻ってくる。

「（ここからだ、よく聞こえなかったな…まあ、いいや。）」

そして、バスはIS学園に向かって走って行った。

道中、一夏はずっと居心地悪そうにしていた。

その日は、学園に着くと昼寝したらいつの間にか朝だった、シアンでした。

それから2週間後…

今日は、終業式の日で皆浮かれ気分だった。

相変わらず無駄に長い学園長のありがたーい？お話をi p d t o u c hで音楽を聞ききながら

無視し、終業式が終わる。

最後に教室へ戻り、担任から話を聞いて終わり。

「夏休みだからと言って、非行に走ったりはするなよ。では、これでわたしからの話は終わる。」

千冬さんは、適当に話を切り上げる。

「『『『『はい！』『』『』『』』クラス全員がキリツと返事をする。これが、山田先生だとはぐいと間延びした返事になるのだから不思議だ。」

そして、最後に千冬さんから夏休み宣言がなされ、夏休みに突入する。

クラスが騒いでいる間、シアンは冴えない顔をしていた。

「（やべえ、3日後フランスなのに…飛行機手配してない…まずい…）」

いろいろありすぎてすっかり忘れていたのだ。

「（どうするかな…！そうだ。千冬さんに頼めば何とかなるんじゃない？）」

そんな事を考えていると一夏が湧いてきた。

「どうしたんだ？シアン、まるで3日後フランスなのに飛行機取り忘れてたみたいな顔して…」

「……！（こいつ、読心術使えたのか！？）」

「……………え？もしかして…凶星？」

「そんな訳ないだろ？ちゃんととってあるって。」もちろん嘘だ。

「そうか、ならよかった。」

「おう、じゃあちよつと用事あるからじゃな。」
そう言って、シアンは教室を去る。

「ああ、じゃあな。」

職員室…

千冬さんは、仕事をしていた。

「（むう…とてもめんどくさい…はやくシアンに会いたいな）」

そんな事を思いながら仕事していると、

「ち…織斑先生は居ますか？」と入口の方からシアンの声がする。

「（！シアンが来た！でも何故だ？）どうした？し…藍川。」

「あ、いた。ちょっと早急に相談したいことがあったので…」

「何だ？その相談とは？（そんなに急なのか？）」

するとシアンは、少し言いにくそうな顔をする。

「えっと…ここじゃ…ちょっと…」

「わかった。」

そして、二人は屋上へ向かった。

屋上…

「それで？相談とは何だ？」

「ああ、えっと3日後シャルロットの件でフランスに行くんですけど…」

飛行機取るの忘れちゃったんです…」

「……………それで、私に何とかしてほしいと…（まあ、シアンの頼みだし…いいがな）」

「やっぱり無理ですか？」少し残念そうにする。

「いや、そんなことはない。学園の力を使えば何とかなる。」

「ホントですか？よかった。じゃあフランス行きのチケット2枚お願いします。」

「ああ、わかった。では、私は仕事があるんでな。

（シアン分を補給したから…多少はやる気がでるな）」

そっいうと千冬さんは、屋上から出ていく。

「ありがとうございます。（よし、これで問題はクリアっ）」

そして、シアンも屋上から出ていく。

夜：1001号室

シアンが部屋に帰ると飛行機のチケットと共に書き置きが置いてあった。

「（…千冬さん帰ってたんだ。）」
そして、チケットと書き置きを見る。

「（えつとなに？今日は遅くなるから、さきに寝てる。チケットはここに。）」

読み終わると、シアンはペンを取り出し、なにかを書き始める。

「ありがとうございます。おやすみ。っとこれでよし！」
書き置きの裏に自分の書き置きを書いておいた。

「なんか、眠いしさつさと寝るか。」

そして、シアンはすぐに寝た。

AM2時ごろ、千冬さんが1001号室に帰ると

シアンは寝ていた。しかも、暑かったのか少し胸が肌蹴ている。

「！（まずい、私の理性が…）」
千冬さんの理性は大分不味い状況だ。

そして、よく見ると若干汗ばんでいる。しかも顔をほんのり紅潮さ

せている、

それは、いわゆる情事のあとの様で千冬さんの理性は遙か彼方へ

「……………（もう、襲っていいよな？）」

千冬さんは吹っ切れた。その手を肌蹴ている胸のところに掛ける
すると、千冬さんの携帯が鳴る。

「チツなんだ、こんな時に！」

そして、電話に出る。

山田先生からで、仕事でわからないところがあったそうだ。

電話が終わると、再びシアンを見るが…

「…………興が削がれた。また今度だな…」

そう言って、千冬さんも寝た。

第30話〜回答〜（後書き）

今回は、作者が途中から何書きたいのか忘れてしまったので
ひどい文章ですね。

次回予告：

フランスに着いた、シアン、一夏、シャルロット
そこで、待っていたのは…

次回、反逆の名を冠するIS第31話〜邂逅〜

アンケート（前書き）

アンケートにご協力ください。

アンケート

今日、私にじファンのいろいろな機能を調べておりましたら
アクセス解析というものを見つけました。

そしたら、なんとPVが10万を超えているではないですか！
3万くらいなのかな？と思っていたので！かなりビックリしまいい
た。

他の作者様も10万記念等やっておられるので自分もやってみよう
と思います。

そこです。

なんのお話が良いんですかね？下のどれかをお願いします。

1、シアンと千冬さんのデート話

2、シアンの過去話

3、反逆の名を冠するISのバッドエンド

4、そんな物いらね、さっさと本編書け！

5、こんな話はどうでしょう？

のどれかをお願いします。

5の場合は、ある程度のストーリーをお願いします。
実は、作者は5番が一番うれしい。

それでは、アンケートにご協力ください。

ちなみに、誰もお答え下さらない場合がありますので
その場合は、4番になります。

アンケート（後書き）

ほんとによろしく願いします。

期限は、3日後です。

どうでもいいですけど

作者は、年内にこの小説を完結させるつもりです！

第31話 邂逅（前書き）

あー今回は、すごい駄文です。

第31話　邂逅

それから3日間で、シアンは宿題をクラスの金の亡者を2万で獲得し終わらせたので

最早、シアンは夏休みをすべて遊びに費やす事ができるという素晴らしい事を実現したのだ。

宿題を終わらせて、フランスに向かった。

何十時間と飛行機に乗り、ようやくフランスに着いた。

「や、やっと着いた！」飛行機に慣れていない一夏は、結構グロッキーだ。

「久しぶりだな」シャルロットは、楽しそうだ。

「デュノアにコンタクトを取ったのは明日だから、今日は観光しよう！」

シアンは、そういうところから大量のパンフレットを取り出す。

「おお、いいね！」一夏は、その提案に乗る。

「でも、フランスなら僕が居るから、そのパンフレットって要らないね。」

ハハハ、と皆で笑う。

すると、突然後ろから話しかけられる。

「やあ、シアン。久しぶりだね。」その人物は、なんとシアンの兄でテロ組織の親玉、藍川シエンだった。

「「!!!!」」

「????」

シアンと事情を知っている一夏は、行方不明だったシエンを見て驚くが

突然声をかけてきた、変な人と言う印象しかないシャルロットは怪訝そうにしている。

「?どうしたんだ?そんなに固まって。」

シエンは、気付いていないようだ。

「いや、どうしたじゃないだろ。どこ行ってたんだよ兄貴」

シアンは、少し呆れながら聞く。

「うゝん、今は秘密だ。」そして、シャルロットの方を見る。

「(なるほど、デュノアの娘の解放に来ていたのか…

焦ったよ、いきなりシアンが現れるから…)デュノア社に行くのかな?」

シエンは、推測を立てる。

「そうだよ、で?兄貴はなんでフランスに?」

シアンは、核心のところを聞く。

「それも、秘密だ。そのうち分かるだろうし…(フランスは、家の大きな拠点の一つだからな…)」

「……そうか、わかった。まあ、たまに家に帰ってるみたいだし……いいけどね。」

（何、隠してるんだ？）「」

話が終わるとシエンは、去っていった。

「（兄貴…変わったな…両親が殺されてからだよな…変わったの）」
シアンは、何やら難しい顔をしていた。

それから、フランス観光をしたがシアンは上の空だった。

次の日、デュノア社にて…

門の所に来ると、金髪の女性が来たどうやら出迎えの者のようだ。

「ようこそ、デュノアへ。私は、社長秘書のカロル＝ボージェです。
藍川シアン様と織斑一夏様ですね？社長がお待ちです。こちらへどうぞ。」

そういうと、部屋の方角に行く。

「「はい。」」シアンと一夏は、それついて行く。

しかし、シャルロットは付いていかない。

それに気付いた、カロルさんが呼ぶ。

「シャルロットさんも来てください。」

「は、はい…」

少し、嫌そうな顔をしながら着いていく。

エレベーターを上り20階あたりで降りる。

そして、特別応接室と書かれた部屋に通される。

「どうぞ。」カロールさんは、扉をあける。

「……失礼します。」

そう言っで、3人が部屋に入ると何かが飛んできた。

「社長、なにになさってるんですか？」

カロールさんは、飛んできたものを社長を呼んだ。

「……え？」

シャルロットすら驚く始末。

「いや〜ごめんごめん。我が娘が帰ってきてくれてうれしくてうれしくて……」

「……」

3人は、絶句する。

それもそのはず、シャルロットを道具として使った男が……今、目の前でバカみたいな事をしているのだから。

その後、話を聞くとどうやら、社長でシャルロットの父である、クレール・デュノアは

今までの、犯罪行為やシャルロットをIS学園に送る気などなかつ

たそうだ。

「では、貴方は僕の事をIS学園に送る気はなかったと…?」
シャルロットは、若干怒気のこもった声で言う。

「そうだ、少なくとも私は反対だった…」
クレールは、申し訳なさそうに語る。

「じゃあ、なんで僕は…私は、IS学園に…いや、そんなことはない！」

私に男子の様に強制させて、その上二人の機体データと生体データを取ってこいと命令させたんだ!？」

シャルロットは、我慢の限界と言わんばかりに怒鳴る。

「…言ってなかったね…シャルロット、君は家の会社のシステムを知っているかい？」

「…システム…?」

「知らないか…当然だ。このことは、家でも一部しか知らないことだから…」

デュノア社は、先代からこのシステムを採用している。」

クレールは、すまなさそうに言う。

「すこし、昔の話をしよう。デュノア社がまだ、戦闘機の開発会社だったころだ…」

その頃の社長…つまり、先々代はあまりにもひどい経営でね、今よりひどい状況だったんだ。

ついに、その状況に耐えられなくなった先々代は先代に丸投げした。

そこで、状況の打破のために先代は、システムを立ち上げた。

社長をトップとして、7人の代表者で方針を決めるんだ。

代表者は、一人一票、社長は、一人で六票持つ…こうすることで、社長だけで決めることは

事実上不可能になった。最悪、一人の賛成者が必要という訳だ。

だが、裏を返せば一人の賛成者の居ないと社長の案件は、通らないという事だ。」

クレールは、長々とすまなかったという。

「じゃ、じゃあ私がスパイをすることを最後まで、反対していて…？」

シャルロットの声は、震えている。

「そうだ、だが許してもらおうとは思わない…私がきっちりそのシステムをなくしていれば

こんな事には、ならなかった。すまなかった。ここから、出て言ってもらっても構わない。」

クレールは、頭を下げる。

「頭を上げてください。本当にあなたは、最後まで反対していんですか？」

シャルロットは、やさしい声で質問する。

「ああ、本当だ。」

「よかった。じゃあ、私はここを出ていくことはしません。」

「でも、…」クレールは、何か後ろめたそうにしていた。

「じゃあ、条件に私をこのまま、IS学園に通わせて下さい。それでいいです。」

「…わかった。何とかしよう。」

そして、その後少しだけ話した後時間になり、デュノア社を後にした。

その時のシャルロットの顔は、とても晴れやかだった。

シアンたちが、デュノア社を去った後
会社のある一室

社長秘書のカロル＝ボージェは、ある人物と話していた。

『やあ、カロル。デュノアはどうか？』

「問題ありません。我々の傀儡になりつつあります。」

『ほう、わかった。そこは、計画の重要なファクターなんだ。頑張ってくれ。』

「了解しております。シエン様。」

『ああ、では頼む。』

そして、通信が切れる。

「（ハア、これでデュノアは問題ないレベルだな…）」

その日の夜の便で三人は、日本へ帰った。

第31話へ邂逅へ（後書き）

デュノア社、傀儡化。

すいません…今回、書くのめっちゃ時間かかってしまって…

とりあえず

次回予告…

フランスから帰ってくる。

すると、そこで待っていたのは…？

次回、反逆の名を冠するIS、第32話へ宿題へ

アンケート待っています。

第32話 宿題 (前書き)

なんか、すいません。

第32話 宿題

夏休みの序盤、ほとんどの学生が宿題などやらずに、クーラーの利いた部屋で

寝ているだろう、まあ、夏のクソ暑いなか外出する元気な人もいるかもしれないが

藍川シアン…彼は、前者の人間だった。だが、今は…

「行くぞ！シアン！！」ISを纏った、一夏が雪片を片手にシアンに向かって飛んでいく。

「…（あ、暑い…なんであいつ元気なんだよ…）」シアンは、だるそうに断罪者の怒り（ジャッジメント・イスプジオン）を呼び出し、8発撃つ、

ズガガガガ、

「来ると思ったぜ！」一夏は、ニヤツと口元を上げ零落白夜を発動させジャッジメントに斬りかかるが

「？お前バカか？ジャッジメントって自由に動くんだぞ。」

そういうと、シアンはジャッジメントの軌道を変え、零落白夜を避け一夏にぶつける。

「グアアッ」そして、白式のエネルギーは0になる。

「くそ、また負けた…」一夏は、かなり悔しそうにする。

「やっと、ペナルティ（・・・）終わった」

そう、これはペナルティなのだ。

あれは、フランスから帰って来た時の事…

空港から、バスとモノレールを使って帰ってきた、シアン達。

空腹だったので、食堂へ向かっていたら千冬さんにあった。

「こんにちは、千冬さん。」シアンは、あいさつする。

「ああ、シアン、後で職員室に来てくれ。」

そう言いつと、職員室に帰って行く。

「はい。…じゃあ、行くか。」

「お、おう…（何か、シアンと千冬姉の距離が縮まった様な…？）」

そして、人の少なくなった食堂で昼を取り、シアンは職員室へ向かう。

職員室の前に来るとノックして、失礼しますと言つと入れという声が聞こえて来たので中に入る。

「よし、逃げずに来たな…移動するぞ。」

何やら、剣呑な雰囲気醸し出しながら千冬さんは、シアンを連れていく。

「え？あれ？ちよつ！？」

不満を言えないまま、連れてこられたのは取調室と書かれた部屋だった。

「では、取り調べを行おう。シアン、お前は夏休みの課題をクラスの金の亡者に2万で押し付けた容疑が掛かっている…
弁解することはあるか？」

千冬さんにばれていた。つまり、それはペナルティが着くと言っ事…

「…ありません。確かに私は、金の亡者に押し付けました…2万で…」
シアンは、罪？を認める。

「何をやっているんだ！！何故だ？私に頼めばタダで免除してやる物を…」

千冬さんは、若干間違った方向に行く。

「え！？そつち？」

当然シアンは、驚く。

「…まあ、過ぎてしまった事だ…これから気を着けるとして
ペナルティとして…一夏と模擬戦50連戦だ！この旨は一夏にすでに伝えている

あいつは、やる気だったから問題ないだろう…
では、第3アリーナへ行け！」

「イ、イエス・ユア・マジエスティ！！！」

と、長々と説明をしたがこういつ訳である。

「まあ、こんな訳だ！」

「？誰と喋ってるんだ？シアン。」

「いや、何か電波を受信して…」

そういうと、一夏は怪訝そうな顔をしていたが、気にしない。

「じゃあ、俺は千冬さんに報告しないといけないから…また、明日。」

シアンは、もう一度職員室へ向かう。

職員室…

その前には、シアンが居た。

「（うう…だる…）失礼します。」

ノックすると、返事も聞かずに入る。すると、そこでは…

「え？シアン！？」

「うあああ！！千冬さん？」

千冬さんが着替えをしていることだった。
シアンは、しっかりその大きな胸を見ていた。

「し、し、シアン!？」

「え、あ、あの、すみません!！」
そういうと、シアンは職員室を出て行こうとする。

「いや、いい。そ、それより……」
千冬さんは、シアンの袖をつかむ。その動作が妙にかわいらしかった。

「(?!? な、なんだ? この可愛い生き物は……!) は、はい？」
シアンは、声が裏返ってしまう。

「そ、その……みたのか？」

「……え……はい。／／／」シアンは、顔を真っ赤にしている。

「そ、そうか……／／／」同じく顔を真っ赤にして千冬さんが言う。

「せ、責任取ってくれるのか……？」

と若干暴走気味の千冬さんをなだめるのに時間の掛かったシアンだった。

第32話 宿題 (後書き)

あの先は、読者様のご想像にお任せします。

アンケート、明日までです。よろしくお願い致します。

次回予告：

8月上旬、真夏の頃

千冬とシアンは、イタリアへ向かう。

そこで、起こる悲劇のことは知らずに…

次回、反逆の名を冠するIS 第33話 黎明

アンケート結果（前書き）

結果です。

PVアクセス10万突破記念企画！第1弾！ねずみの王国（前書き）

ごうってしまった、すいません。

どうでもいいですけど、はがなの夜空って千冬さんと似てませんか？

PVアクセス10万突破記念企画〜第1弾〜ねずみの王国

7月30日…この日は、実はシアンの誕生日である。

この日、千冬さんとシアンはデートとして、某ねずみの王国に行く予定だ。

IS学園は、あらゆるテーマパークへのアクセスがしやすい所であり、

ねずみの王国も例外ではなく、すでに多く生徒たちが向かったので最近では、IS学園の生徒はほとんどいない様だ。

なので二人が付き合っていたとばれる心配もない。

つまり、二人は穴場を狙ったわけだ。

30分かけてモノレールに乗り、ねずみの王国に着いた。

一応変装している二人だが、それでもオーラの物は隠せずに周りからは結構注目されていた。

すでに開園時間は過ぎているが、まだそれなりにゲートは込んでいる。

「結構込んでますね。」

シアンは、いつもの口調でしゃべる。

すると、千冬さんはすこし嫌そうな顔をする。

「シアン、学園の外の時くらい敬語でなくてもいいぞ。」

「ああ、そうだった、ごめん。千冬」

シアンがあやまると千冬さんは、うなずく。

「まあいい…（急に呼び捨てで呼ばれるとドキッとするな…／＼）」
すると、チケットブースに着きチケットを買いゲートを潜った。

「やっと、入れたな。何乗る？」
シアンが聞くと、千冬さんはパンフを見る。

「（むう、最初は軽めなので…お？このスプラッシュなんだらいいのではないか？いや、ここは…）」

いろいろ考えた結果、選んだのはスプラッシュマ ンテンだった。

「（いきなり、これ？）」

シアンは、疑問に思うしかなかった。

シアン達の番になり、安全バーを下ろす。
回ってくるのが早いなどのつつこみはうけつけておりません。

「（おお、この緊張感だよ…！）千冬、大丈夫？」
よく見ると、小刻みに震えている千冬が居た。

「…だ、大丈夫だ！（スプラッシュなんたらとは、ジェットコースターだったのか
写真を見間違えていた！この手の物は苦手なのだ…）」

「そ、そうか。（全く大丈夫そうじゃないけどな…）」

そして、無情にもジェットコースターは、進みだす。

ガタンガタンガタン

コースターは、どんどん上に登って行く。

「（ああ、もうすぐ…）」シアンは、楽しそうな顔をする。

「……………（……………）やばい……………」千冬は、顔面蒼白だ。

しかし、そんな千冬はお構いなしに急転直下。

「……………きゃあああ……！！……………」

乗客のほとんどが悲鳴を上げる中、シアンはたるそうな顔をしていて、千冬さんは、絶望に満ちた顔をしていた。

ヒューン

その後も、回転したりしており場に到着。

楽しかったや怖かったなどの感想を述べながら降りていく客たち

シアンは、微妙という感想

千冬は、一生のらないそうだ。

だが、シアンが一生のらないと言ってガクブルなっている

千冬をみて、かわいいな…何か追い打ち掛けたくなるな…

とSに目覚め、次はスペースマ…ンテンに乗らせようとする。

さすがの千冬もシアンの意図に気付き、拒否する。

「いや、ちょっと待て、あれは絶叫系ではないのか？」

「（気付かれたか…）え？違うと思うけど。ほら、降りてきた人たち皆怖かったなんて言っていないし…」

そう言って、降りてきた客の方を指さす。

「（む！そう言われれば…）じゃあ、乗る。」

すると、一瞬シアンの顔がニヤリとなる。

「うん、乗ろう。（また、かわいい千冬が見れるな…）」

そして、彼らの番が回ってくる。

安全バーが下げられた時に千冬がシアンに言う。

「…シアン？なんだ？この乗り物？だましたのか？」

「違う違う、これに乗って景色を見るだけだって…高速でシアンが言い切ると同時に出発する。」

「やっぱりかあああ！！」

暗闇の中を急に曲がったり、停止して一気に進んだりしてゴールに着いた。

降りると千冬は、すぐに出ていくとても不機嫌だった。

「（シアンめ…私をだましてそんなに楽しいのか…）」
千冬は、涙目だ。

「（あちゃ？やりすぎた？）」「シアンは、少し反省する。
そして、どんどん離れていく千冬を追いかける。」

追いつくと肩をつかみ留める。

「ちょっと待った。」

「…なんだ！」立ち止り涙目でシアンをにらむ。すると、周りの人が騒ぎ出したので人目がない場所を変える。

「（…そんなに嫌だったのか…誤っておくか）ごめん。」

「…いやだ。（しばらく、反省してもらわないとな…）」

「ごめん、あの怖がる千冬がかわいくてつい…」シアンは、ホントに謝る。

「な！？か、かわいい？で、でも駄目だ。だましたのは、許せん！（かわいい…／＼）」

「…（じゃあ、仕方ない…）」

シアンは、千冬の顔を自分の方へ向けるとキスをする。

「ん！？ …！！！」

そして、離す。

「ごめん。ホントにすまないと思ってるんだ。」シアンは、真剣な顔で言う。

「…はあ、もういい。私もムキになりすぎた。」千冬は、諦めた表情。

「よかった、じゃあ、そろそろ行くつか？」そういつとシアンは、立ちあがり、手を差し出す。

「ああ！」千冬は手を取る。

その後もねずみの国で遊び、夜になった。

「そろそろ、帰る？」

シアンがそう聞くと、千冬は帰ると答える。
結構疲れている二人。

そして、二人はモノレールに乗って帰った。

部屋に着くと、二人は昼間の続きをした。部屋の前を通った人の話だと

たまに、変な声が聞こえてきたそうだ。

PVアクセス10万突破記念企画〜第1弾〜ねずみの王国（後書き）

すいませんでした。

次は、第2弾〜ラウラとジェノス〜です。

PVアクセス10万突破記念企画〜第2弾〜ラウラとジェノス（前書き）

最後、微妙な締め方で申し訳ありません。

PVアクセス10万突破記念企画〈第2弾〉ラウラとジェノス

夏休みになり、ラウラは基本的にアジトで暮らしていた。

加入してから間もないが能力的な部分と名声的部分から、なかなかの地位に着いていた。

そして、この日はラウラの兄であるジェノスからたまには、どっか行こうと言われたので

別段気にすることなくOKを出し、今は部屋で待てと言われたので待っている状況だ。

「（お兄ちゃん、おそいな…全く何をしているんだ…）」

そして、電話しようとしたらコンコンとドアがノックされる。

「（やっと、来たか）」

ガチャ、ドアを開けるとジェノスが居た。

「遅かったな、お兄ちゃん。」

「ごめんよ、ラウラ。お詫びになんでも（性的な事も）してあげるから。」

ジェノスは、そう言うのにやにやする。かなり、気持ちが悪い。おまけに何故か、鼻息も荒い。

「…お兄ちゃん、今日はどこに行くのだ？」

ラウラは、究極に冷めた目でジェノスを見る。

「（スルー！？そして、その冷えた目！そこに痺れる、憧れ…る…？）

インでも行こうかな、って思ってたけど…あそこなら、いろいろあるし…」

ジェノスは、変態化してしまった。

「具体的には何があるんだ？」そう言ったところにほとんど行った事がないラウラは、興味深そうに目をキラキラさせて聞く。

「（食いついたな、予想通りだ。）まあ、服見たり、映画見たりかな？」

そうだ、評価が高い映画があるんだ。見に行こう！」

「映画か…（軍に居たから、映画館など行った事ないな…よし）いいぞ、行こう！」

「よし来た。じゃあ、すぐに行くか。」

「うん。」

そして、イタリアの車アルファ メオ m i t o に乗り込みインへ向かった。

インに着くと、ラウラは人の多さに驚きながらも楽しそうにしていた。

どんどん先に進んでいくラウラをジェノスは、後ろから見ていた。

「あんまり、先に行くなよ。」

「わかってる。」といいながらもやっぱり歩調は速い。

「（こういうと初めてなんだから、はしゃぐのも無理ないか…ま、このまま計画が予定通り進めばここにも来れなくなるしな、今の内にね…）」

そう考えているうちに立ち止っていたようで、ラウラに呼ばれる。

「お兄ちゃん、早く！」

「ああ、今行くて。（今は、この時を楽しもう。）」

場所は、変わってイン内のシネマ

チケットと映画の定番ポップコーンとジンジャエールを購入し、劇場に入る。

初めてくるラウラは、そわそわしている。

「（うああ、たくさん人が来たな…）そつえば、お兄ちゃん？」
ラウラは、今もなおそわそわしながら質問する。

「何？ラウラ。」

「今から何の映画を見るんだ？」今さらな質問をする、ラウラ。

「ラウラって、恋愛映画なんて見た事ないでしょ？」

「まあ、ミリタリーな物しか興味が無いしな…まさか、今から見るのか？」

「ピンゴー！」

「…まあ、いいか（たまには…な）」

そういったやり取りをしていると、映画が始まる。

ちなみに、そのタイトルは、『僕と妹のラブストーリー』というベタなタイトルだ。

まあ、タイトルから分かる通りシスコンとブラコンの物語だ。

2時間ほどすると、映画も終わり二人は劇場から出ていく

「……………」

二人は、無言のまま去っていく。

特にラウラの方は、頬が若干紅くなっている。

理由は、分かっていると思うが映画の内容にある。

その内容だが、恋人がこれ、18禁じゃね？っていう事していたらその恋人は、実は兄妹で、え！って感じになり別れる、しかしいろいろな

ことを経て二人は、見事に復縁。

しかし、曲がりなりにも二人は兄妹…

どこへ行ってもそれは、変わらない。

そんな二人の逃避行ラブストーリーだったのだ。

ラウラとジェノス、二人は兄妹なのでこの手の映画はちょっと精神衛生上よろしくない…なので二人は今無言なのだ。

そのまま、二人は無言のままアジトへ帰った。

ちなみに、二人が映画を見ている時

シアンと千冬さんも映画を見に来ていて、二人の見ていた映画は

友達の姉に好意を抱いた主人公と弟の友達つまり主人公に好意を抱いた姉の

物語で、こっちの二人も先の二人同様に無言のまま学園に帰った。

場所は変わって、ラウラ達のアジト…

インから帰ってきた二人は、そのまま無言で各部屋に帰った。

その夜、ジェノスが寝ているとラウラがジェノスのベットに入ってきて

それに気付いた、ジェノスは理性がかなり危なかったそうだ。

PVアクセス10万突破記念企画〜第2弾〜ラウラとジェノス（後書き）

昨日は、更新出来なくてすみません。

何分忙しかったものですから…

次は、おそらく明日です。

次回で企画は、最後になると思います。

それでは。

PVアクセス10万突破記念企画〜第3弾〜温かな目〜（前書き）

今回で企画は終了します。

ありがとうございました。

タイトルは、思いつかなかったもので…

PVアクセス10万突破記念企画〈第3弾〉温かな目〈

ある日、シアンと千冬がデートから帰ってくると
学園の温かい目が出迎えた。

廊下を通る、そのたびに向けられる目、目、目、目

「（？なんだ？この生温かい視線は？）」「」

結局、その日は何もなかった。

次の日、千冬さんが職員室に居ると山田先生が千冬さんにある物を見せる。それは、

IS学園では皆が知っている様な新聞である。

「！？なんだこれは？」

千冬さんは、その表紙を見て驚愕する。

理由は非常に簡単。

その一面は

なんと『織斑教諭と藍川シアン、教師と生徒の禁断の関係！？』
という疑惑だったからだ。

千冬さんは、さらにその記事を読み進める。

すると、情報のソートという所があったので読んでみると

ソートは、某O君と書いてあり、ご丁寧に一夏の目の部分が隠れた
写真まで

貼ってあった、まあこの学園に男子なんて二人しかいないうえ、O
君など

一人しかいないので、犯人は一夏となる。

そのころ、シアンも同じ記事を見ていた。

「……（ばれたのか…それにしても一夏は、どこで情報を仕入れたんだ？）」

そして、その時シアンと千冬さんの考えは見事に一致した。

「「とりあえず、一夏ボコス」」

それから、シアンと千冬さんが一夏を血眼になって探していた。

千冬さんは、自分の事を崇拜してくれている人たちをうまく使い、シアンは、代表候補生になってもらったたくさんの金を使い、
またもや金の亡者をたくさん餌付けし、
一夏を探させるとなんと、ほとんどの全校生徒が一夏を探す結果になった。

すると、ものの5、6分で一夏は見つかった。

場所は、変わって学園の特別処罰室。

ドガッ

「グア」一夏は、シアンに蹴り飛ばされる。

ドサ、床に倒れ込む一夏。両手が縛られている所からシアンが本気である事がわかる。

シアンは、一夏を椅子に座らせると椅子に仕掛けられた

電流発生装置からすこし電流を流す。

「つつ　「電流に顔を歪ませる一夏。」

「さて、話してもらおうか？何で、あんな記事が書かれているんだ？
答えないと、さっきの電流の倍流すぞ。」

シアンは、鬼畜な事を言う。

「…分かったよ、話す。…実は、こないだ千冬姉に用事があったんだ。

だから、部屋に行ったら…部屋から変な声が聞こえてきたんだよ。

【閲覧規制】や【閲覧規制】が…」

一夏は、若干顔を赤くしながら答える。

「…なるほどな…それが聞けただけで俺はいいや。」
そう言うと、シアンは一夏を椅子から解放する。

「え！？もういいのか？」一夏は、思ったより早く解放されたことに疑問を抱く。

「なんだ？もつと拷問されたいのか？」
シアンは、半分笑いながら言う。

「そ、そんな訳あるか！」

「ハハ、まあわかった。じゃあな。」

「全く…じゃあな。」

そして、特別処罰室を出ていく。

さらに10分後、今度は千冬さんに捕まってしまった一夏。事情を説明する。

「で？なんで、あんな事になっているんだ？」

千冬さんは、いきなり本題を聞く。

「…いや、それはですね…こないだ織斑先生に用事があつたんです。なので、部屋に行ったら…部屋から変な声が聞こえてきたので。

【閲覧規制】や【閲覧規制】が…」
とシアンに答えた事と同じ事を言う。

「な！？じゃあ、お前は見ていのか？部屋の中を？」

千冬さんは、一夏に更に疑問を投げかける。

「ええ、まあそうですね。…（ん？見ていた？いや、見てはないぞ？）あれ？」

面倒になった一夏は、適当に返事をする。その後で自分の失態に気付く。

「ああ！違うんです。」一夏は、慌てて訂正するがもう遅い。

「そうか…見ていたのか…そうか…」

千冬さんの後ろから、スンドが見える。

「…（俺、オワタわ）」

それから、一夏と千冬さんの命をかけた

戦いが始まった。一夏の明日はどっちだ！？

「という夢を見たんだけど……どう思う？千冬？」

「いや、現実味を帯び過ぎていて怖いぞ？」

PVアクセス10万突破記念企画〜第3弾〜温かな目〜（後書き）

という、何時ぞや見た事あるような終わりからで

この企画どうでしたか・・・？

次回からは、本編に入ります。

第33話 黎明 (前書き)

昨日は、更新できずにすみません。

あと、長くて8話程度

短くて5話くらいで完結できると思います。

第33話　黎明

8月上旬、そろそろ宿題やろうかな？と思ってくるころ、シアンと千冬さんは

イタリアに向かう飛行機の空港に来ていた。

『間もなく、イタリア便の離陸準備が終了します、搭乗される方はゲートまで来てください』

そんな感じのアナウンスが入る。

「ん？そろそろか。行こうか？」

シアンは、いつもと少し違う雰囲気と言う。

「ああ、（くそう、昨日は楽しみすぎて全く寝れなかった…）」
千冬さんは、目の下にクマを作っている。

そして、飛行機に乗って空の旅をする事数十時間、イタリアに到着する。

すると前にシアン一人で来た時同様、リムジンが迎えに来る。

キキイ、シアン達の目の前に止まると中に入る様に促す。

そして、車に乗り込むとイタリア首相の邸宅に向かう。

着くと無駄に長い廊下を進むと前に来た時と同じ扉をノックし開く。

そこには、首相が居た。

「やあ、久しぶりだね。シアン君。」

皆さん、お忘れだと思いが3話で一度だけ登場したキャラです。

「お久しぶりです。」

「4か月振りかな?」

「そんな物ですね。」

適当に挨拶を交わすと、首相は千冬さんの方を見て驚く。

「こちらの方は?...ってミス織斑!？」

「ええ、はじめまして。首相。」

「こちらこそ、シアン君との関係はあえて聞かない。
未永く、お幸せに。」

首相は、そういうとにやりとする。

「.....//」

二人は、顔を赤くする。

この反応がいけなかった。

首相は、この手の話が大好きなようでどんどん質問された。

シアンと千冬さんは、この首相を適当にあしらいながら思った。

「（女子高生か!このおっさんは!）」

その後も面会時間ぎりぎりまで質問攻めされ、二人はクタクタだった。

「おっと、そろそろ時間だね？もっと話したいが…仕方ないな、長々とすまなかつたね」

今日は、もうホテルに帰って休んでくれ。」

「はい…それでは、失礼します。」

そして、二人はまた長い廊下を歩きホテルに帰った。

シアン達がホテルに到着したころ…

イタリアの空港に、シエン、ジェノス、ラウラ、あとテロ組織の幹部が居た。

少し歩いたところで、ラウラが気付いた事を言う。

「なあ？お兄ちゃん？」

「ん？なに？ラウラ？」

「なんでイタリアに来たんだ？観光な訳じゃなさそうだし…」

「あーそれね…それは」

ジェノスが理由を述べようとするが、シエンによって遮られる。

「フフ、それはな。ここ、イタリアに私たちの本部があるからだよ。」

「

「……………」セリフを取られたジェノスは、すこしムツとする。

「あ！ああそうなんですか！」

ラウラは、取り繕う様に言う。

それからしばらくして、車に乗り20分ほどしたらアジトに着いた。その道中、一人も言葉を発しなかった。

しかし、シエンはなんだか楽しそうな顔をしていた。

アジトに着く、大きさはただのビルに見えるが実は、地下に大きなアジトが広がっていた。

そのアジトの地下2階フロア…

地下2階に着くと幹部全員は、息を呑んだ。

「…すごい…」ラウラは、目の前の状況を信じられないような顔をしている。

そこには、百機近くの無人機があった。

「この設計は私が直々に作ったんだ、臨海学校の時の機体よりかなり強くしてあるからね、まあ、組み立てをしたのは、デュノアだけ…」

シエンは、自慢気に言う。

「（なるほど、それでデュノアを欲していたのか…）」
ジェノスは、理解する。

シエンは、一通り幹部全員の驚いた顔を見たのちに言った。

「これを明日一日で総点検する。それが終わった後、即ち明後日

」

シエンはタメを作り、獰猛な笑みを浮かべた顔をする。

バーティ

「戦争の始まりだ！」

第33話 黎明 (後書き)

もうすぐで終わる…なんかさみしいです。

次回予告

シアンと千冬は、イタリア旅行を楽しむ…

次の日に起こる事は、知る由もない…

次回、反逆の名を冠するIS 第34話 寧颯

第34話 痺網 (前書き)

うゝむなんかさうしてしまいました。

第34話　　擲　　綱

イタリア旅行2日目、この日はシアンと千冬さんは
イタリアの観光をしに行っていた。

まずは、トレヴィの泉で後ろ向きにコイントスをした。

「てい！」

ピチャーン、シアンの投げたコインは水に入ってしまった。

「あちゃ……」

「ま、ただの呪いなんだ、気にすることはないだろう。」

千冬さんは、呪いに興味はないようだ。

「そうだねーじゃあ、次はサン・ピエトロ大聖堂に行こう。」

「ああ、行こう。観光名所だしな。」

スペイン階段近くのスパニーヤ駅から地下鉄A線に乗り込み、3番
目の駅、オッタヴィアーノ駅で下車。

そこから徒歩10分ほどでサン・ピエトロ広場に到着する。

「ここが、サン・ピエトロ広場か……」

千冬さんは、すごい人の数に驚く。

「まあ、入れるところは限られているんだけどね……」

サン・ピエトロ広場、 サン・ピエトロ大聖堂、 バチカン博物館

…これだけだな。

しかも、服装の規定がかなり厳しいし、今の服装だったら、大丈夫だけど。」

そんな彼らの恰好は、面倒だから割愛します。すいません。想像してください。いまじねーしょん

シアンは、息継ぎなしに説明する。

「そ、そうなのか？詳しいんだな。」

千冬さんは、若干引き気味だ。

「え、ああ、まあ調べましたから…（一回来てるし…）じゃあ、次はどこに行く？」

「そうだな、（そろそろ、昼時だしな…）少し早いが昼にしないか？」

「お！いいね、じゃあいいとこ知ってるんだ。」

シアンは、前来た時に知ったバールを思い出す。

「そうか、ではそこにしよう。」

そして、そのバールに移動する。

バールに着くと、店員にシアンがイタリア語でピザを注文する。

「えーと、マルゲリータを二つ下さい（イタリア語で喋っています）」

「かしこまりました、少々お待ち下さい（イタリア語で）ry」

しばらくして、ピザが運ばれてくる。

シアンが、食べようとすると…

ガタン！椅子を勢いよく立つ音が聞こえてきた。
それを聞いて店に居た人達は、びっくりする。

「おお！このピザうまいな！」
シアンを除いて

トコトコトコ

その立ちあがった人は、シアンの方に来る。

「よう！春は、よくもやってくれたじゃねーか！！（イタリア語）」

「ここのピザ、ほんとうまいな！」

啖呵を切る、イタリア系マフィアの下っ端だがシアンは、気に留める気もないようだ。

「…おいおい、無視するとはいい度胸だなああ！！」

マフィア…の下っ端は、拳を振り上げる。

しかし、その拳がシアンに届く事はなかった。

何故なら、シアンに届く直前に千冬さんが受け止めていたからだ。

「な！…なんだよ？」

下っ端は、千冬さんが放つオーラのものにひるみながらも言う。

「貴様は、今シアンに手を上げようとしていたな…？」

千冬さんのおそろしい声で下っ端は、ビクッと肩を震わせる。

「お、おう。だからどうした？」

下っ端の声は裏返っている。

「…フ…フハハハ、」
急に高笑いを始める千冬さん

「ヒッ！」下っ端は、失禁してしまう。

「そうか、じゃあもしかしたら、シアンが殴られて死んでしまうかも知れなかったよな？」

「だったらよ…殺されても文句は言えないな？…てことで殺す！！！」

「そう言つて、千冬さんが下っ端を殴りつけると下っ端はきれいな放物線を描きながら、何故かパンツ一丁になって飛んでいく。」

ドサ、下っ端は完全に伸びてしまった。

「……」……「……」……それを見ていた人たちは、言葉を失ってしまった。

だが、それも一瞬の事で、次の瞬間にはざわめきに変わっていた。

「おいおい、やべーよ、あの下っ端ボンゴレファミリーのやつじゃないか？」

「え！まじかよ？さっさと逃げようぜ！」

そして、周りの人間が徐々に消えていく。

そこでようやく正気に戻った千冬さんが事の重大性に気付く。

「…もしかして…そうとうやばい事してしまったのか？」
流石の千冬さんも額に汗がにじむ。

すると、どうやら結構上の方の人間が何時の間にか居た。
数は、だいたい20人前後。

「おい！家の者に手エ出してくれたみたいだな…？（イタリア語）」

「ただじゃおかね…ぞつてああああ！！！」

剣呑な雰囲気話していたが、急に驚きの声に変わる。

「お、おおお前は…」終いには、顔を蒼白にする。

「あの時の…ピザ事件の時のガキ…」

そう言う行つて彷彿させられるのが、シアンが単身イタリアに行つた時の事だ。

「ああ！そう言われてみれば…」

「あの時の恨みを晴らさせてもらう！」

「……………うおお！！……………」

結構上の方のマフィア達は、一斉にシアンへ襲いかかる。
しかし、ドーン、マフィアたちは吹っ飛んで行った。

「……………グオオ！？……………」

「シアンに攻撃する奴は、許さん！！！」

そう言つて千冬さんがマフィアたちをオーバーキルする。

吹っ飛ばされて行くマフィアたち…

彼らの心は、同じだった。

「あ、悪魔だ！」

その後、イタリアマフィアの間では、藍川シアンは、ブリュンヒルデ世界最強
さえも顎で使う事が出来る。という噂が流れて、シアンは、最強で
最凶の男となった。

その頃のシエン達のアジト…

幹部たちは、また驚愕させられていた。

理由は、昨日より無人機の数 $1/3$ 程度増えているからだ。

「一体、どうやって？ コアの数はどうしたんだ？」

最近出番がないジェノスは感嘆というより疑問を口にする。

「それは、私がコアを作ったからに他ならない。」

と、突然現れたシエンが何故か某ゼロの恰好で登場する。

幹部は、皆言葉を失う。

「いやね、折角テロリストになったんだからね、楽しもうと思って
…」

シエンは皆の冷たい視線もあまり気にならないようだ。

「まあ、いいです。所で… コアを制作出来るのは、確か篠ノ之束だ
けだったと記憶しますが…」

いち早く石化から復活したジェノスが質問する。

「まあ、一般的にはそうだ…しかし、私ほどの優秀な科学者となればそんなに難しい事じゃない、それにまだ、コアを作れる科学者はひとり居る。」

尤もそいつは、コアを作る気はないらしいがな…」
説明を終えると、息を吸い、少し大きめの声で告げる。

「明日の進軍目標は、その科学者だ！いくらコアを作らないと言っ
ていても

人の考えなんて簡単に変わるからな…潰しておきたい、
その科学者もバカじゃないだろうからな…防衛システムは嚴重だろ
う…」

よって、明日の科学者攻略戦にこの戦力をすべて投入する。

そう、すべては、明日から始まるのだ！」

そう締めくくるとシエンは、マントを翻し去って行く。
その後ろ姿は、なんだか哀しかった。

第34話〈擲縄〉（後書き）

しばらくは2日に1回もしくは、3日に1回の更新ペースになると思いますので、ご了承ください。

次回予告

シアンと千冬は、専用機の研究所に向かう。

そこで待っていたのは…

次回、反逆の名を冠するIS最終章第35話〈絶望の始まり〉

第35話 絶望の始まり (前書き)

批判はちよつと…

これは、お気に入り件数減るだろうな…orz

第35話　絶望の始まり

イタリア旅行3日目、シアンと千冬さんは

シアンの専用機関開発機関からの呼び出しをシアンが受けたので千冬さんは、その付き添いと言う事で着いて行った。

今時珍しい、手で開くタイプのドアを開けるとプリン伯爵が出迎えた。

「いらつしゃい、国立IS研究機関藍川シアン専用機関開発部門へようこそ」

長い正式名称を一語一句間違いに言えるのは、やはり頭が良いのだろう。

「こんにちは、で？なんですか？用事って？」

シアンは、早速本題に入る。

「うん、それはね、エネルギーウイングを標準装備出来るようになったから

リベリオンを完全に新しくしようと思ってね…どう思う？

もちろん、武装はそのままだよ。」

と、とんでもない事を言う。

「…どのくらい時間がかかりますか？（軽く、1週間はかかるかな？）」

シアンは、大体の時間の見積もりをする

「うーん、今日中にできるよ。」

だが、その見積もりはあっさり崩される。

「……え？」

そのあまりの速さにずっと冷静に聞いていた千冬さんも驚く。

「だから、今日中にできるよ〜って。」

「は、はいですね…お願いします。」

シアンは、石化から復活しリベリオンを渡す。
プリンはそれを受け取ると早速作業を始める。

「いや〜実は、もう機体のフレームは出来てるんだ、あとは、
コアを移して、武装をレベルアップさせてっと。」
高速の作業に驚いていると、研究員が話しかけてきた。

「あの〜」

「はい？」

「ああ、あちらのシミュレーターでデータ取りを行ってくれませんか？

お二人で対戦して頂けるとうれしいです。」

研究員は、シミュレーターの方を指さしながらお願いする。

「いいですよ〜」

シアンは、即答し千冬さんを連れていく。

「ありがとうございました〜…これでいいデータが取れる…フフ」
最後の方は、とても小さな声だった。

シアンがシミュレーターに乗り込むと、千冬さんはすでに準備が完了していた。

「待たせたね」

「いや、別にいい。それより、シアンとESで戦うのは初めてか？
(シミュレーターじゃないとシアンを攻撃出来ないからな…)」

「そういえばそうだな…(俺が、千冬を攻撃出来る訳ない…)」
二人して同じ事を考えている。

「そろそろ始めるか？」

「ああ、では…」千冬さんは、臨戦態勢に入る。
すると、すごい威圧感を放つ。

「(っ！これが、^{ブリュンヒルデ}世界最強か…)」
シアンは、手に汗をにじませる。

「尋常に、勝負！」千冬さんは、その一言を合図に^{イグニッションブースト}瞬時加速
を使う。ちなみに使用機体は、打鉄だ。シアンも公平さを保つため
に打鉄を使っている。

「！っ」とシアンは、^{イグニッションブースト}瞬時加速を使って近接ブレードで斬りかかっ
てきた

千冬さんを同じく、近接ブレードを使い何とか捌く。

「…よく捌いたな(シアンの剣の腕もなかなかあがったということ

か…）」

「いや、捌くので精いっぱいだよ…（いって…ていうか…これホントに

シミュレータ か？痛覚があるんだが…）次は、こっちから！」

シアンも^{イクニッションフースト}瞬時加速を使い間合いを詰める。

そして、斬りかかるが簡単に捌かれ、カウンターを喰らう。

「グッ（千冬TUEEE!!）」

「どうした？シアン？もう終わりか？」

千冬さんは、シアンを挑発するような事を言う。

「（負けれないな…）今からだ！」

シアンは、剣では勝てない事を悟り、今度は何故か入っていたアサルトライフルを使う。

ズガガガガ

突然の事で千冬さんも対処しきれない。

「！卑怯だぞ、シアン！（そんな子に育ては覚えはないぞ！）」

「……（無心、無心、無心）」

卑怯だと言われても尚、アサルトライフルを使う。

「クッ（シアンめ…なかなか卑怯だな…だが、この程度では私を倒すことは出来ん！）」

千冬さんは、初めの方こそ被弾していたが、だんだんと当たらなくなってきた。

「（や、やべえ…避けられて来てる。こっとなつたら…」

千冬の見様見真似だが…同時瞬時加速ダブル・イクニッション・ブースト

を使うか…」

シアンは、アサルトライフを仕舞うと近接ブレードを呼び出す
そして、同時瞬時加速ダブル・イクニッション・ブーストを使う。

これは、千冬さんの特技なので

千冬さんも、焦るがすぐに冷静さを取り戻し冷静に対処する。

距離、20メートルほどの所でお互い向き合う体制になり、

「（！私の特技をまねするとはな…だが、まだ完成度が低いな…）」

「（…思ったより遅いな…いずれにせよ、これで終わるかな…もうSEがない。）」

「シアン、これで終わりにしよう。」

そう言つて、千冬さんは抜刀術の構えをする。

「…そうしよう。」

シアンも抜刀術の構えをする。

そして、にらみ合う事1分ほど、今の二人にとってこの時間はとても長い物になった。

そして、上からひらひらと落ちてきた木の葉が地面に着いた時

二人は、同時瞬時加速ダブル・イクニッション・ブーストを使い、抜刀術を撃つ。

「はああああ！！」

「うおおおお！！」

二人の近接ブレードが交わった後、SEが残っていたのは千冬さんだった。

そこで、シミュレーターが終わった。

そんな感じに2戦目はラファール、3戦目は、テンペストで対戦した。

ラファールでは、銃器の扱いに慣れているシアンが勝ったが砲撃が他のテンペストでは、動きが鈍く、シアンはうまく扱えなかった。

そして、4戦目を始めようとした時、映像が途切れた。

「!?」「二人とも疑問に思い、シミュレーターを降りる。すると、ドゴンと爆発音が聞こえる。

「!?なんだ?…何があった。」シアンは、すぐ近くに居た研究員に事情を尋ねる。

「え!ああ、なんか、どこかのテロ組織が攻撃してきたみたいですよ!」

今は、プリンさんの防衛システムのおかげでなんとかやってますけどどうなるかは…」

「!!」「二人は、さすがに驚きを禁じ得ない。そこに、プリンさんがやってくる。

「シアンくん、今、相当危ないんだけど、このラファールでだけで、

出撃できる?今、この場にIS動かせる人君しかいないんだ。」

プリンさんは、待機形態のラファールをぶらぶらさせながら言う。

「はい、出れま」

出れますと言いかけた時、千冬さんによって遮られる。

「いや、私も動かせる。」

「千冬！」シアンは、突然の事で驚く。

「私が出撃しよう、シアンは、早い速度の機体には慣れているからなラファールは、難しいだろう？」

「……………」的を射ているような意見にシアンとプリンともに押し黙る。

「じゃあ、そうしてもらおうかな」

プリンさんは、少し考えたのちラファールを渡す。

丁度その時に副キャップと呼ばれている研究員が慌ててくる。

「しょ、所長！」

「どうしたの」

「これを！」そう言って差し出したのは、

小型ディスプレイでどこかのカメラとつながっているようだ。

「……………」

そこで3人は、絶句する。

その映像は、なんと50機近いISがこっちの方へ向かってくる映像だった。

「…なんですか？これは！」シアンは、混乱気味だ。

「…落ち着け、シアン。」

これは、早く倒した方がよさそうですね…」

やはり、こういう場面ではシアンより千冬さんの方がはるかに落ち着いている。

だが、それも結構無理をしている部分がある。

「それは、そうだけど…手段がねえ」

ミサイルは、さっきから撃ってるみたいだけど…あんまり意味をなしていないし…」

映像は、大量のミサイルをいとも簡単に破壊していくIS達だった。

「リベリオンは、どのくらいで改修が終わりますか？」

千冬さんは、苦い顔をしながらだが聞く。

「うーん…あと、急げば30分で行けるかな？」

プリンさんが、歯切れが悪い言い方をするほどなのでかなり無理をしないといけないようだ。

「…では、私が時間を稼ぎます。」

その間にシアンのリベリオンの改修をお願いします。

シアン、終わり次第来てくれよ。」

千冬さんは、覚悟を決めている様子だ。

それを感じ取ったのか、シアンもプリンさんは何も言わなかった。いや、言えなかった。それと同時にシアンは、なにも頼るしかでき

ない

自分に苛立ちを覚えているようにも見えた。

研究所のハッチ…

そこでは、ラファールリバイブ・イタリア仕様を纏った千冬さんが居た。

『それでは、ハッチを開けます。すぐに閉めますので気を付けてください』

そんな声が、千冬さんのラファールに聞こえてくる。

「了解した。…そうだ、シアンにつないでくれ。」

『…わかりました、ですが2分が限界です。』

「十分だ、頼む。」

『はい』

そして、すぐにシアンに代わる。

「何？千冬？」

「ああ、大した事はないんだ。ただ…」

「ただ…？」

シアンは、めずらしく齒切れの悪い千冬さんに疑問を覚える。

「いや、やっぱりなんでもない！」

「?まあ、いいや。気を付けて！」

「ああ、では行ってくる。早く頼むぞ！」

そう言うと千冬さんは、開いたハッチから出ていく。

5分ほどで敵と交戦した。

「結構早かったな…残り時間は、25分。守りきらないとな…」

千冬さんは、特別に装備させた荷電粒子砲を放つ。

ジジジ、ドオオーン。

前に居た敵を焼き尽くす。

「すまん…こつちも必死なのでな…」

千冬さんは、有人機だと思っていたので謝る。しかし、全く血が出ていない事に気付く

不信任を抱く。

「まさか、無人機!? (いったい誰が…)」

そんな事を考えていると、残った無人機が千冬さんに襲い掛かる。

「(荷電粒子砲は、熱で連射はできないな…では、やはり私には刀だな…)」

そして、千冬さんはプリンさんが作った、雪片によく似た刀を呼び出す。

「はああああ!!」

千冬さんは、襲い掛かってくる無人機たちを相手に善戦はおろか圧倒している。

研究所では、シアンと一部の研究員と一緒にディスプレイを見ている。

「さすがは、プリュンヒルデ世界最強だ!行けるぞ!」

研究員たちは、騒ぐ。

シアンの不安も徐々に晴れていく。

「(なんとかなるかな?)」

場所は戻って無人機との交戦域…

「(やっと、底が見えてきたか…シアンが出てくる間もなかったな…)」

誰もがそう思ったはずだ。

しかし、その考えはすぐに改めさせられる。

さらにやってきた70機の無人機によって…この時の残り時間10分。

「!?!なんだと?」

千冬さんもこれには、冷や汗を浮かべる。

数だけではないことは、シアンの専用機開発機関は、かなり腕のいい研究者で固められている。そんな彼らからしてみれば、新しく来た無人機とさっきまでの無人機の強さの差ぐらい見ただけでわかるようにうで

絶望感をあらわにしていた。

当然千冬さんも直感で何かが違う事には気付いている。

その瞬間、ゆつくり飛行していた無人機たちが急にスピードを上げ、高出力ビームを一斉射撃してきた。

「クッ!」千冬さんは、避けるが如何せん数が多すぎるよけきれないものも出てきてしまう。

ドガン、被弾した個所が爆発する。

「グワッ!」

千冬さんの体制が崩れてしまう、その隙を無人機が狙わないわけがなく

大量のビームが千冬さんを襲う。

ドガ
ン

煙が晴れると、ほとんどの装甲がなくなり、かろうじて飛んでいる状態の千冬さんが居た。

「……………」

体のいたるところからは、出血している。今すぐ手術をしなければ命にかかわるような傷だ。

ピュン、千冬さんのところに通信が入る。
プリンさんだ。

『…言いにくいんだけど…』いつもの飄々とした態度はない。

「何で…すか？」千冬さんは、息も絶え絶え聞く。

『ISのコアってISを動かしてる動力つまり、
すごいエネルギー量を生み出しているんだ…それをすべて爆発に費やすと

どうなるかって、実験した事があるんだ。』

プリンがにがにしく言うと、一部の研究員もにがにがしい顔をする。

どうやら、何があつたのかしってるらしい。

『すごい、爆発だったよ…でも、そこには何も残っていなかったよ…
塵一つとして残さなかったんだ…その爆発力を使えば、その無人機をすべて倒せるけど…』

そこまで言つと、シアンがプリンさんに詰め寄る。

「おい、プリンさん！それって千冬に…死ねって言ってるのか！！」

そう言つて、怒りを隠せないシアン。

だが、それは千冬さんによって留められる。

「やめろ、シアン…っ！」

「千冬！」

「プリンさんの言つた通りだ、私がこのコアを爆発させればお前達…そこに居る者全員助かる…ゲホ、ゴホ…」

どっちにしろ、私はもう無理だろう…プリンさん、自爆コードは？」
千冬さんがそう言つと、シアンは、もう何も言わなくなった。

「pudding」簡単にそれでいてやさしい声でコードを言うプリンさん。

「了解だ、」千冬さんは、すぐに入力する。

すると、コアが紅く煌めきだす。

それは、本当に爆発寸前という感じでとてもきれいだった。

シアンには、とてもきれいには見えなかったが。

「…シアン！」千冬さんは、最後の力を振り絞つて、シアンの名を呼ぶ。

「愛してるぞ！」

そう言つと、コアはすべての無人機を巻き込み爆発した。

「俺もだよ…千冬。」シアンは、へなへなと地面に座り込み

「うあああああ！！！」大声で泣いた。

しばらくすると、研究所のディスプレイ及び世界の主要都市のディスプレイに
シエンの顔がでかかど出てきた。

『こんにちは、全世界の皆さん！
私は、藍川シエン。この世界の救世主^{メシア}です。』
そういうと、全世界の人たちは鼻で笑う。
しかし、シアンは違う。

「！……！！（兄貴！？）」シアンにとっては
ショッキングな事が二つもほぼ同時に起こり、シアンはかつてない
ほどの
ダメージを受けたようだった。

『皆、鼻で笑ったでしょう。それもその筈です。
でも、これを見たらどうでしょうかね？』
すると、シアンではなく先ほどの無人機対千冬さんの映像に変わった。

そして、映像は千冬さんが大量のビームを受けた所で切れる。

「……………」

世界が静かになった。

しかし次の瞬間には、歓喜と絶望、好奇などさまざまな歓声が上がった。

しかし、それは当然だ、世界最強である織斑千冬が敗れたのだから。女尊男卑に染まった、女子たちはこれからを恐れると同時に絶望を女尊男卑に抗う者からしてみれば、歓喜

女尊男卑の影響を受けていないものからすれば、好奇した。

世界が騒ぎ出した頃、通信が戻る。さつきと違いシエンのバックにラウラ達幹部が出てきている。もちろんバイザーで顔を隠しているが…

『今ので分かっていたただけだろう、私たちが絶対的強者である事を』

刮目せよ！女尊男卑に染まった、女子たちよ！

そして、喜べ今の世界に不満を持つ者たちよ！

私たちは今、ここに世界への反逆を宣言する。

それは、今の女尊男卑の世の中の終わりを意味する。

最後に言う、よく聞いてくれ！

この我ら世界に反逆する者の名を、

その名はスペラーチャ！』

そして、そこで映像は切れる。再び世界が静まった。

今度は、歓声ではなく、叫びだった。

喜びの叫びを上げる者、悲しみの叫びを上げる者、まちまちだが

皆心のどこかで確信していた。

これから、世界が変わると…

T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d

第35話〈絶望の始まり〉（後書き）

シエン達の組織の名前は、イタリア語で幸福という意味です。

それよりも、すいませんでした…

次回予告

愛する人の死、唯一の肉親がテロリスト…

シアンは、この苦難を乗り越えられるか？

次回、反逆の名を冠するIS最終章第36話〈絶望を乗り越えて〉

藍川シエン

> i 3 5 3 4 0 — 4 1 7 9 <

第36話、絶望を乗り越えて（前書き）

減ったお気に入り登録件数が戻っていたことに
すこし驚くとともに感激していました。

しかし、今回も減ると思いますね…orz

+

第36話　絶望を乗り越えて

シエン率いるテロ組織『スペラーチャ』のデビューから3日たった。しかし、未だに動きはない、それは嵐の前の静けさのようで気味が悪かった。

イタリアのホテルにシアンは、ずっと引きこもっていたがイタリアに滞在出来る日数がいっぱいになったため、イタリア政府の人間に連れていかれながら、日本へ帰った。

飛行機を待っている際、プリンさんが来た。

「…これ、リベリオンの改修機、テンペストディリベリオン・サターナ

使う時が来ると思うから、渡しとくね。じゃ〜ね〜。」

そういつてリベリオンを渡すと帰って行く。
シアンは、それを光のない目でみていた。

そして、イタリアから日本行きの飛行機はシアンを載せて飛び立って行った。

空港に着いてからは、車に乗ってIS学園に向かった。

IS学園に着くと、とても静かだった。
だれもが、スペラーチャの件であり気乗りしないだろうし

何より、千冬さんの死は学園の生徒への精神的ダメージはそれなりに大きいのだろう。

ここで、イタリアの人と別れ学園寮の1001号室に入るとそこには、一夏が居た。

「…一夏」シアンは、何日かぶりに口をあける。

「シアン！帰ってきたか…それよりあれはなんなんだ！…」
一夏の指すあれとは、間違いなく千冬さんのことだ。

「……………」
シアンは、黙ってうつむく。

「黙ってちゃんもわからないだろ？」

一夏は、シアンをせかす。するとシアンは、生気のない声で答えた。

「あの、動画の通りだ。それ以上も以下もない…一人にさせてくれ…」
そう言うと、一夏を追い出す。

「まで！まだ話が…」

ボタン、一夏が言い切る前にドアを閉じる。

「……………ハア（重症だな…ありや、また明日来るか…）」
トコトコトコ

シアンは、一夏が去って行く足音を聞いた後
荷物を置き、地面に座り込む。

「……………（分かってるんだ、こうしてても何にもならないって…）」

千冬の遺品整理くらいしないとな…」

シアンは、遺品整理を開始する。

ほとんど私物を持ち込んで居なかったので整理するのは、
収納棚ぐらいだ。

「……………」

整理をしていたら、何かの紙がでてきた。

「（なんだ？これ？）」

よく見ると、シアン宛の手紙の様だ。

「（俺宛？何でだ？口で言えがいいのに…）」

とりあえず、自分宛だったので見てみることにした。

「（えーとなになに…）」

手紙の内容…

シアンへ

これは、まあ遺書のようなものだ。

お前がこれを読んだ時私が死んでいたら続きをよんでくれ。

む？読んでいるのか？ということは、私は死んだのだな？

シアンのことだからどうせ落ち込んで引きこもっているんだろうな？

まあ、落ち込むのは仕方ないとして…

何時までそうしてるつもりだ？

全く、お前は私が居ないと駄目だな…

よく読めよ…。

目を開けて前を見る、足に力を入れて立ち上がれ、深く息をしる。
お前には、まだやるべきことがあるのだろうか？
がんばれ、諦めるな、最後まで走り続ける！

と手紙は、締めくくられている。

「……………（何やってたんだろっ？俺は、あゝようやく踏ん切りがついたな…
やるべき事が…兄貴…兄貴を留めないとな…兄貴のやり方だと確実にたくさんの人が死ぬ）」

シアンは、立ち上がり、涙を拭いて深く息をする。
そして、きつちりと目を開ける。

「（あの、無人機たちを破壊するにはまずは、リベリオン…サターナだったな？
あれに乗らないとな…）」

そう思い直し、リベリオンを指に着け、第3アリーナへ向かう。
そこでは、必死に白式に乗り、一夏ラヴァーズと戦っている一夏が居た。

「……………（一夏もがんばってるな、俺も入るかな？）」
シアンは、リベリオンを展開し一夏の戦いに介入していく。

「……！（シアン！）もういいのか？」

「ああ、踏ん切りがついた。今日から、新しくなったりベリオンで戦おうと思う。」

そついうと、リベリオンがよく見える様にクルリと回転する。

「おお！なんか、かつこよくなつたな！」

一夏にそう評価させる外見は…

今までの紫と赤のカラーリングをそのままに、エネルギーウイングの形状を悪魔の羽の様に
してあつた。

「ああ、（まあ、エネルギーウイングのリミッター外すと大変なことになるんだけどね…

形状的にも、俺の身体的にも…）じゃあ、とりあえず模擬戦やろう
！」

「おう、いいぜ！」

そうして、この日は模擬戦ばかりして終わった。

シアンは、一夏と別れ、1001号室に帰る。

「ただいま…やっぱりさみしいな…」

そついいながらもその顔に悲しみの表情は浮かんでいない。

そして、テレビを付ける。

ちょうど、ニュースがやっていたが急に画面が暗転したと思うと
シエン達、スペラーチャの面々が居た。

『ごきげんよう、世界の皆さん。』

「…兄貴…！」

『私たちは、明日、全世界の主要IS開発機関及びコアを所持している

機関に対して、攻撃を行います。それが嫌ならば、1時間後にコアを破壊し私たちに差し出す

もしくは、私たちに抵抗する事です。

それでは、明日…私たちは、この世界に天誅を下す。

その瞬間をしっかりと見ておけ。』

そこで映像は切れる。

「…明日か…（結構、急だな…だが、こっちも準備は出来ている。）
チエックをかけたつもりかもしれないがな、兄貴…掛けられたのは
お前の方だよ…！」

これは、兄弟の完全な決別だった。

第36話〈絶望を乗り越えて〉（後書き）

いやあ、すみません。

まあ、もうすぐ完結予定なので最後まで読んでいただけたらうれしいです。

あと前の話の所にシエンの絵が下手ながらも乗っております。

次回予告

一方的ではあるが決別した兄弟

その頃、ラウラとジェノスは…

次回 反逆の名を冠するIS最終章第37話〈兄妹〉

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4068x/>

反逆の名を冠するIS

2011年11月27日17時50分発行